

である。斯う云ふ風に抑へれば何しろ生き物であるから自分の持つた精力は何處かに漏らさずには居れぬ。だから私慾の方を抑へつけければお互固から佛になれる立派な性質を持つて居るのであるから、此方面に向つて精力を發揮するより外に途はない。これが謂ゆる精進である。併し此精進も、一時の精進一時の勉強は出来るけれども長い間はむづかしい。何しろ生身の身體と云ふものは手前勝手な物で間がな隙がな私慾に促される、それを豫防してさうして終を完うさせるやうにして行くと云ふことは全く忍耐の力である。處が私共の經驗に依ると其忍耐すべき時に氣がつかぬ、何時忍耐して宜いか其忍耐すべき場所に氣がつかぬ、此處は忍耐すべき所であると云ふ其場所に心付かぬ、忍耐が出来ずにひよつと飛出して了ふ。實に困難なものであるから、各自が自己の精神状態を常に反省するといふ事が必要である、自分の心理状態は如何なるものであるかと云ふことを十分に探究して置いて、其私慾の起る度にそれを抑へて行く、唯だ抑へても容易に言ふ事を肯かぬ時がある。其時には信仰の力に懇へるといふことが一番勢力がある。勿論其信仰の上に於ても、理を信するものと佛の慈悲を信するものとある。道理を信する方を自力教と云ひ佛の慈悲を信する方を他力教と云ふ、淨土教などは佛の慈悲を信するものである。どうぞと云つて、佛の大慈悲にお頼りすると、忍耐を用ゐずして忍耐以上の効果を奏することは明かな事實で

ある。是は自分自らが修養したのであるから、自分自身を證據に立て、お話ししても決して差支ないことである。それであるから、此自強不息と云ふことは總ての修養法の根柢であり、又成功の手段として其中心に居るものであるといふことは、是は確く信せんければならぬ事であらうと思ふ、然るに明治天皇様は、畏くも此國運發展の詔を發せられて其方法として御教へ下さるのに種々の條件を御立て下された、「上下心を一にし、忠實業に服し、惟信惟義、華を去り實に就き、荒怠相誠め」と、種々雑多の方法を御示し下されて、一番終りに至つて「自強不息」と云ふことを以て終りを御結びになつたと云ふことは、如何にも用意周到である、是位有り難い法門は他に無いと言ふても宜しいのである。佛敎の全體から申しましても淨土敎の修養法から見ましても其他實際の事實から見ましても、此「自強不息」と云ふこと程大切有り難い御言葉はない。誰でも御同様に此世に人間と生れ出て、成功を期さぬ人は一人も無い、若し成功を期するといふことであるならば、其自分の修養すべき途を撰ぶことは、前々から申上げた方法に依つて、是は十分に出来る話である、其撰ぶ事の出来た上に於て、之を運轉し活動して行く上に於てはどうか自強不息と云ふことは、前にも申しましたやうに運轉士であるから、此運轉士たる自強不息と云ふことが一つ缺けて居つたならば、如何なる名法も悉く水泡に歸して了つて何の用も爲さぬこ

とになる。謂はゞ是は丁度心棒である。此心棒であるところの一つの振子が、取れてしまつたならば何の用も爲さぬのである。御同様此自強不息と云ふことが、何の仕事の上に於ても根柢であるといふことを諒得し十分に修養して欲しいと思ふ。

### 淬 礪

戊申詔書の中に、「抑々我が神聖なる祖宗の遺訓と我が光輝ある國史の成跡とは炳として日星の如し寔に克く確守し淬礪の誠を輸さば國運發展の本近く斯に在り」と云ふ御言葉があるが、前回からお話致して此になると此處が結論とも申すべき所で、非常に大切な所になつて居る。そこで此要點を摘んで見ますると、淬礪の誠と云ふことで宜からうと思ふので斯う云ふ標題の下にお話致して見やうと思ふ。

誠と云ふことは何か道徳上の話をするの大抵誠と云ふことを言ふので極り切つた話である。そんな事は聞かないでも宜いと思召すやうな感じも無いとは限らぬ、私共にした所で又かと思ふやうな氣持がする、併しながら大切な事と云ふものは何遍繰返しましてもそれが完全に行はれると

云ふことは難いのである。同じ事を何遍も繰返し繰返し注意して行くより他に途がないのであるから、耳にも飽き、口にも飽く程の事であつて其事が實地に行はれないと云ふたならば御同様に實に腑甲斐ない話である。併しながら是はどうも已むを得ない、だからやはり繰返し繰返し注意をするより他に途がないと云ふことになる。それで私は此誠と云ふことは良心の意思とでも謂ふべきものだらうと思ふ。誠と云ふ時には終始一貫して行かなければならぬ。然れば誠とは何ぞやと云ふと、御同様に懐いて居る良心の意思であると云つて差支なからうと思ふ。而して是がやはり天然の法則に従ふものである。儒教などでも誠は天の道と云ふことを言つてある。詰り天然の法則に従ふのである。だから吾々は此世に人間と生れ殊に人間仲間の自稱とは言ひながら人は萬物の靈長と云つて居る。して見ると吾々は此世界の中で靈ある所の最も尊いものであるといふ事だけは御同様に自任して居るのである。果して天然の法則が誠であるとしたならば、其靈長たる吾々の立場として其天然の法則に従ふことが出来ぬと云ふのは甚だ腑甲斐ない話である。是はどうしても吾々の靈長たる人間の責任を盡して天然の法則たる誠に従はなければならぬ筈である。「誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり」實に盡した言葉であると思ふ。自分の物として之を行ふことが出来ぬと云つたならば實に靈長たる資格に對して恥づべきことでないか。

そこで誠を履行するに當つては曾に天然の法則と云ふばかりではない、佛教の上から言つても詰り誠と云ふものを履行するに過ぎないのである。但し其誠を履行するに當つて段々程度がある或は凡夫とか或は賢者とか、或は聖者とか云ふやうなものがある。即ち、



斯う云ふのである。そこで此菩薩と云ふことは凡位の中にもあるのである、詰り是は誠を履行する程度を言ふのであるが、此凡夫と云ふ名稱は妙な名稱で、よく世間で平凡などと稱し、優れたものではないと云ふことである。所が佛教の方で凡夫と云ふのは普通並であるといふ意味よりはもつと悪い事になつて居る。まあ凡夫と云へば幼稚の意味に使つて居る。弘法大師は凡夫とは狂酔の義、酔つ拂つた氣狂だと云つて居る。是はどうも激しい、ちつと酷ではないかと思ふ位である。何故氣狂かと云ふに、あの氣狂も一種の病人に違ひないのであるが併しながら他の病人は大概自己の病氣を自認して居る、お腹が痛いとか、頭が悪いとか、お臂が痛いとか、自分の病氣

を知つて居る。處が、氣狂になると自分の病氣を病氣と知らない、平氣の平左で暴れて居る。之に就て先年面白い事實に出つ喰した事がある、田舎の方で或る相當の家の相續人で二十五六歳になる人、勿論女房もあれば子供もあるが、只だ一人で兄弟も何にもない、両親は揃つて居る。所がそれが發狂したので假令身代を潰しても此療治をせんければならぬ。それには田舎では發狂者を療養すべき設備のある所がない、どうしても東京に連れて行かんければならぬといふ事になつたが、東京に行くにしても他の者が連れて行くのも厄介な話であるどうしても両親が連れられるより外に途はないと云ふ事になつた。そこで両親がお前は身體が悪いのだから、東京に行つて療治をするのだ、其積りで居れと云ふことを言つた。所が氣狂奴大變に威張り出した。私に何處に病氣がある此通りだと云つて角力のやうに四股を踏んだり腕を振つたりして私には決して病氣はないそんな所には行くものかと云つて意張り出し何とも始末に行かぬ、そこで親類の中に頓智の良い人があつて、なあにあなたを病氣と云ふのではない、實はお前さんも知つて居る通り、お前さんのお母さんはお若い時から身體がお弱いので醫者が言ふにも今度は是非療治をしてしまはなくてははいけまいと言はれる、それには田舎では仕方がないから東京で療治するより外はない、それにはお父さんが連れて行かんければならぬが、お父さんも年を召して居らしやるしお一人では

お困りになる。それでお前さんにも看病のためにお母さんを連れて行つて戴きたいと云ふのだ。親の看病の爲めに東京に行くのであるから、お前さんは何もさう怒らなくても宜い筈である。云つて、氣狂を瞞したのである。すると直ぐに呑み込んで了つて、さうですかさう云ふ譯なら行つて上げませうと云つて出掛けて来たと云ふことであるが随分おかしい話である。誰のために皆んなが心配して居るか其氣狂の爲めである、所が先生一向平氣な顔をして居る、私には病氣はない、それでは仕方がない行つて上げませうと云つて出掛けたと云ふのである。氣狂と云ふものはどの氣狂でもそんなものだらうと思ふ。所が今日お互は凡夫であつて身體には病氣はないかも知れぬが心の中にはうんと病氣を持つて居る、氣に入つた物を見ると欲しくなる氣に入らなければ厭になる。都合が悪くなれば人の所爲にしてしまふが都合が好くなれば自分の所爲にして褒めて貰ふ褒めて呉れなければ自分で法螺を吹くと云つたやうな鹽梅である。是を貪瞋癡慢と云ふ、氣に入つた物は欲しがると是は貪である、氣に入つたものが手に這入らなければ厭になる是は瞋である、都合の好くなつた人の成功を羨む是は愚癡である、都合が好ければ何でも自分の所爲にして褒めて貰ひたい是が慢心で皆んな病氣である。是を最も重い病氣としてある、さう云ふ病氣を御座るにウンと背負ひ込んでそれで平氣で居る。あゝ云ふ善い物である、私の欲しいのは無理はないと

云ふ。あんな事を言ふんだもの私が癡癡を起すのは無理はないでせうと云つて威張つて居る、斯う云ふ風に間が悪いのですから私が愚癡をこぼすのも無理はございません。さう云ふ鹽梅に何でも自分のする事が間違つて居つても自分の思込んだ事、自分のする事には間違はないと思つて居る。さう云ふ鹽梅式であるから是は氣狂と言はれても申譯はないと思ふ。それから酔つ拂ひと云ふ字も書いたが、是もそれと大概似て居るだらうと思ふ。お酒などを戴くと酪酊仕りましたなどと云ふ時にはまだ酪酊はして居ないそれをもう一杯もう一杯と飲んで居ると本統に酔つてしまふ、私は一升や二升位飲んでも酔つた覺えはない、さあもつと持つてお出でなると云ふ、さうなるとも本統に酔つて了つて居る。凡夫と云ふものは自分の過失が分らぬ、其有様が恰も氣狂か酔つ拂ひである。併し凡夫と云ふのは普通の意味から云へば幼稚の意味で頑是なしである。まああなたの方の中にもお小さいのがお有なさるでせうが二歳や三歳位の子供は野放しにして置くと碌な事はしない、危ない事はかり仕たがる、火鉢に掴つたり、上櫃に這ひ出したりして、危ない事はかりやつて居る。兎に角大人の心から見て居ると、逆も見て居られぬ。自分の子でなくてもちつとそれを見ては居られない。それは何故に見て居られぬのであらう。理窟から云へば可愛想であるといふのであらうが、併し其刹那の間には可愛想であるとか何とか考へて居る餘地

はない唯だはらくして見て居られぬ、よくよく考へて見ると、兎に角大人の心からはよく分り切つて居る。剃刀を手に握れば、直ちに手を切つて痛い思ひをせねばならぬと云ふことは眼の前に分つて居る。今針を啣へた、あれを呑んだならば、咽に詰つて飛んだ事が出来ると云ふ事は眼の前に分つて居る。分り切つて居るからどうしても見て居らぬ。今日私共が平氣の平左でやつて居る事も、若し悟りのある聖位とか佛果に居らせられるお方の眼から御覽になつたならば何の事はない、一歳か二歳の頑是なしの子供の伎業を見て居ると少しも違ひないと思ふ。詰り見て居れぬと云ふ所からあゝ云ふ教と云ふものが成立したものに相違ないと思ふ。

そこで、此教の御指圖と云ふものはどうかと云ふと、誠を精勵せよと云ふことが其根柢になつて居る。又私共の心の中にも其誠を行ふべき性質はちやんと具へて居る、或は佛性即ち佛になる性質と云ふものはちやんと具へて居る。其性質が活動するのが詰り良心である。佛教の方から云へばいろ／＼な名目が付いて居る、慈悲心であるとか孝順心であるとか、いろ／＼名稱は變つて居る。併しながら世間普通の倫理學などの上から云へば良心である。これはどなたも持つて居る。だから誠と云ふものは實行の出来ぬ筈はない。無い物を造れと云ふのではない有る物を利用せよと云ふのである。寶の持ち腐れになると云ふのであつて、折角物を持つて居る以上は其持

つて居る物だけは用立てるやうにするが宜い。何故それを完全用立てることが出来ぬかと云ふと、脇に少しばかりの妨害物がある、其妨害物とは何だそれは詰り無明とか煩惱とか云ふもので俗に謂ふ手前勝手である、私利私慾の手前勝手である。他と我とを比較して見る、上の方から之を見たならば差別の無いものであるけれども、個々別々に形を異にして見るとどうしても自分の方に最負をしたい、其上からいろ／＼な慾張りと言ふものが起つて来る。其慾張りと言つても全然それが悪い譯ではない、慾には善い慾と悪い慾と普通の慾とがあるから一概には言へぬ。所が自分の方に持つて行く身勝手と云ふのは貪慾で、悪い方の慾、これが根柢だと思ふ。妨害者の根柢は何かと云ふと、私利私慾の手前勝手が一番の發頭人である。何でさういふ事が言へるか云ふと其手前勝手の慾張りの起つた時に、それが自分の慾望の通りに仕遂げたらどうなる、仕遂げると自惚れるし又慢心と云ふ奴が起つて来る。所がなか／＼旨く行かぬ、十のものならば七八分までは外れる、外れるとどうするいま／＼しいと云ふので瞋恚と云ふ煩惱が起つて来る。其瞋恚と云ふ煩惱の起つた所で向ふの相手となる者が偉い人間である。どうも勢力から言つては權力から言つても腕前から言つても智力から言つてもどうしても立て付くことは出来ぬ、いま／＼しい力が及ばぬ。其時になつて来る奴は何だ、愚癡と云ふ代物である。此様に私を苛めて呉れぬ

でも宜さうなものである。實にあの人は情を知らぬ人であるとか何とか言つて恨みを起す。だから愚癡と云ふのは、いま／＼しいと思つた感情が外に發表が出来ないで中でそこねた鹽梅式である、そいつが愚癡と云ふものになる。それでどうしても御婦人は愚癡つばいと云ふことになる。無理はないので男と喧嘩しても敵はぬだらう。だからどうしても愚癡を起すより外に途はない。若し男よりも勢力があつたならば何も愚癡の必要はない、癩癩を起して殴り倒してしまふに違ひない。どうも其處までいかぬ。それで御婦人と云ふものは愚癡つばいと云ふことになる。さうすると其根柢は何から起つて来たかと云ふと慾張りが本になる。旨く行けば自惚れ、それが外れ、ばい／＼しい、いま／＼しくても喰つて掛れば愚癡、斯う云ふ鹽梅に轉輾してこいつが殖えて行く、八萬四千の煩惱など、云ふのも詰り是が轉輾して殖えた有様で、根柢を云へば斯う云ふやうな奴が惡戯をするのである。さう云ふものが私共の心の中にはうんと染み込んで居る。良心の勢力よりは其方が餘程強い。だから私共の中には兩方面がある、私慾の方と良心の方とあつて常に競争して居る。氣が揉めると云ふのは即ち良心と私慾との競争である。誰でも先きの方を考へると善い事を考へるものである。是は斯うしてそれから斯う云ふ鹽梅にしたいと云ふ風に考へる。だから今が今と云ふ時には大概手前勝手である。だからどんな碌でなしでも其料簡を

能く聞いて見ると決して悪い料簡は持つて居ない、「私だつて今こそ仕方がないが後にどうかかなるやうになれば、私共も眞人間となりたいと思つて居る、どうも今の所は仕方がない據所なく斯う云ふ事をやつて居ります、」なぞといふことを聞きますが、どんな人でも、未來觀になると善い心の起るのは自然である。所が今の今、出來心と云ふ奴は大概間違つて居る。どうして間違ふかと云ふと出來心と云ふものは肉慾から起つて来る、佛は之を五つに別けて五慾と云つて居ります。目には目の慾、耳には耳の慾、鼻には鼻の慾、口には口の慾、身體の皮には身體の皮の慾がある。其上からいろ／＼な慾望を起す。こいつが出来心と云ふものであつて、理窟も何も考へない、唯だ見たいから見たい、遣りたいから遣りたいと云ふ盲目的の註文である。所が此盲目的の註文と精神内に潜んで居る貪慾共がよく相談が練れる、是が相棒であつて、内外相應じて相談が旨く行く、あれは善いなあ、見れば見る程善い、どうも善い、何とか工夫して自分のものにしたいたい云ふことになる。さうすると精神内の貪慾の奴が之に賛成した有様である。貴様欲しければ取つて来い、何とか工夫をすると云ふのは精神内の慾望が暴れ出したのである。初め見附け出すのは出來心である。目が見附けるとか、耳が聞き付けるとかする、さうして慾望が起る、其時に内部の奴が賛成して来る。それでやられるから良心など云ふものがあつても到底駄目である、挟み撃

ちに遭つてしまふ。だから何時でも良心は敗かされて了ふ。常の料簡はそんな事はしまいと思つて居る。先きに見當をつけて未來觀にある間はどんな碌でなしでも善い方に見當をつけて居る。所が五官の註文と内部の手前勝手とが一致した時に今の出來心が起つて間違つて来る。併しなから良心が咎めると言ひます、良心があるからどうしても之を咎めずには居れぬ、悪い事は決して善い氣持ではやれない、善い氣持でやれぬと云ふのは良心がそれはいかぬと云つて意張つて居るかである。私の本心に違ふからそれはやらせられぬと云ふに違ひない。けれども外部の肉慾と精神内の貪慾とが合同してしまつて居るから、良心の故障位は通らないからそれでやられて了ふ。やられた結果はどうであるかあとで良心が愚癡をこぼす。いや濟まないとは思つたが、つい……なんと云ふ、ついと云ふのはどうしたのである、手前勝手が強いから押し除けられてしまつたので到頭敗かされたのである。今日こそは此の相撲に負けまいと思つたがつい負けたと云ふ。ついと云ふのは負けたと云ふのが恥かしいから、つい……と云ふ。それが段々と度重なるのと遠くの方から降参して了つてさう云ふ事もやつたら宜いだらうがとても私共にはやり切れませぬ、と云つて良心がへこたれて了ふのである。さうなるともう自分一身の身體の中は丸で私利私慾の天下となつて了ふ。良心は有れども無きが如し實に憐れな有様になり遂に狂醉の義になつて了ふのである。

そこで凡夫とはと云ふと幼稚の意味で良心に力が附いて居らぬ、だから手前勝手に何時でも胡魔化されて居る。そこで其良心が段々と發達して來て、私利私慾に胡魔化されなだけになり、初めて正當な目的が立つのである。さうして少しづつでもそれを實行して行く斯う云ふ仲間に入れば菩薩の仲間である。そこで此菩薩の仲間に入ると、又賢位と云ふものと聖位と云ふものゝ區別がある。詰り勉強して努める間是が賢位である。賢位の中にも三賢ある。十住、十行、十回向と云ふ三段の等級がある。今は必要のない事でありますから略して置く、聖位の方にも十聖位と云ふて十段の等級が擧げてある。聖位の方に行けば人間は自然に誠を行ふて行くことが出来る。もう私利私慾の手前勝手とか荒々しいものはすつかり洗ひ取られて了つたので唯だ奥底の方に細かいものが残つて居るのである。所が煩惱と云ふものは妙なもので着物に附いた垢と同じ事である。泥や塵が附いたのなら、洗濯しても落ち易いが極く細かい脂肪垢の滲み込んだなどは容易に落ちない。丁度それと同じ事で内面の極く細微なものになると容易に動かぬ。けれども段々と修養を重ねて行くと終には落ちてしまふ。其極く薄いのには煩惱と言はずに無明と云ふ名をつけてある。それが外に向つて活動する有様を煩惱と名づけたのである、唯だ内部に滲み附いて居る間は

無明、それが外に向つて活動する場合は煩惱、斯う云ふ鹽梅になつて居る、だから聖位に至ればもう煩惱と云ふものはない唯だ無明である。それを段々と取り除いて、すつかり取つてしまふのであるが、是は薄くなればなる程取り悪い。それで十聖位の上に、等覺補處の菩薩と云つて佛の候補者が幾らもある觀音様とか地藏様とか云ふやうな大菩薩がある。あそこらになると佛と格別變つて居らぬ、けれども、無明と云ふ極く根柢の稀薄なるものはまだ残つて居るそれだけが違ふそれを引脱ぐにはどうするかといふにそれは困難である、それを脱がうと云ふには、金剛定と云つて極く強い禪定の力に依つて初めて根本の無明を引脱ぐことが出来る、其根本の無明を引脱いでしまふと云ふと、其心の綺麗な事は實に磨き上げた鏡の如く、満月の牙へ渡る如く最早心の汚れと云ふものは鶴の毛で突いた程も無くなる。此境界を佛果或は妙覺と云ふやうな名をつけて居る、是が誠を發達させて行くに違ひない、これが佛道修行の順序になつて居る、だから維摩經に、「直心是菩薩之道場」と云つてある、直心は誠の心で之を磨いて行くに過ぎない事であると斯う維摩經に言つてある。

一體、佛に成る道に就て大體二通りに別れて居る。それは自力教と他力教とである。自力教の方から云へば自分の器量で、妨害物を全然取り除いて行く、さうして自分の真心を現して行く、

斯う云ふ道方である。所が凡夫でそれを早くやらうと云ふには逆も自力では面倒で仕様がな、幼稚な者は親の力を藉らなければならぬ是が他力教である、即ち信佛の因縁に依つて行く、そこで淨土教などは、多くの凡夫を濟度する教であるから阿彌陀佛を御頼みすることになつて居る。所が阿彌陀様を御頼みする他力教に於てもやはり誠と云ふことが一番必要になつて居る。他力教の第一は念佛である。即ち南無阿彌陀佛と唱へる、南無と云ふのはどうぞと云ふことで阿彌陀佛は親切の親玉と云ふことである、どうぞを親切の親玉と云つて御願ひする、何でも自分に妨害物が起つたら「どうぞ」と云ふ、何の事はない幼稚な赤ん坊が恐い物に出つ喰はすと、お母あさんくと云つて泣くやうに唯だ嗚りさへすればお母あさんが出て来て何とかして呉れる、實に奇態なものである。忍耐などと云つても役に立たぬ、だから御頼みする、さうすると佛の救濟を受けることが出来る。然るに其佛に御頼りするにも亦條件がある。どうぞと云つて唯だ念佛を唱へただけでは駄目だ、其條件は三心と申して、三心具足の念佛でなければ駄目だと云ふのである。三心具足とは何だと云ふと一つには至誠心、是が一番に先きで、第二には深信心、第三には回願心、則ち希望である、精しく云へば回向發願と云ふことである、回向と云ふのは向ふの方に回し向ける事で、發願は自分の希望、此功德で御願ひする、是が回向發願で詰り希望といふことに見れば



宜しい。それから深信心、之が非常に大事なこと、則ち受け込むのである。成る程御尤もである。と受け込むのが深心である。所で、回顧して希望を起さんとするには先づ初めに受け込むと云ふことが必要である。成る程と呑み込まない前には希望は起つて来ない、成る程と呑み込んだので、希望が起つて来る。幼稚な者でも此佛を頼めばきつと大丈夫である。斯う呑み込んだので、そこで初めて、お頼み申しますと云ふ希望が起つて来る。それだけでは危険である。同じ浄土門でも眞宗などになると、信爲本などと云つて至誠の事に就ては餘り言ひませぬ、信じさへすればそれで宜いと云ふのであるが、私共の浄土宗になると至誠心と云ふものに重きを置く。それで此三心を具足する場合には先づ深信の心が一番初めである。それから後に希望が起つて来る。深信だけは出来たとしても之を繼續すると云ふ一段に至つては至誠心の力を藉らんければならぬ。だから此三心の本は何處かと云ふと、深信が則ち三心の初めである。三心の本體はと云へば願心である。至誠心は力である。誠が無いと繼續しない。然るに眞宗では一念微妙の時に往生が出来てしまつた。だから念佛は御禮、報謝の爲めに唱へれば宜いと云つて居る。此處がどうも危険である。どうしても念佛を唱へるには誠を基礎とせんければならぬ。此誠を繼續するには何處が土臺になるかと云ふと誠が根柢になる、誠の上から之を信じ、信じた上から之を願ふと云ふやうに推し

て行く、だから三心を具足する場合には深信から入り、さうして之を死ぬるまで繼續するのは至誠心の力に依るのである。此三つを具へた念佛でなければ、それは空念佛である。此三心具足の念佛であるならばどのやうな出来心に遭遇しても、其時に突嗟の間に合ふ。之はあなた方は一つ試して御覽なさい實地問題である。試に不平不満の病氣の起つた時に何によつて其病氣を治療するかといふに、一番効き目のあるものは此三心具足の念佛で則効がある。之で征伐して行くのが他力教の他力教たる所以である。實に淨土教の教は極く易しい一種異様の法である。それだから此誠を以て根柢としなければ修養は出来ぬ。して見ると誠と云ふものは、世間の教に於ても、出世間の教に於ても、此位大切なものはないと云ふことだけは明かになつた事と思ふ。

そこで戊申詔書は國運發展の詔である。我日本の國運を發展させるに就ては國民が擧つて大に努めて貰はなければならぬと云ふので、種々の條件を此戊申詔書の中にお立て下された、上下心を一にせよ、或は忠實業に服せよ、或は勤儉産を修め、惟れ信惟れ義、醇厚俗を成し、或は華を去り實に就き、荒唐相誡め、自強不息と仰せられた、是は皆な國運發展の遣り方である。我が擧つて此事に従事さへすれば日本の國體は期せずして發展して来るのは言ふを俟たぬ事である。併しながら是れでのみ發達さしたのではまだ不足な所がある。それは何であるか、我日本に

は日本の風があるから日本風に發達して貫はないと困る。そこで明治天皇様は日本風に之を發達させねばならぬと云ふので此御言葉が出たのであらうと思ふ、抑も我が神聖なる祖宗の遺訓、即ち御先祖の遺言、それから國史の成跡、國の是までの成立は是は歴史上に明かな事である。だから我國民は、此國史の成跡をよく嚴重に守り、之を根柢とせなければならぬ。方向違ひに發達されては困る。どうしても之をよく守つて貫はねばならぬ、之を守るに就ては淬礪の誠が必要である。淬礪の誠を輸さば、國運發展の本近く斯に在り、是が國運發展の本である。斯う仰せられて此淬礪の誠と云ふ二字を使つたので、非常に有り難い事であると思ふ。是は我々の心の中に手前勝手の滓がうんとあるから、其滓を除き、常に油斷なくやれと仰せられたので、詰り是は修養法であつて、此誠は實に大切なものであるから、暫時も油斷なく心掛けて精勵するやうにしなればならぬ。

で、少しく字義のお話をすると、淬礪の淬の字は、鐵を鍛鍊する時の有様である。鐵を鍛鍊する時には鐵を眞赤に焼いて、さうして又水に浸ける、さうするとじゆう一つと云つて泡が立つ、あの時に滓が外に一緒に出る。そして鐵を鍛鍊するのである。鐵も軟鐵と鋼鐵とは大變に違ふが、其性質は別に違つて居らぬ。軟鐵を製造して鋼鐵にするのであるが、それには鍛鍊を加へねばな

らぬ。それで鋼鐵になつたのはどうしたのであるかと云ふと、鐵の中の餘計なものを皆んな取つてしまつた結果である。これと同じく私共の心の中の手前勝手の餘計な滓を皆んな引脱いてしまふ。それが淬礪の淬の字の意味である、礪とは磨礪の義で吾々は煩惱具足の身體である、生身の身體を持つて居るのであるから幾ら鍛鍊しても、後から一錆がつく、其錆は始終落さなければならぬ。其錆を落すのが礪である。斯の如く塵埃を清掃した後に残るものは何であるかと云ふと、夫が本當の誠である。此淬礪の誠を輸す、輸すと云ふのは精一杯にやるのである。精一杯に之を修養しろ、精一杯に修養したならば國運發展の本は近く斯に在る、決して遠い事ではない、吾々の心に依つて幾分づゝ發達させるといふことは、疑のない事であるから、此方法に依つて修養するやうにしる、斯う御教へ下された思召は私共は實に有り難い事であると感ずる次第である。そこで此誠と云ふことは、たゞ單り國運發展の本とするだけにのみ止まるものではない。個人の心に於ても其誠を以て行つたならば未來も永遠に佛果を得られるのである。此佛果までも得られると云ふのも、皆な淬礪の誠を輸したる結果に外ならぬのである。さうすると世間の教と、出世間の教とは唯だ程度の問題であつて道はずつと一本道で、謂ゆる長安の大道である。この事は人様に計り希望するのではない、私自らも努めなければならぬ、及ばずながら此道に従事して居

る身の上であるから、冀くは諸君と共に、明治天皇様の思召に従ひ淬礪の誠を輸しなれと考へて居るのである。

### 離苦得樂

從來佛教を學ぶ者も亦他から佛教を觀る人も佛教の大體の目的は何であるかと云はれますと、それは轉迷開悟、或は廢惡修善だと答へるのが主である。成程、廢惡修善と云ふことは、非常に大切なることである、これは單り佛教で大切な許りでない、一切世間の上に於て、是ほど大切な事はないのである。又轉迷開悟も其通り迷ひを轉じて悟りを開くと云ふのであるから實に必要なることであるけれども、目的としては離苦得樂と云ふことになるだらうと考へて居る。

一體迷を轉じて悟を開くと云ふことは實に大切なことで、迷ふて居つては仕方がない、然らば迷ひとはどう云ふことなのかと云ふと、自分の目的と其目的の上に齟齬がある、詰り自分の一最終の目的と云ふものは何人でもある、其最終の目的ある場合にそれと背反して又別に目的が出来る、さうすると何うしても調和が出来なくなる、夫で最終の目的に背反した、言はゞ小目的を

一生懸命にやつて居るやうなことがある、さうすると最終に往つて最終の目的と衝突する、それであるのに最終の目的に適ふものと思つてやつて居る、それが迷ひと云ふものである。詰り大目的と小目的との衝突である、總てお互人間は何かやらうと云ふ時には目的を立てると云ふことは極つた話でその目的を立てる其目的に就て相當の實行をしなければならぬ、所が一の仕事には又一の目的が要る其大方針を履行するためにする一の仕事がある、然るに其仕事をするのに又一の目的が要る是は次の目的になつて来る、其目的を達するために又一の小目的が出来て来る、其小さい仕事には小さい仕事だけの目的が出来て来る、さうすると大目的と小目的とすつと際限のないものである、夫で大目的と小目的と背反しないやう一のルールですつて收まつた場合が悟りである。然るに大目的のレールの内に小目的が入らぬことがある、大目的のレールを外れて居る、斯う云ふ場合が迷ひである、所でお互に人間の體の目的である、是は其人に依て千差萬別、いろいろ違ひはあるに相違ない共通の目的は何であるかと云ふと、畢竟は苦痛を通れ安樂を得ると云ふの一段に至つては、何人も反對はないと思ふ、どんな狂人でも樂みは大嫌ひ、苦みは大好きだといふ様な間違つた人間はある筈がない、其仕事の上に高尚なるものと平凡なるものとの區別はあるに違ひないが、大方針は苦痛を遁れて安樂を得やうといふ丈の事に至つては共通して居

る。これは人間ばかりでない犬でも猫でも然うである。然れば此離苦得樂、苦を離れて樂を得やうと云ふことは、單り吾々人間ばかりでない、是は宇宙全體一切生物の希望であると云つても差支ないと思ふ。

處で安樂を得やうと云ふには安樂を得る原因がなければならぬ、苦痛が成立つには苦痛の成立つ原因が必ずある、夫で苦みは大嫌ひ、樂みは大好き、斯う極つて來れば、其苦痛の原因は避けなければならぬ、樂みは大好きと極つて來れば樂みの原因は努めて行はなければならぬ、然るに若しも苦みが大嫌ひだが、其下拵へは何となく行りたくて仕方がない、樂みは大好きでも其下拵へは臆劫で困る、斯う云つたら譯の分らぬ話になる、之を分らず屋と謂ふ、此分らず屋を迷ひと謂ふ、其分らず屋を止しにして譯の分つた人間になつて、苦痛は厭やである苦痛の原因は止してしまふ、樂みは大好きで、樂みの原因を履行すると云ふに至つて、此方針を立つた所が悟りである、然うすると此轉迷開悟と云ふことは離苦得樂を得んがための大方針である、向うに的があつて其的へ狙ひを付けたのが轉迷開悟である、その轉迷開悟の的は何であるかといふと、的は正しく離苦得樂である、其方へ狙ひを附けたのが轉迷開悟と云ふのである、而して其轉迷開悟を實行する場合になると何うしても廢惡修善でなければならぬ。

一體苦痛の原因は何であるかと云ふと惡が苦痛の原因である、既に法華經の内に諸苦所因貪慾爲本とある、總ての苦痛の原因となるものは貪慾が本と云つてある、貪慾と云ふことは此前も御話したが、慾と云つても一概に惡いとは言へない、總て苦痛を遁れたい安樂を得たいと云ふのは慾である、だから慾は宇宙の原動力である、此位大切なものはない、併ながら其慾に善い慾と惡い慾とがある、道理に隨從する慾と道理に背反する慾とある、だから金剛經と謂ふ御經の本業要路經の内に善惡の標準を示してある、善惡の標準と云ふことは今日では非常に世間でやかましい、到底標準は立たぬ、時の古今と土地の東西に依つて善惡の標準が異つて居る、だから到底この善惡の標準は立てることが出來ぬと云ふのが近來の學說である、所が佛敎の理窟は簡單で、理に順じて心を起す之を善と云ふ、理に背いて心を起す之を惡と云ふのが標準である、是が要路經に在る、道理に従ひ起す所の慾は是は善である、理に順じて心を起す之を善と謂ふ、理に背いて慾を起す、是が惡と云ふものになる、さうすると同じ慾でも善慾と惡慾とがある、普通の慾ならば人様の邪魔にならぬから幾らあつても差支ない、所が自分の都合ばかり好くても仕方がない、どうせするなら社會のため國家のため一切衆生の爲めに成る事をやりたい、斯う云ふ慾であれば是實善慾である、斯う云ふ慾なれば幾ら深くても幾ら突つ張つても差支ない、同じ普通の人間の中

で聖人とか、賢人とか謂はれる人は、皆この慾の突つ張つた人間である、又菩薩とか佛とか云ふものは此慾が非常に突つ張つて居る、所が貪慾はそれとあべこべである、人の都合などどつちでも宜い自分の都合のため人を蹴飛ばしても、自分の都合の好いやうにしなければならぬといふ恐ろしい手前勝手手の慾を貪慾と云ふ、夫で佛が法華經に於て言はれて居る總ての原因の苦痛となるものは此手前勝手手の慾張が抑々の根元である、此慾張が起つて來るために自分が氣に入つたやつに出會すると是は大層宜いなどと大變氣強い慾が起つて來る、それは所謂出來心と云ふのである、出來心と云ふのは肉慾である、ちよつと見て欲しくなつた鼻に嗅いで見て快感を感じたとか、口に味はうて見て欲しくなつた、身體に觸れて見て、非常に執着を起したと云ふのは肉慾である、人間の出來心は肉慾で、此肉慾が起ると精神内におつ突いて又貪慾と云ふのが起る、此貪慾が直ぐにそれで飛出して來てそれに同意を表してそれが欲しいから何とか工夫しやう、それには斯う云ふことをしろ、あゝ云ふことをしろと種々工夫する、そこに至つて初めて貪慾となる、だから出來心は貪慾と氣に入つた間柄であるが良心と正反對である、それで何時でも良心が負ける、此貪慾が一度起りそして慾張が強くなると、其丈け疝癩が強くなる、慾張の程度が低くければ低いだけ疝癩が薄弱である、それは實に奇態である、そんなものは何うでも宜いと初め立つた其慾に

は疝癩が強くない、他はどうでも是だけはと夢中に掛つた事が夢中になつて怒る奇態なもの、だから疝癩の強いと云ふことは更に慾張が強いと云ふ異名になつて居る、それで其慾張の起つた時はどうである、向ふの相手が弱ければ頭からがんと嘔鳴り付ける腕力に訴へる、所が向ふの相手が偉らければ理窟から云つても位地から云つても敵はぬ、權力からでも敵はぬ何と云つても受付けない、さうすると何うなるかといふと愚痴が起つて來る、こんな人に人を窘めなくとも宜さうなものである、此人は大層罪な人であると大變心に恨むやうになる、かうして總ての惡徳が皆な此貪慾から起つて來る、ですから此廢惡の惡は何から起るかといふに此貪慾から起るもののである、それが皆な惡である。此上からする所業であつたならば口で喋舌らうが手足を動かさうが心の上で輕侮しやうが皆な惡と名付くべきものになつて來る、夫で此惡と云ふものがあつたのでは到底吾々の望む所の安樂は得られぬ、吾々の大嫌ひの苦痛を免がれぬ、だから若しも此轉迷開悟と云ふ筋途が解つたならば、是で其苦痛の原因たる惡を廢除して安樂の原因たる親切なる眞心を養成して行くより外仕方がない、その實行法としては此惡を廢して善を行ふより外ない、つまり廢惡修善は何のためかと云ふと、迷つた仕事をしないで悟りの仕事をしろと云ふことになる、其悟る仕事は何のためだといふに、それは離苦得樂のためである、吾々の大嫌ひな苦痛

を連れて大好きな安樂を求むると云ふことが、常に最終の目的である、だから私は佛教の目的と云ふよりも、寧ろ是は宇宙全體の生物の目的である、それが離苦得樂、それで佛は宇宙全體の生物の目的を達せしめんがために、此轉迷開悟の途、此廢惡修善の御指導を下されたのである、詰り言ふと佛が目的を達したのでない、一切衆生の目的を達せしめんがため佛が斯様なことを教へ下すつたのである。

愈々本問題の苦痛と安樂と云ふ事ですが、一體樂みと云ふことは誰様も嫌ひな者はない、併し其お樂みと云ふ事がどんな所に上下のあるものか知らぬと云ふと何だか知らぬ樂みに上下はないやうである、一方の方が樂みちやと云ふ程の事を一方の人に聴いて見るとそんな事は詰らぬと云ふ、さうかと思ふと一方の苦痛と思ふ事を一方の人は樂みと思つて居る、例へば酒好きな人であると、良い御友達があつて好む場所御酒を飲む、こんな御樂みは無いとして意張つて居る、それを甘い物すきに向つて御酒を飲めと云ふ私はそれが一番嫌ひだ、嫌ひでも何でも飲め、樂みだといはれそれは困つたものである、實に迷惑である、迷惑は苦みの仲間である、すると酒は辛い物好きには樂みになるが甘い物好きに取つては苦みになつて居る、それで樂みはどこに在るか解らぬ、一體樂みは何うして成立するかと云ふと、お互宇宙の動物だから慾を持つて居る、善慾に

しろ、惡慾にしろ皆な慾を持つて居る、慾のかたまりだから慾望がある、俗に「たいく」と云ふ斯うしたい、飲みたい、食ひたい、此のたいくと云ふ事が、誰様にした所、無くて七癖と言ふ、此の「たいく」は屹度持つて居る。此のたいくの起つた時眼で見たいが起る、活動寫眞を見たいとか芝居を観たいとか、おいしい物が食べたいとか彼處へ往きたい等と種々の「たいたい」が起る、其「たいく」の起つた時に、それが其希望通りに仕遂げられたらば之を名付けて樂みになりはしないかと思ふ、御酒を好きな人は御酒を飲みたいと云ふ慾望が起つた其時調子好く飲めればそれでお樂み、遊びに行きたいと思つた其時にうまく遊びに行くことが出来ればそれでお樂み、さうすると自分の慾望の起つた時に仕遂げさへすればお樂み、それに故障があつて、どつこいそれはいけませぬ斯う云ふ時は不愉快である、此不愉快は愚痴である、然うすると苦樂の關係と云ふものは何で出来るかと云つたら、吾々の心の中に慾望がなければ何もない、其慾望があるために苦痛と安樂が出来て来る其慾望の起つた時に慾望通りに仕遂げた時は是は樂みであるそれに故障が出来て仕遂げることが出来ぬと却て正反對の結果が起る、斯う云ふ時は愚痴である併し斯う是で言ふて見ると、斯う云ふ事が出来て来る、其ならばどんな事でも自分の慾望が起つた時慾望通り仕遂げさへすれば、悉くそれを樂みと名付けることが出来るかと云ふ問題が起つ

来るが、何分にも然りと答へる譯にいかぬ。どんな事でも、慾望の起つた時、慾望通り仕遂げさへすればそれで片端から皆悉く樂みであると云ふことは何うしても言へない、なせなれば慾望通り實行して却て苦痛の原因となることがあるから眞の樂みと謂へない、苦痛の原因を捉へて安樂と見たのでは大間違である。苦痛の原因を樂みと思つて次から次へ行つたならば耐まつたものでない、次から次と苦みの下拵へをするから苦み通しに苦んでしまふ、決して安樂を求むる者の行り方でない、それはどんな事かと云ふと事實は少しく御考へになつたら随分解ると思ふ、茲に我儘の病人があると假定し、醫者のいふのに貴下の御病氣にはさう云ふ事をしてはいけない、こんな物を食べてはいけぬといつても我儘の病人になると其いけませぬが行りたい、實に厄介なものである、行らなければそれで不愉快だ、夫ぢやあ、病人が言ふもんだから少し遣つて見る、ぢや少し是つきり、少し遣つたが何ともないやうだ、もつとおくれ、たまつたものでない、もつとおくれ、揚句の果はどうです、あ、痛た〜であらう、斯う云ふやうな譯である、詰り苦痛の原因を自分は樂みと思つてするのである、是等は決して眞の樂みと言へない、そこで何うしても吾々が眞の安樂を求めやうとするには自分の精神の取締をしなければ何うしてもならなくなつて来る、なせかと云ふと口でも身體でも皆な心の指圖に依て動く、所が吾々の精神の内容を考へて

見ると何時でも申す通り、始終手前勝手の方面と、親切なる方面と、兩方面が常にあべこべの活動をして居ると云ふことは、否やと言はれぬ事實である、ですから何うしても精神から直して行く外ない、是に就いて斯う云ふ事を話して見やう。

佛教では淨土極樂とよく言ふ、佛様のござる所を淨土、阿彌陀様のござる所を極樂と名を附けてある、そこで極樂の説明がどう云ふことかと云ふと、阿彌陀經に「種々もろ〜の苦みあることとなく、唯もろ〜の樂みのみ多し、故に極樂と名附ける」極樂の中へ入つた者は苦みは少つともない、皆な樂みばかり、それで極樂と云ふ名が附いて居る、斯う云ふことを阿彌陀經の中に言つてある。すると或る學者先生が非難して曰く、そんな所があるものか、一體この樂みと云ひ苦みと云ふことは比較的に自分の心に感ずる迄のものである、其證據には今まで苦しい〜と思つた事でも尙ほ一層苦しい目に突つ掛かると、今までの苦みと云ふことは却て安樂と感ずる、又今まで樂しい〜と思つた事も、もつと好い樂みが眼の前へぶら下つて來ると今までの樂みは却て苦痛に感ずるやうに〜つて來る、だから苦痛と安樂とは比較して見た上に自分の心に感ずる結果である、そんな純粹の樂みなどあるべきものでない、樂みと思つたこともやはり苦みになつてしまふ、又苦みと思つたことも、思ひやうに依て樂みになる、だから此苦みと云つても純粹の苦み

はない、樂みと云つても、純粹の徹頭徹尾樂みと云ふものはある筈がない、然るに極樂に生れた者は樂みすくめで、苦みは少つともないなんて、そんな理窟に合はぬことがあるものかと、一應聽いて見ると尤もなやうであるが、宜く／＼考へて見るとまるで引出し違ひになつて居る、なせと云ふと佛の淨土とお互が生れて居る娑婆とは成立の根底が異つて居る、此娑婆と云ふものは手前勝手な根性を持つた者の集りである、貪慾世界である、どんな聖人でも身體のある間は貪慾を丸つきり取ることとは出来ない、然るに又この娑婆の成立は手前勝手の根性を持つた者の集りであるから、手前勝手の根性を持つた者の爲す所業が總ての現象に表はれて居るのであるだから、此娑婆の事は見るに付け聞くに付け自然に手前勝手が起る趣向になつて居る、氣に入つて欲しくなる氣に入らぬと悪くなる、都合が悪いと人のせいにして都合が好いと、人の行つた事も自分のせいとする、都合が好くても悪くても、氣に入つても氣に入らぬでも、自然に手前勝手が起る趣向に出來て居る、それは此娑婆の状態である、どうして然うかと云ふと、原因が皆な手前勝手の根性を持つた者から成立して居る、どうしても此娑婆は苦痛を脱却したことは出來ぬことになる、所が佛の淨土は、其根柢が違ふ、佛の大慈大悲から成立つて居る、佛の親切なる心が土臺になつて居る、阿彌陀如來が慈悲親切を盡すために成立した淨土である、だから淨土の成立の根柢と云

ふものは、皆な佛様の親切心が根柢で成立して居る、此娑婆とは正反對だ、見る物、聞く物、みな悉くこちらの親切で引立てる趣向で出來て居る、眼に見る物は皆な菩薩、佛の姿、耳に聞く物は、風のごう／＼鳴る音まで、皆な御法の聲、ひとりで親切に引立てる趣向になつて居る、そこで吾々のやうな者でも、其佛の御方に依つて淨土の仲間に入れてさへ戴けば、手前勝手を起すことが出來ぬ、此方に根があつても向うに對手が無い、對手が無いから自然に消滅して了う、手前勝手が消へてしまへば善慾ばかり親切ばかりとなる、それゆえ彼の淨土と云ふ所は親切な者ばかりの集る所で、互に親切の盡し合ひで行ける世界である、だから苦みなどは鐘太鼓で探してもあらう筈がない、それで樂みすくめの淨土、極樂と云ふ名前が附いた、されば今の學者先生の説の如きは、詰り言ふと此娑婆の規則を以て極樂を觀たと云ふことになる、まるで引出し違ひにする、そこで今日の御話は娑婆の事である、娑婆は皆な手前勝手を起した者の集りであるから、手前勝手の競り合は免かれることは出來ない、併しながら互に手前勝手の競り合で其日を暮さなければならぬと云ふことは困難である、之に引換へ、赤の他人でも互に親切を盡し合つて、其日を送ると云つたらこんな樂みはない、ですから此娑婆の中でも、お互精神の修養さへ出來たならば部分的淨土を拵へることはむづかしいことでない、仲間だけの極樂を拵へて行くことは、差支



ない話である、それには人を正さんと欲すれば先づ己れを正さなければならぬ。己れを正さんとするには各自に精神の修養を努めなければならぬ、修養とは何である、手前勝手と親切と双方成り立させてはごた／＼する、それで一方の私利私慾を全滅させることが出来ぬにしても、降服だけはさして置かなければならぬ、手前勝手が跋扈して、主人公たる位地を占めては仕事がない、だから手前勝手を抑へ付けて、家來の位地に立たせるやうにしなければならぬ、さうして親切なる心を以て、自分が立つて行くと云ふ工風をする外途はないと思ふ、御同様この事が出来さへすれば、兎に角親切なる心が主人公となると總ての慾望は親切なる心の上から起つて来る、親切なる心の上から起つて来た慾望を履行すれば、其まゝ之が善行功德である、其善行功德とは何だ、互に親切の交際を行つて往くと云ふことになるのである、併ながら何にしる不完全な世界であるから、永久安泰と云ふことは出来ぬ、御同様何時死ぬか知れぬと云ふ運命を持つて居る、併ながら此修養が行届いた人であれば、何時此世を終つても、其まゝ善果を得られると云ふことは疑ひない話である、さうすると此精神修養と云ふことが、詰り現在にあつて、部分的の淨土を拵へて樂むことが出来、何時此世の壽命を終らうとも、其儘佛の淨土に往生を遂げて永遠に大安樂を求めることが出来る、斯う云ふ御話になつて来る、それで畢竟私に佛の教へは何だと云つたならば

世界一切の衆生の希望を全うせしめんがための教へである、それで一切衆生の希望は何であるか云つたら、詰り離苦得樂である、離苦得樂を目的とすることは單り佛ばかりでない一切衆生の目的である、而して之を完全に仕遂げるのは轉迷開悟である、轉迷開悟の方針に進んだならば廢惡修善の實行が必要であると云ふことになつて来る、廢惡修善の實行が出来さへすれば、部分的淨土を作つて其日／＼を送つて行くことが出来、又未來永遠に離苦得樂も期して待つことが出来る譯である、一日も早く離苦得樂のため精神を修養すると云ふことは此上もない得策ではなからうか。

### 轉迷開悟

前回の離苦得樂の目的を達せんとするには、どうしても轉迷開悟と云ふ方針を定めなければならぬ、目的と云ひ、方針と云ひ同じやうなもの、目的は他の方に在り、方針は此方に在る勘定ですから、其目的を達せんとするにはこちらの方針として轉迷開悟と云ふことが必要になつて来るそこで轉迷開悟に就いて御話し致して見やうと思ふ。

處で迷であるが、是は困つたものである、迷が分る位なら迷でない、解らぬ所が迷である、此迷を知ると云ふのは、随分困難な仕事である、夫で私は近頃おかしく感じて居る事がある、それは何だと云ふと、世間の詞に、「とんだ迷惑を掛けました」と云ふことを言つて居る、又「御迷惑に相或りました」と云ふことを言ふ、其「迷惑」と云ふことでがす、此「迷」と云ふ字を熟考にれば「迷惑」と云ふことである、今日世間で遣はれて居ることには此「迷惑」と云ふことは「困難」と云ふ意味に多く使はれて居るやうで、「とんだ迷惑を掛けた」と云ふことは、「とんだ御困難を御掛け申して、相済まぬ」「御迷惑でもございませうが」と言ふは「御困難でもございませうが、どうか一つ御願ひ申します」斯う云ふ時に遣ふ、所が迷惑と云ふことは、惑ひ、迷ふと云ふことで「御迷惑でも」と云ふことは、「斯の如く譯の分らぬけれども」と云ふことと同じ話だ、随分失敬な話だ、「あなたは譯が分らぬけれども、是はやつて戴きとうございませう」「とんだ譯の分らぬことを御させ申して相済ませぬ」と同じである、随分おかしい話だと思つて居る、所が全く本統に迷ふたものであれば、決して自身自から困難とは感じて居らぬ、迷惑して居る程のものは、迷惑を喜んでやつて居る、どなたでも迷惑を是認して迷惑を行つて居る、決して迷惑に困難を感じる」と云ふことはない、又困難を感じる位のもは最早迷惑を悟つた一人である」と云ふことは言ひ得

ると思ふ、やはり世間一般に此迷惑と云ふことを困難の意味に遣つて居ると云ふことがちよつと味のあることで無いか、是は所謂佛道修業の上から自然に轉訛した詞であるだらうと思ふ、それは何せかと云ふと、何が一番困難と云つたら迎も自分の迷ひを知ると云ふ事ほど困難なことはない、決して尋常一様の人に解る筈がない、迷ひと思はぬそれを是として居る、己の言ふ所は間違ひはない、他の奴が間違つて居るから困ると云つて居る、是は自然の現象とでも言ひませう、さう云ふことになつて居る、然るに自己の迷惑を知るに至つては餘程修養をし、反省の結果でなければ、自己の迷惑を知ると云ふことは何うしても出来ぬことになつて居る、さうすると迷惑を迷惑と知ると云ふことは非常な困難なことであると云ふ所から、終に轉訛して此迷惑と云ふ詞が其まゝ困難の意味に遣はれることになつたのであるまいか、一體迷ふた者と、迷ふた者と集つて争つて見た所が、決して迷ひが解るものでない、互に自分の主張する所を是としてやつて居るからそれ解らぬ勘定である、迷ひと迷ひと衝突つた所がいつまでも勝敗は決しない、水掛論である、喩へて見れば、互に自分の時計を見て時間は正確だと云ふ、此時間の正確と云ふことですが、時間と云ふものが、唯人間が極りを付けて午前何時午後何時とやつて居るが、向ふの方には境界はない、此方の方で好い加減に極りを付けて居るのですから私の時計は確實である決して間違

つて居らぬと意張りながら較べて見ると五分ばかり違つて居る、或は十分違つて居る、己のは正確で己のは求めて以來狂つたことはない時計だ、大丈夫だ馬鹿なことを言へ、己のは此間停車場で合せて来た計りだ、決して間違はありやしない、己のは金時計で間違はない、己のは舶來で機械が上等だ互に争つて見ても水掛論である、併し其内に午砲がドーンと鳴る、さあ否應なしに決つてしまふ、其争は是でびたつと止でしまふ、だから今日お互に迷ひである悟りであると言つても、兎に角互に迷つた仲間を押合つて見た所が只自分の時計で自慢して意張て居ると同様で、決して勝負は付かない、何うしても之を一つ確かに決めやうと云ふ時には先覺者の判定に訴へる外道はない、佛の教へに依て標準を定める外道はない、若し佛の教へが標準とならないとしたならば互に時計の時間を争ふ人が此午砲もまた當てにならない、斯う云ふと同じことになつて了ふそれでは到底どこ迄行つても極りが着く氣遣はない、だから吾々佛教徒としては、佛の教へは恰度時間に比較すれば午砲の如きものであつて、あのドンで決まりが着く斯う云ふ按排に考へて置くより外仕方がない、實際迷ては解らぬ之を迷雲などと雲に喩へて居る、此迷ひと云ふのは恰度この雲のやうなものである、迷ひの中に居つたら迷ひは分らぬ、それを出版していえ馬鹿くしい、詰らぬことに苦心したものであつた、斯う諦めが付いて初めて元との迷ひたることが分つて

来る、其諦めが付く時は迷ひの外へ飛出した時であります、其時に初めて今までの迷ひと云ふことは見届けることが出来る、而して迷ひとはどんなものであるか、向ふに問ふも形ちなしで何とも答へない、此迷ひを迷ひと知ることが、實は困難な事業である、此「迷惑さまでも」とんだ御迷惑を掛けた」と云ふやうなことも、斯う云ふ上から轉訛したことに違ひない、そこで吾々佛教に於ては迷ひに就いてはそれは實に綿密なもので所謂八萬四千などと、實に際限もないことを言つて居るけれども、そんな大風呂敷を擧げて分るものでない、ですから之を概括的に括つて其要旨を御知らせするやうにする外仕方がないと思ふ。

夫で迷ひを大概分類すると、見惑、思惑と二通りに分けて見ることが出来る、見惑と云ふのは見當違ひなことである、思惑と云ふのは、自分の心の中に染み込んでしまつた悪い癖なのである、思惑は地金の迷ひで其上から盛り立つて來るのが見惑である、だから見惑の方は間違つたら大間違を仕出かす、其代り之を直す時分には存外早い、見當違ひでした、はあ成程然うですかと呑込めるとばつと直してしまふ、所が思惑は執着なやつで心の奥底まで染込んで了つたからなかく、自分が悪いと知りつゝも止めることの出來ないのである、其上から八萬四千の煩惱と云ふことも言ふやうになつて小乘經で言ふと見惑を八十八種に分けてある、夫から思惑を九九八十一通り

に分けて説明して居る、そんな数の多いことを言つてもまるで算術の稽古でもするやうでさつぱり譯が分らぬ、之を簡單に言ふと根本煩惱と云ふて土臺になるものが十ある、十煩惱と唱へて、五利使、五鈍使と云ふことになる、處が此「使」と云ふ字を書いたのが面白い、使役すると云ふ意味で見惑の方を五利使、思惑の方を五鈍使と云ふのである、見惑の五通り思惑の五通り、之を根本煩惱、土臺の十煩惱と名付けて居る、之をちよつと御話しますと吾々の迷ひの根據が略ぼ御知らせることが出来ると思ふ。

五利使と云ふのは、身見、偏見、邪見、見取見、非因計因見と云ふことで、身と云ふことは、種々な物が集つて一の形を作した物を身と云ふ、だから集合の意味になつて居る、さうすると私共身體でも何でも、種々な分子が集つたものである、之を身見と云ふ、西行の歌に「引寄せて結ばば假りの庵なり、ほどけばもとの姿なりけり」、此身見を明らかに悟りたる人の歌である、それであるのに身體の上に就いて一の執着を起すなどは抑々見當違ひである。

夫から偏見と云ふのは之が大變な見當違ひである、此偏見には、斷見、常見の二つがある、どつちか片寄らなければならぬと云ふ迷ひ、今日の人の量見は皆な然うである、自分の心などに考へて見て此二つにどつちかに頭を突込で居る、斷見と云ふ側は肉體のあらん限り他の言ふことは

自分には信じない、だから此世に生れ出たからはこんな事が出来たら死でしまふ良い事をしやうが悪い事をしやうが死でしまへばそれ迄のものである、だから下手に馬鹿に謙遜して謹むなどは馬鹿なことである、何でも巧くやつて巧く通るのが一番伶俐である、と云ふやうに考へる之が斷見論者の考へである。夫から常見と云ふのは、其正反對で何でも今の現狀はどつちも維持して行かれないと信する、飽まで現狀維持である、己は金持であるからどつちも金持である、己は伶俐であるからどつちも伶俐である、あれは馬鹿であるから生れ換はるまで馬鹿であるといふ、馬鹿には馬鹿だけ、男には男だけ、女には女だけ、どつちまで往つても通して決して變はるものでもない、變化はない、斯う見て居るのが常見と云ふ側である、今日でも同じことで貧乏書生や何かは多く斷見論者で福しい方になると常見論者が多い、皆な自分の利益から割出して來る、都合の好い者が現狀維持論者である、都合の悪い者が何でも打破はして丁う、所謂破壊論者と維持論者と分れる、どつちか之は片寄るから分らぬ、それを引くるめて偏見と名付けた、佛の見込から言へば斷見も間違つて居る、常見も間違つて居る、是は皆な因縁因果の法則に依て然らしむるものであると云ふのが佛の見方である。

夫から邪見である、是は因縁因果の法則をあへこへに考へたので、悪い事を善いと善い事を悪

いとまるで反對に見當違ひにいけぬと何でも自分の氣に入らぬ事はどんな良い物でも頭から否定し、氣に入つた物はどんな物でも是認する、之は邪見と謂つて自分の手前勝手から、見當が違つて了らう。

次に見取見であるが、之は入組んだものである、取と云ふのは取つて放さぬもので、自分が一旦取つた量見は縦令悪いと知りつゝも諦めて放して了うことが出来ない、喻へば死だ子の歳を數へると同じく、いつ迄も諦めが付かぬ、一旦見込だ事に執着して諦めることが出来ぬで煩悶するのである。

夫から非因計因見、是は因にあらざる因を取り、原因でもないものを原因と思ふ、假令ば茲に一人の人があつて何か相場でもやつて大層金を儲けた、相場をやつたら金は儲かる、相場は必ず儲かるものであると自分が信じてしまふ、相場さへやれば屹度儲かる、斯う云ふ見込を着ける、所が相場は必ずしも儲かるものでない、儲かるのは好い按排に安い所を買つて高い所を賣つたからである、其處に原因はある、幾ら相場でも高い所を買つて、安い所を賣つては儲かる氣遣は無い、だから儲かる原因はどこに在るか云ふと安い物を買つて高い物を賣つたに依つて儲かる、これにも拘はらず只相場をしたら儲かると云つて祖先以來の田地でも何でも賣つて相場をやる、で

すから人の良い所を見ると耐らぬ、何でも人の眞似をしたい詰り後から追掛けて行つて轉ぶ、どこ迄も追掛けて行つて轉ぶ、轉び通しに轉ぶ、是が非因計因見で、因にあらざるものを、因と決するのである。

夫から五鈍使にどんなものが數へてあるかと云ふと、之は貪、瞋、痴、慢、疑の五つで、鈍い方である、鈍い者に限つてしつこい、實は奇態なものである、取らうとしても何うしても取るこゝとが出来ない之に喰込まれて居る、喰込まれて居ると思はない、此中で一番のお頭さまは何であるかと云ふと貪と云ふものである、是が一番の土臺に成つて居る、畢竟自分最負と云ふことである、其自分最負はどこから出て来たかと云ふと身見が基である、此身見と云ふは己と云ふものを拵へる己を拵へて己と彼と向ひ合つて言つて居ると己の方が最負したくなつて来る、かうすれば都合が好い、かうすれば己の都合が悪いと何でも己の都合が中心になつて欲が起つて来る、之は先天的に人間に背負つて居る、赤ん坊時代から持つて居る、何でも己と彼の區別を立てて自分の方へ良いものを取りたくなる之を貪慾と云ふのである。

慾には善いのと、悪いのとがある、貪慾と云ふのは悪いのでそれが基である、それがうまく行かぬと忌々しくなる、腹が立つそれが瞋と云ふのである、腹が立つ、忌々しく、疝癩持など云

ふのはあれは慾の深い所から起る、其起り方に強いのと弱いのがある、それは慾の程度である、貪慾が強ければ強いだけ高くなる、慾の程度が低くければ低く弱い、詰り言ふと貪慾の反動である、其次は痴で、痴は愚痴の事である、何でも都合が悪いと人のせいにする之を愚痴と謂ふ、つまり怨むのである、之も前の瞋と同じで慾張を起す、思ふ通りいかぬと腹を立てる所が先方は偉くて腕づくでも敵はぬ、智力でも敵はぬ、金力でも敵はぬ、こんなにも仕様がなない忌々しく耐らぬ、ぶん擲つてしまひ度いが敵はぬと云ふ者は愚痴が起る、こんなにも私を窘めてくれないでも宜さうなものだといふ怨みは生々世々死でも忘れることは出来ない、是が愚痴である。

そこで慾張が巧く行くと何うするといふに自惚が出るそれを慢心と謂ふ、私だからそれが出来た、私だからそれがさう成つた、さうして人の聴きもしないのに、あの時拙者がなどと肩肘いからし、さうして自慢話をして嬉しがつて、皆なさう云ふけれども彼の時己がなどと自惚が増長して、しまひには喧嘩までする、之を慢心と謂ふので慾の程度から起つて来る、慾の程度が強いだけ、慢心の程度が高い、慾の程度が弱ければそれだけ慢心の程度が低い。

夫から疑問見である、是は全く疑問である、疑ふと云ふのは一方から見れば無くてならぬのに、非常に害をするのである、疑ひと云ふこと實は疑問である、疑即ち疑問である、此位面倒く

さいやかましいものはない、元來文明の發展と云ひ學藝の發達と云ひ何でも其根據は何から起るかと云ふと疑問が基である、然るに世の中の事もさうである、大に疑つて後に大に悟ることがある、だから書物を見ても疑の起らぬ位の者は役に立たぬ、吾々の人生の上は勿論、佛果菩提に至るまで此位必要なものはない、併し一方から見ると、此位また害をするものはない、親子の間がどんなに親しからうが、夫婦の間がどんなに善からうが、其間に疑ひが起つたら仕方がない、親は子を疑ひ子は親を疑ひ夫は婦を疑ひ婦は夫を疑ふ斯うなつたら仕様がなない、遂には疑心暗鬼と謂つて其中から鬼が飛出す、鬼位なら宜いが夫婦の間には三行半が飛出し、親子の間に拳固が飛出す、歴史などを見ても戦争が何から起つて来る皆な疑ひから起つて来る、疑ひ位世の中にあつて害をなすものはない、併し一方から見れば害であつて、一方から見れば大層利益をなすことがある、是は又他日善く考へて御話し致しますが、五鈍使は心に泌み附いた五の煩惱、五利使は見當ちがひをする五の煩惱であると承知を願ひたい。

そこで轉迷開悟と云ふことは何う云ふことをするかと云ふと此十煩惱を破斥してしまつて、道理に一任することが出来るやうになれば、則ちそれが開悟と申して悟となる、此開悟と云ふものを詞を換へて云へば迷惑覺悟である、どつちの詞でも分る一番認められて居るのは覺悟と云ふこ

ともおかしいが、淨瑠璃を見ても覺悟は宜いか、南無阿彌陀佛、死ぬと自分で極めたこと云ふことで、さう云ふことを覺悟と云ふ、いつまでだら／＼して居なくて、早く覺悟をしなければならぬ、いつもそんなに財布の口を開け通してはいかぬ、宜い年をして少と覺悟するが宜い、何か知らぬ覺悟と云ふことが、詰り言ふと自分の身の締りを付けると云ふことに今日遣はれて居る、是は悟ると云ふのである、今迄の非を覺つて、後の將來を善くする、善後策を考へると云ふことである、其意味から言つたら覺悟は宜いのである、併ながら幾らか今日の一般に遣はれて居る覺悟、この悟りと云ふ意味の覺悟と違つて居ると思ひます、詰り轉迷開悟と云ふことは、迷惑を轉じて覺悟を開くと云ふことである。

此迷ひを轉ずるのに、何うしたら宜いかと云ふに、經文の方では八萬四千と、數々あるのでございませうから、詰り轉迷開悟の方法を御教へ下されとあるに過ぎない、そこで小乗と大乘とでは違ひます、小乗の方では此迷惑と云ふことを只非常な困難なものになしてしまつた、是れある以上は、吾々は到底樂は出來ぬ安心は出來ぬ、何でも此迷惑を没却してしまはなければならぬ、其迷惑を没却さへすればそれで能事終る、斯う云ふのが小乗である、夫から其手段を俱舍論などで詳しく解いてある、あの羅漢様になるのは段々程度がある、四の階段が付いて居る、概略道行を

云ふと初め見惑を先きに説きそれが八十八通りに分けてある、段々粗荒い所から微細なる所へ探りを付けて奥深く征伐して行く、之を八十八の見惑と云ふ、それで八十八種の見惑を籠めてしまふ、それには何うして往けるかといふに、つまりは善因善果、惡因惡果の法則である、苦集滅道四諦である、之を四の締め法と云ふ、之を繰返し繰返し觀察して、苦集、集は煩惱の意味で、是が悪いことを集める、苦痛が起つて來る、それから滅道と云ふのは修業即ち修養法で其修養を行へば滅却することが出来る、斯う云ふので四諦と名付ける、矢張、善因善果、惡因惡果の法則である、さうすると一の悟りを開くことが出来る、さうすると其五利使が無くなる、次が五鈍使である、是の薄い厚いに付いて、八十一通りに分けて又説明してある、是また段々粗荒い所から段々微細な所まで征伐して行くのである、それを説くに、須陀温の位、それから阿羅漢と云ふのは、九九八十一通りに思惑を斷じて了つて、羅漢になり、段々有餘涅槃無餘涅槃と云ひまして、肉體の間は縱令悟りを開いてしまつてもやはり肉體が残つて居る、有餘と云つてまだ残つて居る悟りである、夫から肉體まで無くなつて了つて苦痛の原因を全く滅却して了う、それが阿羅漢の極意である、だから小乗教の方は迷惑が苦痛の原因になつて憂ふべきものである、是さへ取つて了へば、お互安心の身の上となる事が出来る、之を取盡すを以て修業の終局、斯う觀る

のが小乗である、所が大乗となるとそれでは済まぬ、それは只自分の迷惑を取つただけであつて  
 まだ覺悟の方の働きが少つとも付いて居らぬ、それで大乗になると此惑を斷じてそれで盡きたと  
 思ふが、さうでない其惑はまだ細かいのがまだ幾つあるか知らぬ之を無明と名付ける、それを段  
 段取つて行かなければならぬ、それを取つて初めて道理の本體を認むることが出来るやうになる  
 そこで一分の無明を斷じて一分の眞理を悟ることが出来る、之が大乗の修業である、其から段々  
 覺悟の方へ向つて行く、それが菩薩の階級となつて居る、菩薩の階級も細かく云ふと、際限はな  
 いが、大體に於て四通りに分けてある、始覺、本覺、この始覺と本覺と全體同じであるが、始覺  
 を分けて凡覺、相似覺、分眞覺、究竟覺、斯う云ふ按排になる、段々覺悟して行く順序である、  
 起信論は不覺と書いてある、幾らか悟つたのだ、けれども本統の悟りにならぬ、起信論は不覺と  
 名付けて居る、そこで本覺と云ふものはどんなものであるかと云ふと、大體因果の理法を論じて  
 居る、善い事をすれば善い者に成る、悪い事をすれば悪い酬いがある、それでこんな事をしては  
 ならぬ、それで悪い事を慎んで行くだけの程度で、それが本覺である、次に其悪い事をするに云  
 ふのは全體どこから出て来たかと云ふと、今の見惑、思惑が多く其處に居て徒らをする、それを  
 征伐しなければならぬので、見惑、思惑を征伐する、それを相似覺と云ふ、相似たる悟り、佛の

悟りと略々似たと云ふので、相似覺と云ふ名が付いてある、菩薩の信、小乗の佛果に至つたもの  
 が、恰度釣め合ふことになつて居る、夫から分眞覺は菩薩であつて多くそこに根本無明に手着  
 ける、其根本無明には一分觸れ、ば、一分だけの眞理を認めることが出来るやうになる、そこで  
 之を分眞覺と名付ける、分に眞の道理を悟り得ることが出来ることと云ふのである、そして愈々進で  
 根本無明まですつかり取除いて了らう。さうすると心の綺麗なることは磨き上げた鏡の如く大變綺麗  
 なものになつて来る、最早煩惱は鵝の毛を銜いた程もなくなつて来た、それを究竟覺と名付ける  
 斯う云ふ順序で起信論などに説明してある。

而して其迷惑と云ふものは、初めどう云ふ所からどんな機みで成立つたかと云ふことが大變に  
 ひづかしい問題になつて来る、それは又起信論などで大變詳しく論じてある。唯生半可に、蛇蜂  
 と取らずになりましては詰らぬから、今日の所では只迷ひと云ふものと、悟りと云ふものに大體の  
 道筋だけの所を話して置くに止める、詰り言ふと、いつでも言ふ通り、吾々の凡覺と申すものは  
 佛になるべきものはちやんと持つて居るのである、それが過去の業因と云つて前の世から背負つ  
 て来た吾々の癖もあるに違ひない、夫から父母の遺傳も享けて居るものもある、尤も此社會の境遇  
 にも引立を受けて居るに違ひないのである、さう云ふものに依つて今日のお互の心の程度が茲に成



立つて居るのである、そこで今の程度を吾々が宜く自己反省して見て、さうして迷ひのある所を探り付けると云ふことが先決問題である。自分が反省して見て或は物を見たり聞いたりする場合に於ても今の五鈍使などの煩惱がどの位に起るか知らぬ、斯う云ふことを善く一つ試めして見なければならぬ、さうして見ると自分が立派でない斯う云ふ瑕瑾がある、斯う云ふ缺點がある、この所に油断してはならぬと云ふことに心づけば必ず自覺することが出来る、それが悟りなんだ此自覺を土臺として夫から段々自分を悟り、人を悟り、悟りをして究め盡す、それが佛の境涯である先づ出發點は、自己を反省して自覺すると云ふことが先決問題である。

### 疑心の處置

此前お話を致しましたがこの疑と云ふことは必ずしも悪いとはばかり極める譯にいかぬ、と云つて悪い方面から云つたならば、此位又害を爲すものは恐らく無いと云つて宜いだらうと思ふ、それで迷の反對が悟、疑の正反對が信、信じたと云ふこと、疑ふたと云ふこと、斯うなる、信ずると云ふことは詰り自力を以て物の撰擇をして自分に必要な物を撰み取つて其處に心を極めて了ふ

是が信の字の意味である、ところがそれがなか／＼極らぬ、其極らぬといふときに疑になる、どうしやうか斯うしやうかと云ふ按排に心が動いて居つてどうしても落着がないこれが疑になる、それだから疑を引繰返せば信になる、信を引繰返せば疑になる、此疑と云ふ文字の意味を解釋しますと猶豫不定の義と申します、此猶豫と云ふ言葉が今日世間で能く使はれて居る、暫時御猶豫を願はなければならぬなどと云ふ御猶豫などと云ふと大變美しい人を尊敬したやうな言葉に聞えますが、此猶豫と云ふことは餘り褒めた言葉でない、詰り愚圖々々して極りの付かぬと云ふことである、さうすると暫時御猶豫と云ふのは暫時愚圖々々して戴きたいと云ふことになる、何んだかおかしい、一體此猶豫と云ふ文字は書物に依ると斯う云ふ解釋になつて居る、昔支那に猶豫と云ふ獸があつた、此獸が疑ひ深い獸でどうも一定の仕事の出来ないやつなんです、例へば木に登つても登つて見たり降りて見たり、降りたかと思ふと昇つたり昇つたかと思ふと降りたり、始終同じ事を繰返しく／＼無駄な事はばかりやつて居る、さう云ふ愚圖々々して極りの著かない奴である、それで人間も愚圖々々して極りの著かない奴を猶豫と云ふ、さうすると是は鄭重な言葉でない、詰り猶豫とは物の極らぬ意味である、さうすると彼の暫時御猶豫などと云ふことも此事は今此處で極りを著けて戴いても、まだ何と決定して宜いか其處が判然としない又再びやり

直すやうなことでは億劫なことだから、是は其儘そつと極りを著けずに置いて戴きたうござる、斯う云ふ場合に暫時御猶豫をと云ふことになる、それから信とはちやんと極りの著いた事で、疑は其正反對で心がぐら／＼して何方とも極りが著かずに居る、それが疑と云ふ代物である。更に疑の害の方から一つ言つて見やうならば、此位世の中を害するものはない、それは親子の間が親しからうが夫婦の間がどの位睦しからうが其間に若し疑が起つたらどうする、親子を疑ひ子は親を疑ふ、夫は女房を疑ひ女房は夫を疑ふ、斯うなつたら大變である、殊に此疑と云ふものは變なもので、心に疑が起ると其人の仕振りが違つて來、言葉の使ひ方から所謂其態度と云ふものが違つて來る、さうすると一方では又其平生の態度と違つたのを見て更に疑を起す、どうも變だ、どうも忤の奴近頃變だ、俺が物を言付けても返辭の仕按排が面白くない、彼如何か考へて居らぬかしら油斷出來ないぞ、斯う云ふことになつて來る、さうすると親爺の素振りが違つて來る、忤に對する言葉使ひから總ての事が違つて來る、其態度を見て忤の方では又疑が起つて來る、どうも親爺變だ、此頃俺のことを變に思つて居る、俺も覺悟せんならぬと斯うなつて來る、互に疑と疑とで睨み合ふ、其結果どうしても破裂して了ふ、是は恐るべきものである、故に古い言葉に疑心暗鬼などと申しますがあれは能く使はれる言葉で、疑の中から鬼が出る

と云ふ、互に疑と疑とで睨み合つた結果は其間から何も善いものが出て來ませぬ。鬼位のものが出て來るに違ひない、さうすると一方でも疑ふ、さうすると互に疑と疑とで睨み合ふ、仕舞にはどうしても何かしら衝突する、心が暗んで聞くなりましますから鬼が出て來る、鬼が出ぬまでも悪口が出るとか拳固が飛ぶとか、遂には三下り半まで出ぬとも限らぬ、是は歴史や何かに就て考へて見ても、國と國との戦争は大概元は何から起つて來るか云ふと疑から起つて居るやうである、其證據は近頃の戦争にして見たところが能く觀察して見ると皆初めは疑です、今日全體軍備擴張々々々と云ふが彼の軍備擴張は何の爲めだ、詰り他の國を疑つて居るからである、何處の國でも戦争する事が無いと信じて居れば軍備擴張も何も要つたものでない、ところが互に國と國との間に同盟したの何んのと云ひながら、其同盟の中に多少疑つて居る、さうして矢張り軍備擴張をやる、秘密にして成るだけ他へは知らさぬやうにして密に擴張をやつて居る、それを向ふで嗅付けるから疑が起る、例へば日露戦争にしたところがさうである、初め北清事件の時に日本の勦振りが宜かつた。そこで露西亞がどうも日本は油斷が出来ぬぞと云ふのが發端です、それで露西亞の方でいろ／＼準備をした、日本の方でも露西亞は怪しいぞと云ふので朝鮮の方に對して相當の準備をする、露西亞の方では一層疑つて段々滿洲の方へ準備をした、其準備を見て

此方では一倍の疑を起す、其疑と疑との結果あんなに衝突つてしまつた、さうして見ると此疑と云ふもの、害は實に廣大なもので、唯個人の間を打壊はすばかりでない國と國との間柄を打壊はす、疑心から恐しい鬼を出して、さうしてお互に難澁をせねばならぬことが起つて来る。之に就ておかしいやうな話ですが、能くお祭の掛行燈に歴史畫などが描いてあるが、あの中に油坊主などが描いてある、あれは昔平清盛の父平忠盛と云ふ人がありまして、白河院と云ふ隠居の天子様の御寵愛を受けたので、後に清盛が出世したなども其處に大なる原因があるといふことであるが、其白河院天皇様に寵妃があつたそれを京都の祇園社の邊に別荘か何かを拵へて圍つて置かれたものと見える、さうして時々お忍びで入來しやる、其時に誰がお供を申付かるかと云ふと、何時も忠盛にお供を申付けられる、それで或る時、夜分竊にお忍びでお出掛になりまして、それで祇園社の邊を訪ねてさうして祇園の社を通り過ぎて向ふへ往く、祇園の社は今日淺草觀音様のやうに賑かな所ですが、今から五六百年の昔に溯つて見れば淋しかつたに相違ない、殊に夜分雨のしよぼ／＼降る時分に通り掛つたから非常に物淋しく感じたのは無理もない、其時忠盛が弓を擔いでお供をした、當今杯は「ピストル」でも携えて往くと云ふ場所なんです、昔はさう云ふものが無いから弓を擔いでお供をした、闇夜に社の内に這入つて往くと向ふから怪しい

奴が出て来て、其風を見ると宛然化物だ、何んだか知らぬが頭の方を見ると眞白な恐ろしい棘々した物を冠つて居る、而も口からは火炎を吹いて居る、其有様は何んとしても鬼だ、さう云ふ怪物が向ふの方からのそり／＼と出て來をつた、そこで白河院天皇様が叱驚して後振り返つて忠盛何か怪しい奴が來た疾く弓で射遂げてしまへと仰せられた、忠盛之を承つて射やうとは思つたが性剛膽な人間でございますから、化物だつて高が知れたものだ同じことならば彼奴を弓で射てしまつては面白くない、どうかして彼奴を生捕に見たいものだと云ふので、そり／＼と化物の傍へ寄つて行つて化物の後に廻つて後からうんと抱き留めた己れ畜生何者かと云うて捻伏せたら、化物だから喰つてでも掛るだらうと思つたが喰つても掛らぬでぎやつと云ふ聲を立て、どうぞ勘忍して下さいと云ふ、勘忍して呉れと云つて一體貴様は何んだ、何んでもございませぬ、何んでもないつてそんな風をして何故出て來た、私は此社内の守をして居る留守居坊主でございます、留守居坊主だッ何して今頃出て來た、いや私の役目は此お社へ毎晩お燈明を上げるのが私の役目でございます、今晩早くお燈明を點ける積りでありましたが雨が降つたり何かして遅くなりまして、雨が止むかと思つたら止みませぬと云ふてお燈明を點けずに置いては私の役目が濟みませぬ、それだから已むを得ずお燈明を點けなければなりませぬ、ところが私は貧乏で

傘がございませぬ、傘が無いつて頭に冠つて来たものは何んだ、是は麥稈を束ねて傘の代りに冠つたのでございます、さうすると頭の眞白に見えたのは麥稈だ、へい、それは分つたが貴様の口から火を吹いたものは何んだ、火などは吹きませぬ、吹かぬことがあるものかばつくと云ふそれはお燈明を點けるために火を入れましたが雨が降つてどうも火が消え掛つて困ります、消えられて了つては仕様がございませぬからそれで時々フー〜と吹いたのでございます、あゝ左様かそれで譯が分つた、燈明を點けに来たのか、左様でございます、と云ふやうな譯でありまして白河院天皇様が大變にお喜び遊ばした、忠盛貴様は度胸の良い男だ貴様の度胸は實に頼もしき男である、若しお前が度胸が無かつたならば罪の無い者を此處で殺してしまふ所であつた、全くお前の膽勇は頼むべしと仰しやつて、それから益々忠盛を御信用遊ばしたと云ふことが日本外史などに面白く書いてある、是が彼の世の中の歴史畫と稱へてお祭の掛行燈などに描いてある、油を引繰返したと云ふやうなことで油坊主と云をて居りますが、是なども私にはさう思ひます、白河院天皇様にもせよ、亦忠盛にもせよ雨の降る暗夜にそんな森を通り掛つて何んだか物淋しい化物が出て來なければ宜いと思つて居る矢先へ、そんな者が出て來たから忽ち化物と認めることになつた、認めた結果は危い、若し忠盛が度胸が無かつたならば、何の罪の無い者を射殺される

所であつた、それだから此疑心と云ふものは僅かな事でも解決が付かぬと云ふと斯う云ふ間違ひが出来、實に恐るべきものである、だから疑心の悪いと云ふことは言ふまでもない、非常に疑が世の中に害を爲すものである、實に恐るべきものであると斷定して差支ないと思ふ。

それならば寧ろ人間の心から疑を全然取つて了つたらどうか、人間は決して心に疑を起してはいかぬと斯う極めてしまつたらどうするか、さうしたならば私は大變な事が出で來るかと思ふ、なせかと云ふとてんで今日の世渡りが出來なくなつて來るだらうと思ふ、知識の發達もなくなつて了ふ、丸で世の中が滅茶々々のものになつて了ふ、其の一例が譬へば電車に乗つた處が何んだか變な奴が出て來て自分の懐の中に手を入れたが、疑つてはいかぬ〜と云つて居ると懐の物を皆持つて往つて了ふ、それだから全然疑と云ふものを取つてしまつたならば堪らぬ、夜分怪しい奴が這入つて來てがたんびしんする、疑つてはいかぬ〜と云つて寢て居ると家の物を皆持つて往つてしまふ、それだから人間の心から疑を全然取つて了つたならば馬鹿と云ふか氣抜けと云ふか、逆も此世の中に立つて往くことが出來なくなつてしまふ、のみならず智識の發達と云ふものは皆此疑の心から起つて來る學問など、云ふものは皆此疑から起されるのです、何れでも疑の餘計起る者が學問が善く發達して來る、智識の乏しいのは疑の餘計起らぬ人間

なんです。其一例を言ふと私共の宗祖法然上人と云ふ人は非常に伶俐な人であつた。其當時法然  
 は世界中一等伶俐の人間であると云つて世間から褒められた人であつた。それだから幼年の時か  
 ら普通の人間とは大變違つて、悉く物に氣が付いたと云ふ。それで十五の年に初めて比叡山に登  
 つて持寶房源光と云ふ人の所へ弟子入をした。其時に四教義と云ふ書物を出して之を貴様讀んで  
 見ろと云つて試験をした。さうするとそれを持って自分の部屋に歸込んで精しく讀んで見て、さう  
 して不審紙を附けたと云ふ。さうして其翌日持寶房源光の所へ往つて一々質問をした。其時に源  
 光が驚いた。是は凡人ではない。斯う云ふ所は昔の大學者でも容易に心付かぬ所である。然るに  
 此年少の者が斯う云ふ所に心付くと云ふのは是は實に容易ならぬ者である。吾々の手許に置いて  
 教ふべき者でない。もつと立派な學者に附けて勉強させなければならぬと云ふので更に皇圓阿闍  
 梨の處へ送つて勉強させることになつたと云ふことが法然上人の傳記の中に書いてある。そこで  
 法然上人の偉いと見られたのは何んだと云ふと書物に就て疑が餘計起つたのです。それで源光  
 が驚いた。それだから人間は誰もさうだけれども智惠の鋭い人間と鈍い人間とある。智惠の鋭い  
 人間はどんな者かと云ふと疑の餘計起る人間である。智惠の鈍い者は疑が起らぬ。疑はなくち  
 やならぬ事が眼の前にぶら下つて居るのに一向疑はぬ。ぼんやりして居る。よく婦人が彼の方は

能くお氣の付く方だなんと云ひますが氣の付くと云ふのは皆疑ふからである。世間の言葉には、  
 など云ふのは皆疑です。其はてなと云ふことの餘計起る人が氣の付く人である。ぼんやりして  
 居る人だとはてなが起らぬ。其を抜作と云ふ。これ等は詰り劣等な人間だ。劣等の人間程疑ひが  
 少い。上等の人間程疑ひが多いと云ふことになる。さうすると人間には疑と云ふものが無くて  
 ならぬものになつて来る。それから又學校で試験をする。詰り疑はせるのである。問題を出すの  
 も疑。それを解決して答案を出す。それだから學問をしても疑の起らぬ者は發達せぬ。疑の起  
 る者程發達して往く。然らば學問の方に疑が必要であつて佛敎の悟の方には疑が必要でない  
 かと云ふと是は矢張り必要である。大疑の下に大悟あり。大に疑つたときに大に悟る所がある疑  
 の起らぬ前に悟は開けぬ。さうすると悟を開くが爲めにも此疑と云ふものは前提になる非常に  
 必要なものである。さうすると茲に困つたことが出來て來た人間には一體何が必要かと云ふと此  
 疑ひ程必要なものは無いが、一方からは此位害になるものは無いと云ふことになつて來た。實に  
 厄介な代物である。然らば之をどう云ふ按排に持扱つたら宜いかと云ふ是が私の今日お話しして  
 見やうと云ふ趣意である。

其處置に就て譬へて言つて見るならば、丁度吾々が生命を續ける爲めには三度々々の食事と云

ふものが極めて必要のものである、是は生命の親だ是れ無くてはどうしても今日生命を續けることが出来ぬ、非常に大切のものであるが、胃腸に這入つた儘何時までちつとして居られたならばどうするか、それは大變が出来ます、食べた物が直ぐに消化して呉れなくては困る、消化さへすればそれが自分の體の土臺になる、それで今の疑と云ふ代物が丁度それです、疑と云ふものは吾々の身に取つては非常に必要なものであるけれどもそれが旨く解決が付けば宜いが、若し旨く解決がつかぬと大變が起る其解決の付いたときは何んだそれを信心と云ふ。世間の言葉に成程と云ふことを言ひませう、は、あ成程あれが信じられた有様です、だから疑は幾ら起しても宜いのです、幾ら起しても宜いが後から後から成程にしてしまはぬと困る、それが成程になれないと云ふと大變な疑心暗鬼が生ずる、鬼になつたり化物になつたり種々なものに化けて来る、それが直ぐに解決が付きさへすれば何も文句が無い、それだから疑は起すが宜いが成るだけ速く解決が付くやうにしなければいかぬ、あ、成程と云へばそこで疑は直ぐ消えて了ふ。是に於て疑の處置が付くのである、詰り解決が旨く付きさへすれば宜い、ところが困つたことは何か書物の調などをしても甲の書物には同じこと斯う言ふ乙の方では同じことで反對のことが述べてある、はてなどうも變だ、どうして斯うなつた唯どうして斯うなつて〜と考へたのでは分らぬ、それは

どうしても第三者の證據を見付けて來ねばならぬ何故に斯うなつたかと云ふ其證據を一つ餘所から第三者に依て見付けて引張つて來る、それでないと成程となれない、あなた方にしたところからさうだらう、はてな、成るだけ速く成程にしたいと思つて幾らやつても其證據の見付らぬ間は成程になれない、困つたものです、其時にはどう云ふ處置法を採るか、是は他に仕様が無い、仕様が無いからまあ假に成程とやつて置くのです、假に成程と云ふのは變なやうだが、それはどう云ふ按排にやるかと云ふと斯うだ、是は成程六づかしいと斯ふ極めて置くのです、一遍にはいかに證據を見付けてからと云ふので一寸棚へ上げて置く、棚へ上げると一寸心が落著きます、さうすると他の仕事を又やつて行ける、ところが其事一方に首を突込んで居ると他の仕事が出来なくなる、そこで是は成程むづかしい一遍には往かないと斯う棚に上げる、夫等の方法を採るより外に途が無い、何れにしても此疑と云ふものは成るべく速く片付けるやうにしたいと云ふ方針を執ることが何より大切なことである。

さて如何なる方法を探つたら宜いかといふに、私は是に於て二通りの方法を自分だけで考へて居る、それは何かと云ふと、先づ一には自分の心を能く落著けて置くこと、二には自分の心を親切なるものに育つて置き、そして成るべく速く片付けやうと思へば此二つより外に途が無

い、心が落著くと速く片付く、むしろして居るとなかく片付かぬ、それだから禪宗の和尚さんなどは頓智が多い、頓智のある人は速く此疑を片付けることの出来る人なんです、彼の仙臺の大槻磐溪と云ふ人の書いた近古史談と云ふ書物の中に書いてある話ですが、雲居禪師と云ふ人がある、此人がなかく偉い人で仙臺の伊達政宗公の歸依を受けて松島の瑞巖寺の一代になられたお方で餘程の徳者です、ところが松島の瑞巖寺に居る時のことですが、彼の松島の内に雄島と云ふ半島みたやうな島がある、其處に巖窟が一つありまして其處が禪定をするのに非常に都魯の好い所である、其處を見付けたものだから禪師が是から毎晩時間を定めては其巖窟へ座禪にお出でなすつた、すると或る二人の寺侍が之を見て禪師様が毎晩巖窟へ往らつしやる一つ驚かしてやらうか知らんと悪戯根性が起つた、そこで或夜のことそつと雄島へ往つて見た、巖窟の所へ往くには一本路だ、どうしても其處を通らなければ行くことが出来ない、さうして其處に大きな松の木が一本のたばり生へて居る、それを潜らなければどうしても向ふへ行くことが出来ない屈竟の所です、此處で一つ驚かしてやらうと云ふので松の木へ上つてそつと待つて居つた、すると丁度其時間になると禪師様がのそりくと出て來た、來たなと思つて上からそつと手を出して頭をひよつと押へた、大概の者ならば吃驚して何とか言ふのだが何んとも言はない、押へたら押へ

きりちつとして居つた、何んだか張合抜けがした、それから一生懸命力を出して押へ付けた、それでもちつとして居る、張合抜けがして仕舞には其手をそつと放した、放すとのそりくと向ふへ行つてしまつた、其男が後とで考へて見たが禪師様の心の中がどうしても判断が付かない、どう云ふ心持か知らん闇夜で俺が頭を押へ付けたのだから何んとか言はなくちやならぬ勘定だが、ちつと立留つて居つて手を放すへ行つてしまつた、實に怪しからぬ、はてな、薄氣味の悪い話、是は兎に角明朝行つて様子を見やうと思つて、それから翌朝になつて何知らぬ顔をして様子を見に行つた、禪師様お早うございます、あなた近頃雄島へ禪定にいらつしやると云ふことですが本統でありますか、あゝ行きます、近頃彼處へ化物が出るよと云ふことでございます、いやそんなものは何も出ませぬ、出ませぬか眞實に、出ない、どうも何んだか様子が分らぬな、昨夜何か出は致しませぬか、さうすると禪師様があゝあれかと仰しやつた、あれはな若い奴が悪戯したのよと斯う仰しやつた、何んだか知らぬがさつぱり當てられたやうな氣がして、是は流石に禪師様には馬鹿なことは出来ない、是は謝らずに居るとんな事が出来るが知らぬ、謝まる方が宜いと思つて、洵に相済みませぬ、實は私でございますと謝つてしまつた、あゝ貴様か、私と云ふことが御承知でありましたか、いえ知らない、どうして若い者の悪戯と云ふことが分りました、誰だつ

て分るぢやないか、通り掛ると頭を押へる奴がある、はてなと思つたが其手が温いから化物ではないと思つた、大變力を入れて俺の頭を押へるけれども其手が何となく柔い、と云つて女の手でもない、何んでも若い奴に違ひないと斯う思つたそれだけの話よ、斯う云ふことであつたと云ふ、是等が詰り常に禪定を爲されて心が平々坦々として、どのやうな場合に遭はしても落著いて居るから、それで速く解決が付く、詰り此方の心が落著いて居るからさう云ふことが出来るので、若し其時周章で、頭でも振切つて飛出して来れば當節なら新聞ものです、毎晩松島に化物が出るなど、云つて大騒ぎが始まる、それが此方が落著いて居るから直ぐ解決が付く、併ながら是は良い方に違ひはないが、今のやうなことが私などにやれるかどんなものだらうか、闇夜で誰も居らぬ所で何の氣なしに通掛つた時に頭を押へられたらばどうでございませう、其藝が打てるかどうか、私初め何んだか危いやうな氣持がする、ひよつとしたら頭を振切つて遁げるかも知れない。

そこで私は第二の方法としては、どうしても精神の修養をして自分の私利私慾の手前勝手の根性を押へて了へ、さうして親切なる心を養ひ育て、置く、斯う云ふ事が先づ私は確實なる手段ではあるまいかと思ふ、それは何故ぞと云ふと同じ疑を起しても手前勝手の根性から疑が起

ると云ふと皆邪推と云ふことになる、人の事を悪様にばかり考へたくなる、悪くばかり疑ひたくなる、手前勝手の根性から疑を起すと邪推と云ふものになる、之に引替へて最も親切なる心の上から起つた疑であれば邪推にはなりません、邪推にならないで何んとなる同情と云ふものになる、丁度自分の子供を遠方に學問にでもやつて置いてさうして親が其子供の身の上を思ひ遣ると云ふやうな按排に疑が起つて来る、親切な人から疑へば同情になる、之に引替へて手前勝手の疑は邪推となる、邪推と邪推と互に闘はすやうになれば大變が起る、之に引替へて同情と同情と互に闘へば爲めになる事を世の中に行つて行くことが出来るやうになる、是から考へると吾が疑の處置する上にどう云ふ事が確かであるかと云ふに吾々の立場ではどうしても精神の修養をして、常に私利私慾の手前勝手の根性を征伐し親切なる心を養ひ育て、行く、斯の如く工風することが一番得策であると思ふ、又此方法が一番速く解決が付く、然らば其親切の心を養ふ方法としてどうすれば宜いか、それはどうしても信仰に訴へる外ない、自分が私利私慾を起さないやうにする、それにはどうしても宇宙間の親ともなる佛の慈悲にお籠りをして私利私慾の起る毎に佛の御名を呼び、之に籠つて私慾を去つて佛の慈悲の心を自分の心と連絡の付くやうに常に心を持つより外に恐らく途の無いことであるだらうと思ふ。



## 廢惡修善

前回迄轉迷開悟と云ふことに付て御話し致しました順序上、佛教の大意に付一通りお話し進んで本問題に入らうと思ふ。

佛教の大意はと云ふと、目的は離苦得樂である、其目的を達するには見當違ひがあつてはいかぬ、其見當違ひの無いやう、目的を取調べ置く必要が起つて来る、既に開悟して見れば其開悟した事を實行して行かなければならぬ、實行をする上の其要點は何であるかと言へば廢惡修善、即ち惡を廢して善を修するといふ事が順序になるのである。

廢惡修善といふことは何事にも行らなければ成らぬ話である、それで何のためさう云ふ必要があるかと云ふと、人間この世の中に生れ出た以上何人も安樂を好まぬ者はない、然るに惡と云ふことは苦痛の原因である、善と云ふことが安樂の原因である、然るに苦痛は厭ふけれども惡の方は廢することは困る、安樂は欲しいが善を修することは迷惑であると云つたならば、是は譯の分らぬ話である、此譯の分らぬのは詰り迷ひの煩惱である、だから詰り廢惡修善は迷ひを轉じて

悟りを開き其悟りを實行すると云ふ場合に廢惡修善が生ずる、そこで先づ第一に極めて置かなければならぬものは其善惡の標準である、善とは何である惡とは何である、斯う云ふ議論である、是が近來倫理學の上でもなかく面倒な問題で、善惡の標準は容易に定められぬと云ふ、なせと云ふに時と場所とに依て違ふ、古へ善と認められた事も今日は惡と見る、古へ惡と認められた事も今日却て善と認められて居る、さう云ふやうな事がなかく妙くない、又場所に依ても違ふ、既に西洋に於て善と認められた事は却て東洋に於て惡と數へられる場合がある、又昔、野蠻時代に善と認められた事は、文明の世の中に至つて惡と認められると云ふ事が出来て居る、どうも時と所に依つて善惡の標準が異つて来るのである、詰り都合に依つて善とか惡とか其人が時代を統御する上に就いて假りに定められたものに過ぎない、だから確乎たる標準は善惡の上には立てることが出来ぬ、斯う云ふやうな議論を今日唱へて居る者がある、成程事實に徴して見ればさう云ふ事があるに違いない、所が斯う云ふやうな事が佛教などの上に古い時から論せられてある。

それは戒法を受けてそれを保つ場合である、其時に開遮と云ふことを言ひます、分り悪い語ですが開と云ふのは何うするのかと云ふと許すのである、道理の上から悪い事だけれどもさう云ふ場合ならば却て善いと云ふやうな案排に許すのである、其事を開すると言ふ、實に古い名目であ

る、夫から遮になると行つても差支ないことである、道理の上から言へばなに差支ない事であるけれども何分にも今の事情許す譯にいかぬ、故に先づ暫く押へ止める、斯う云ふ案排に押へ止める、其事を遮と云ふ、詰り開許遮止と云ふことになる、一方は行つても宜い事だけれども行つてはならぬと押へる、行つても善い事だが行つて悪いと云ふ事は、どう云ふ事であるかと云ふと、佛教は衆生濟度のためである、其人のために成らぬ場合がある、其時は普通の道理の上から行つて宜いけれども、お前のためには危険である、だから行つてはならぬ、斯う云ふ案排に押へ付ける其事を遮開といふ、遮止は其方のことになる、一例を言へば、佛教で云ふ飲酒戒、酒を飲んでならぬと云ふ戒法がある、所が酒は人間飲むべき筈に拵へたか、人間が飲まぬために拵へたかと云ふに、酒は何人でも飲むのである、うまいから飲む、人間の飲むため拵へたものを、人間が飲むに何の差支がある、斯う云ふ理窟で、而かも政府は税金を取つて賣らせて居るでないか、悪い物なれば賣らせない、斯う云ふ理窟を言ふ、所が酒は人を酔はせるそれが危険だと云ふ、だから戒法の上にも薬酒は此限りにあらず、樂のために服用場合は差支ない、分量を極めて病氣を治すためには用ゐて宜しい決して押へ止めはしない、併し娛樂のためにも飲むと云ふ時甚だ危険物である、どんな溫和な慎み深い人間でも一杯やると猜るくなる、而うして言はぬでも宜い事を言ふ

甚だ慎みを案す修養上甚だ危険である、だから相成らぬとそれを押へ止める、是は遮止する方である、理窟の上から飲んで宜いが、貴様の身分のためには、甚だ危険であるから止せ、尙だ斯う例は澤山ございませう、例へば流行病がある、さうすると交通遮断をやる、さうすると道路は何のために出来て居る、是は人間を歩かせるために拵へた道路はお飾り物でない、人間の通行するために拵へた道である、それを遮断するは甚だ不都合だ、けれども流行病がある、其處を通つてはお前のため甚だ危険である通つては相成らぬ、斯う云ふ案排に押へる、此場合が遮戒と謂ふ、詰り親が子を取扱ふ事には此遮戒が大變行はれる、近頃若い者と年寄と衝突が起るのは此遮戒問題が多いからだと思ふ、貴様、夜出て、はいかぬ、夜だつて晝だつて、人間が出歩くのに差支ない用事があるから出る、けれどもお前の若い自分で危険であるから止せ、別して女の子でも持つた親は此遮戒が非常に嚴格に行はれて居る、斯う云ふ事は釋迦の時代からちやんと極つて居る夫から開許と云つて許す方で甚だ悪い事である、悪い事だけれども、其事情に依ては許さなければならぬ、一例を言へば生物を殺すのはいけない、此世に生れて来た物で生命より大切なものはない、それを都合のため他人の大切な命を奪ふ、こんな手前勝手なことはない甚だ悪い事である、是は理窟の上から何とも言ひ譯の餘地はない、惡に極つて居る、併ながら時と場合に依て

其殺生でも許さなければならぬ事がある、殺生の中には大殺生、小殺生とある、同じ生物を殺すにも同類を殺すのは大殺生で人間が人間を殺すのは一番重い罪である、夫から異類と謂ふて類の異つた物、人間が豕を殺す牛を殺す馬を殺すと云ふ類の異つた物を殺す斯う云ふのは小殺生で、軽い罪である、此大殺生、小殺生の中に於て其人の情の用ゐる方に依り軽重がある何の氣なしに殺すものと憐みて殺すものとそれに依て罪の輕重が定まる、斯う云ふやうな按排で區別が定つて居る、併し何れにしても自分の都合のため、他の生命を害することは悪いに極つて居る、所が大殺生にしても其事情に依ては却て功德になる殺生がある、斯う云ふやうな事を佛が言はれたことがある、それは何う云ふ場合かと云ふと詰り此動機である、例令ば、或る所で一人の悪人が常に好んで悪い事ばかりして居る、所へ一人の情けある菩薩が其有様を見て如何にも氣の毒に思ひ、お前さう云ふ事をするとなつて惡果を享けなければならぬ恐るべき事であるから止せといふと益々意估地になつて悪い事をする、種々手を代へ品を換へ諫めて見たけれども、言へば言ふほど依估地になつて悪い事をする、何ともかとも諫める方法が無くなつてしまつた、そこで菩薩が考へた、彼奴あんな悪い事を宜い氣になつて居るまるで見當違ひである、詰り自分自から穴を掘つて入るやうなものである、あれは一日活かして置けば一日だけの罪惡を重ねて益々深く入る

ばかりだ、嘗に自分一人が沈むなれば宜いそれは爲め四方八方に害を及ぼすことは大變である、自分の損ばかりでない他にも損害を及ぼす、容易ならぬ社會の害毒であると、頻にどのやうに諫めても最早到底方法が盡きて諫めても効能がない、そこで彼の惡を止めるには何うするかと云ふと彼の命を絶つより他に途がない、併し他人の命を絶てば自分も罪惡を侵すのである、其罪惡に依ては自分は未來は地獄にも落ちなければならぬ、併ながら自分は縱令どのやうな地獄に沈むとも、彼をして益々罪惡を重ね、自分を毒し人を害せしむることは見るに忍びぬ、致方がない、自分の身を犠牲に供しても彼の惡を止める他はないと決心をして涙を揮つて彼を殺害した、遂に菩薩が殺生したのであるが、自分は決して良い氣持になつて居らぬ、それで佛に訴へた、誠に飛んだ事をしてしまひました、何う致したら宜しうございませうと云ふと、佛の言はれるには、いやさう云ふ殺生をしたことならばそれは却て功德になる殺生である、決して罪惡でない、斯う云ふことを仰せられた事がある、斯う云ふ場合が惡事を許すことになる、さう云ふ事は開と云ふことになつて來ます、是は今日の法律の上でも、事情を斟酌して刑一等を減するなどと云ふ事がある皆な是れ斟酌するものに違ひない、併し何にしても是は精神上のことで、形の上では全く罪惡を犯して居るから、何うも凡夫同士では、判斷に苦むのである、是は何うしても聖人とか佛でなけ

ればやたらに行ふことは出来ぬ、やたらに行つたら大變な弊害が起つて来る、心の中は形ちの無いものでありますから、何とも分らぬ、だから何うしても先づ之を社會の上に制裁をしやうと云ふ時には形ちに就いて處分する他ない、形ちの上と事情の斟酌と雙方相待つて處置することになつて居るさうである、開許の方は濫りに行ふことは出来ぬ、濫りに行ふことになつたならば、之を口實に諫めても悪い事をしたのであるなど、云つて種々な事をされてはたまつたものでない、斯う云ふ口實を設けて行かれては危険なことであるから、聖人とか佛でなければ容易に行ふことの出来ぬことである、併し此遮止する方は必要なことであると思ふ、縦令やつて宜い事でも若し走り過ぎて弊害に陥るなど云ふやうな憂ひのある場合に押へ止めると云ふことは何うしても仕なければならぬ、此上から善悪が種々ある變はつて来る事情がある、斯う云ふものに付て時と所に依つて善悪の標準が異うと云ふやうなことを多く唱へて居るのである、併し開許と云ふことに遮止と云ふことを明らかにして考へて見れば、さう面倒なことでない、善悪の標準はちやんと極つて居る、それを佛敎は善悪の標準を定めるに何うして定むるかと云ふと、金剛瓔珞經に斯う云ふ語がある、理に順じて心を起す之を善と云ふ理に背いて心を起す之を惡と云ふ、斯う云ふ御語がある、是は誠に簡単な語であつて善悪の標準となるべき基である、私共の心は此世界の道理と其

性質を同じくして居るものである、だから吾々の心は道理の前に働かなければならぬ、ちやんと道理に一致して働くべき筈である、所が吾々の心の道理に相應して行く性質もあるけれども、亦これと同時に自分最負、手前勝手の手をやる、斯う云ふものが頭腦に染み込んで居つて、なかなか道理とうまく相應しない、相應すればそれは良いに違ひないが、どうも私の都合が悪い、都合と云ふものは手前勝手であつてうまく行れない、道理のまゝにすれば宜いが、私の手前の都合が悪い、それがため道理に従ふことが出来なくなる、然るに縦令都合が悪からうともそれは手前勝手である、だから道理には従はなければならぬと、其道理に従つて總ての心を働かせるやうにするのが善である、斯う云ふ按排に標準が定まつて居る、それで一度極つたやうでありますけれども、其肝腎の吾々の心の對手となるべき理とは何ぞや、斯う云ふ按排に考へて見ると是が形ちがない、茲に見ると摺へ所がない、此心は理に循へば善になる、此心は理に背けば惡になると言つた所で、理に循ふにせよ、背くにせよ、其肝腎の對手となるべき理と云ふのはどう云ふものである、實際形ちは無いけれども生きて働いて居る、此宇宙間の森羅萬象、何に依つて成立して居るかといへば、皆な道理に依つて成立して居る、若し此道理があると云ふならば、自分の心を取つ摺まへて見る、之に依つて比例して見ると否と言はれない事實が起つて来る、お互に自分の心が無い

とした所で此心がある、又心があつて生きて居る、若し肉體ばかりで人間の値打がちやんと整ふならば死んだ人間でも腐らぬ内はそれで宜い勘定である。所が今死んだばかりの人間でも目も鼻もちやんとして居ても役に立たぬ、其は心が無くなつてしまつたから、目があつても見ることが出来ない、耳があつても聴くことが出来ない、そればかりでない一寸眠つた場合でも或は氣絶した場合でも分らないと云ふのは詰り自分の心の息んだ場合である、途切れた場合である、さう云ふ場合に分らなくなる、それが眼が覺めると明らかに成て承知しませぬが微かに分る、胸三寸などと謂つて、心は胸に在る、近頃の人は頭と云ふが、あの人は頭が善い、頭が悪い、記憶力が悪いなどと云ふが昔は胸にあつた、今は上へ揚げて頭になつてしまつた、おかしいもので、昔の心は胸に在り、今の人の心は頭に在る、さうかと思ふと、こつて痛いと思ふ、痛いと思ふのは誰か心である、眠いと思ふのはそれは心が眠いのである、夫ちや痛いと思ふのも眠いと思ふのも誰か心が感ずるのである、さうすると痛いにも心があり、眠いにも心があるやうな勘定である、だから爪先にも心があり頭にも心がある、身體中どこにも心の居らぬ所はない、併ながら働きの鋭い場所と、鈍い場所とあると云ふことは否と言はれない、例へば同じ手でも指の先と、手の掌と當つて異う、一番鋭いのは指の先である、蚤を押へるにしても手の掌で取つ綱まへてもいつも刃ね

て逃げて了ふ、始末にいかぬ、指の先で押へて御覽なさい、ちやんと分る、手掌などは駄目である、さうすると同じ手の中でも指頭になると別段鋭い、然らば手の掌には無いかと云ふと、有ることはあるが鈍い、夫から舌などもなかなか鋭い、鼻なども鋭い、何處に何物があるか直ぐに嗅ぎ付ける、頭などは筋が緻密になつて居るから餘程異う、頭にどしんと何か投げ付けるとばしつとして夢中になる、お聲などに投げ付けても何ともない、夢中になるやうなことはない、そんなことで當る箇所に依て、其感覺を異にすることは事實である、けれども全く無いと云ふ所はない、そんなら心は肉體を撤去して了うと、それ以外に出ることはないかと云ふとそれは然うでない、今まであつた事十年後の事でも二十年後の事でもちやんと胸に浮んで来る、又百里千里前きの事と雖も考へれば浮んで来る、然うすると心は身體の外に出てある、前の方にでも後の方にでも横にでも豎にでも何處でも自在に大なる働きをすることが出来ることか明らかに分る、夫から人間の價値も何に依て極まるかと云ふと此心の働き次第である、此心の働きの鋭いのが伶俐である、此心の働きの鈍い者が頭の悪いので役に立たぬ、困つた者となる、まあ人間の相場です、人間の相場と云ふものも心の働きの優劣で、一人前の人間と云ふものは一大要素は何であるかと云ふと心である、身體ばかりあつても役に立たぬ、おまけに氣狂ひにでもなつて了ふ、身體

ばかりあつても仕方がない、ちやんとして居れば働ける、然るに其大切なる心が形ちがあるか形ちはない、形ちは無いに違ひない、是に依て之を見れば、やはり此宇宙間にも道理があつて此通り運轉活動すべき筈なものであると云ふことは推して分るのである、一體心と道理と云ふものが同じ性質なものである、此心が常に頭の中から成立つて吾人の身體も心も此大なる宇宙の道理の一分子として其中から成立つて居る、何うしても道理に従はなければならぬことに成つて居る、だから其道理に順つて此心が働くばかりか理に順じて心が働くと云ふ、所が自分の都合のため其道理に従ふことが出来ない、善いには違ひないが私の都合が悪い、其時は理に背いて心を起したのであるから悪である、斯う云ふ按排に善悪を分ける、善悪の標準は立つて居る、だから善と悪との關係を言へば、こんなことに御承知になつて戴くより外仕方がない、何も時と所とに依て善悪の性質が異なるのではない、善悪の性質は一つのもので決して變はりはない、所が其人のために或は許し、或は押へ、若くは善悪の種々の教へが起つて来る、其上から今日の世間の學者は其枝葉を認めて、本を認めない、善悪の標準が立たぬなどと言ふ、立たぬ譯はない、善悪の標準は以上述べた通り、佛教に於ては定つて居るのである。

そこでお互が悪を廢して善を修養するには、どう云ふ方法を探つたら宜いか、所が此お互人間

の所業として細かく言つたならば際限がない、けれども區切つて見ると身口意の三業、即ち身業口業、意業である、それで人間の所業としては澤山あるけれども區切つて見ると三通りしかない身業は身體でする仕事、手足を動かす體を振廻はすとか云ふやうな事をするのが身業、口で喋舌るのが口業、夫から心で考へて工夫するのが意業、この三の他仕事がないが、御同様に生物である以上は考へなしに居られぬ、喋舌るなど云はれてもいつ迄も無言は出来ない、動いてはいかぬと云はれてもいつ迄も瞬きもやらぬで静止しては居られぬ、何か知ら行らなければならぬ、どちらにしても動かすに居られぬものである、然るに其動き力が理に順じて動けば、それが善業と云ふものになる、自分の幸福を求めるところも皆なそれが基である、之に引替へて此三業を理に背いて動かさうものならば自分の厭ふ所の大嫌ひの苦痛の結果を迎へなければならぬ、恐るべきことである、然るにどちらにしても動かすに居られぬものである、動かすに居られぬならばそんな下手な動き方をしないが宜い、自分の好むべき結果を探るやうに動けば宜いと云ふ上から御教へになつたのが十善業、十悪業と申しますのは十の悪い事、十の善は十の悪い事を止めれば、十の善い事が成立つて来る、悪業はどう云ふ事になるかと細かに言へば大變ある際限がないが、けれども區切つて見ると十悪業になる、身口意の三の關係はどうなるかと云ふと、身が三、口が四、意が

三、是を十惡業となる、體でする惡い事は三通りある、口でする惡い事は四通りある、意でする惡い事は三通りある、之を十惡業と謂ふ、身で三通りと云ふのは、何う云ふ名前が付いて居るか  
 と云ふと、殺生、偷盜、邪淫と云ふ名前が付いて居る、そこで此佛様の教へは、總て普遍的である、下は幼稚の十歳の兒童に至るまで、上は智者、學者、佛に成らうと云ふ者までも、仕事が皆  
 な此中で出来ることになつて居る、一番惡いものは何かと云ふと、殺生、偷盜、邪淫と云ふことにな  
 なる。殺生は生物を殺すことである。然らば生物さへ殺さなければ殺生でないかと云ふと、然ら  
 でない、是は一番主なるものに付いて殺生と云ふ名が付いたので其實總て他を困らせる、他人  
 に困難を興へる、大に迷惑を掛けることが皆な殺生になる、他に迷惑を掛ける程の事が殺生と云  
 ふ位なればなせ生物を殺すやうな大きな名前を付けたかと云ふと、此世界に生れ出た物で何が一  
 番困難であるかと云ふと生物に取つて命を取られる程困難なことはない、是が困難の親玉である  
 所が自分の都合のため他人の大切な生命でも何でも構はず取つてしまふ、だから手前勝手の親玉  
 である、それで親玉に付いて殺生と謂ふ名を付けた、總て名前は其中の主もなるものが代表者と  
 なつて名前の主となる、昔でも村などは村の代表者を名主と謂ふ、名の主と云ふから其中で主も  
 なる者で村を代表する、それで他に迷惑を掛けると云ふことは然うである、けれども其中で自分

の都合のため他の一番大切なる生命を奪ふと云ふことが手前勝手親玉と云ふ所から殺生、斯う  
 云ふ所から名が付いたのである、夫れから偷盜、是は泥棒である、偷み盗む、是も大袈裟の名前  
 である、所が是もそんな大きな事は今日やるかと云ふに是れもやはり主もなるものに就いて偷盜  
 と云ふ名を付けた、實を云ふと一寸した事である、猜いと横着とか言はれる程の事が皆な泥棒  
 の仲間である、同じ仕事をしても猜い奴は一寸した事でも皆な他人にばかり行らせる、さうして  
 自分は無駄話でもして居る、斯う云つた横着な者、斯う云ふ者を骨偷みと謂ふ、夫れから物を盗  
 む泥棒がある、人の目を盗み、親の目を偷み、兄の目を偷み、主人の目を偷む、之を眼泥棒と謂  
 ふ、總て陰日向をするのが、皆な泥棒である、其一番主もなるものが他人の物を黙つて取つたの  
 が大泥棒である、總て事は細かい事が大事である、金剛經の中に、斯う云ふ言がある、水の滴り  
 微なりと雖も漸く大器に滿つ、刹那の造罪は咎無間に墮す、刹那は一寸したこと一寸の間を一分  
 と云ふ、それを六十に割つた程の短いものが刹那と謂ふのである、造罪は罪を造ること、此位  
 の事はと思つて、自分自から容して善からうと思ふのが、結局大罪になる、雨滴水のばたりく  
 落ちるのは少しばかりづつであるが、終には天水桶一杯になる、實に油断が出来ない、だから  
 御同様慎まなければならぬことは細かいことで大きい事は大丈夫である、目的論や何か大ざつぱ

の事は構はぬが細かい事に注意しなければならぬ、夫で氣を注げなければ成らぬことは細かい事である、斯う云ふ事は總て偷盜罪になり、夫から邪姪である、是も餘り大袈裟な名前でも、男女がみだる事、男一人女一人が夫婦、是は天理の法則で、是が他の持物と密通する、之を邪姪と謂ふ是も親玉に就いて名が付いたので其實を云ふと總ての極りを守ること、其守るべき極りを守らぬのが皆な邪姪である、人間の内で何が大切かと云ふと儒教で之を禮と謂ふ、禮儀三百威儀三千などと謂ふ是は人間の守るべき道である、親には親として守らなければ成らぬ極りがある、子には子として守らなければ成らぬ極りがある、夫は夫、女房は女房、事務員は事務員として各々守らなければ成らぬ極りがある、其極りを正しく守つて行くのが人に禮と謂ふ、即ち「ある可きやう」にする、親は親にあるべきやう、主人は主人にある可きやう、家來は家來にあるべきやう、之を守るのが一番大切である、斯う云ふことである、所がその所でそんな堅苦しいことでは仕様がな、い、そんな事は何うでも宜い、君と僕の間柄でそんな面倒臭い言を云はぬでも宜い、此な間柄なとと云ふことがいけない、それが爲め禮が崩れて了う、其結果はどうなる、和合を破ることになる、だから此極りを保つのは和合を保つためである、親爺は何うでも宜い、親爺は何うでも宜いと仰つしやると、終局には愛想を盡かして了う事になる、互に腹の中で不平に思ひ、衝突してし

まう、だから極りは面倒くさいやうだがちやんと守らなければならぬ、守ることは禮である、だから禮は和を尊ぶ、初めは僅かな事でも終局には大きく成る、他人の女房だつて何うでも宜い、なぬに親だつて子だつて何うでも宜い、無茶苦茶になつて、狗も親爺も同じやうになつて了う、そこで親玉を以て往つて邪姪と付け、何うでも宜いと云ふ仕業が皆な邪姪の中である、御同様今日本人と生れて以來、今日までそんな細かい事が有つたらうか無かつたらうかと云ふことは御同様反省して見たい、さうして其中でどう云ふ方面に禍ひが多かつたかと云ふことも調べて見て、自分が修養しやうと云ふならば其多い方に心を注いで、而うして改善の法を求めより他に途はない、身の仕業は斯う云ふやうな事が悪業となる、是は身の悪業、夫から口の悪業の上にも四通りある、それは妄語、綺語、惡口、兩舌、意の悪業に三通りある、是には貪慾、瞋恚、愚癡、斯う云ふやうな名が付いて居る、夫から自分の氣に入らぬのに出會して、忌々しいと思ふのは邪見、邪見は見當違ひである、どんな按排に見當違ひするかと云ふと、自分の氣に入つたものは悪い物も善く見える、氣に入らぬものは善いものも悪く見える、斯う云ふのが見當違ひ、是等が意業の上へ起る悪業である、斯う云ふことは努めて廢する、何とか工夫して之を押へ付ける、而うして壓へ付ければ、それと反對に今度は善い方に意を注いで理に背いたることを避けて何事も理に順



じて行ふこととなる。  
然るに近來倫理學で忍耐くと言ひますが、忍耐ぐらゐではいかぬ、何うしても是は信仰に訴へ心の修養をして行かなければならぬ、心の修養さへ積めば必ず餘習は脱けることが出来、身口意の三業が理に順じて動くことになることは疑ひないと思ふ、是に於て初めて人間成功したと謂ふことが出来る、幾らお金を儲けても、それで成功したとは謂はれない、自分の品格を高めて、初めて人間は成功したと云ふことが出来ると思ふ。

### 忠誠守分

さて「忠誠守分」と云ふことはどう云ふことであるか、先年御即位の時の御勅語の中にある御言葉であります、あの御大典に就ては、何處に行つても、彼處に行つても大騒ぎで、目出度い目出度いで御輿を昇いで、わつしよいくと大變に賑かな事、私共のやうな年を取つた者までも何となく周圍の刺戟に依つて、浮き立てられるやうな氣持がした、其れまではどうかと云ふと何處に行つても彼處に行つても不景氣で困る、不景氣で困ると泣き言ばかり聞いて居りましたとこ

ろが、豈に圖らんや御大典となると、まるで先の天地の全體が變つたと云ふても宜い位の有様で其の不景氣などと云ふ泣言はちつとも無い、何處に行つても御目出度い萬歳と云つて大騒ぎである。さうして見ると是は謂ゆる 今上陛下の御徳の然らしむる所で、斯かる不景氣の世界が忽ちにして此御即位に依つて斯う云ふ景氣付いた威勢の宜い世界になつたと云ふことは御同様に御目出度い事で、非常に有り難い事であると考へたのである。

此間 私は横濱へ参りました、處が或る人の話に此世の中の景氣付いたと云ふ事と、不景氣と云ふことを實地に卜知することの出来るものは、恐らく空樽を渡世にするものは一番早く知れるやうだと云ふ話であつた、其は不景氣になると云ふと其空樽が少ない、少し景氣付いて來ると空樽が多くなる、で、世の中が實際に不景氣であるか、幾分景氣付いて居るかと云ふことを計るには空樽の商業に依つて之を卜知することが出来る、所が以前には空樽が割合に少なかつたが此度の御大典に際して其空樽を大變に買出すことが出来るやうになつて來たと話された、成る程是は實地の上の話で、空樽と云つたからとて醤油樽や味噌樽が幾分多くなつてもそれは別に景氣に關係は無い、何れ空樽と云へば酒樽でせう。さうすると景氣付いた時には、酒樽が餘計空くと云ふのである。不景氣になると酒樽が餘計空かない。まあ今年は大變に景氣付いて段々空樽も多くな

つた、斯う云ふのである。其空樽の多くなつた時代は如何にも目出度い、世の中の景氣付いた時である。所が其空樽を拵へるのは誰が拵へるか社會の人が拵へるに違ひない、さうすると社會の人がどうしてもお酒を餘計に飲むと云ふことになつて來るのである。さうすると此度の御大典に就ては平生より餘程餘計酒を飲んだ斯う云ふことになる勘定で、それで自分はお酒は飲みませぬから經驗はないが其飲み様になか／＼あらうと思ふ、一升の酒を飲むにも茶碗酒でがぶ飲みにすれば格別の事はないが、こんな所では面白くないなぞと云ふことになつて飲むと餘程お金が掛るものに違ひない、さうすると場所も撰ばなければならぬ、それにはそれに付き添ふお肴も撰ばなければならぬ、又お酌も要ると云ふ勘定になる。さうすると一升到費用と云ふものは實に大きいものである。斯う云ふことに見なければならぬ勘定になつて來る。すると景氣付いてお目出度いと云つて大騒ぎをする時にはどうかと云へば大に費用を遣ふ時である。所で此財源にも限りがあつて大袈裟に遣へば大袈裟に出て來ると云ふ譯ではない、大袈裟に遣へば、必ずそれだけ缺乏するといふことは道理の自然である。すると此景氣付いたと云ふことは何であるか詰り各自の財産を多く消耗したので、其後はどんな事を迎へるかと云ふと、今度は其結果として財産の缺乏と云ふことが起つて來る、缺乏と云ふことが詰り不景氣の原因を成して居る。すると景氣付いて

お目出度いと大騒ぎをするのは宜いが其結果として又悲觀せねばならぬやうな事をお迎へする下拵へをするといふことになつて見れば此處は大に考へなければならぬ事になつて來る。何にせよ御大典は國家の御大典とは申すものゝ、畏れ多い事であるが、今上陛下が御代りに就ての御一代に唯一度の御即位式と云ふお芽出度い儀式を行はせらるゝに就ては吾々國民は擧つて御祝ひ申上げなければならぬ、すると御祝ひ申上げるところの先づ中心點其向ふの目當てとなるものは何であるかと云ふと、言ふまでもなく、畏れ多い事であるが、今上陛下の御身の上にある、御慶事を喜んで吾々は御祝ひ申上げる、斯う云ふことになるのである。唯此の場合、此御祝を申上げるに就て唯だ吾々が空騒ぎをするに云ふことが、果して今上陛下の御歡慮、即ち思召によく適つて居るかどうか此邊の事はよくお互に考へて置かなければならぬ所であらうと思ふ。折角吾々が喜んで御祝を申上げた所で、肝腎の目當てとなさる御方の思召に若し是が適はぬ事であつたならば決して眞の御祝ひにはなりません。然らば如何にして今上陛下の御歡慮に副ひ奉ることが出来るであらうか、それにした所が今上陛下の觀歡慮のある所は、どう云ふ所にあるだらうかと云つて見たところで、吾々が直ちに御伺ひ申す手續も立つて居りませぬ、是はどうして知ることが出来るかと云つたならば、是は勅語に依つて窺ひ知るより他に途は無いだらうと思ふ。

そこで今上陛下が國民に對して仰せられた御勅語と云へば、どんな事であるかと申しますと先づ最初御踐祚式の時に、其翌日でごさいました朝見式と云ふ御儀式を行はせられた、其時に皇族、群臣を御呼び立てになつて御目見えなされた。其時に仰せられた御勅語がある。それから今度の御即位に仰せられた御勅語がある、是が國民に對して仰せられた御勅語であらうと思ふ。此御勅語に依つて御意慮の程と承知する他に途は無い、而して其朝見式の御勅語と今般の御即位式の御勅語とは、どういふ關係があるかと云ふに、私は同じやうな事を仰せられたと思つて居る、概略を摘んで申上げると、朝見式の時の御勅語と申すものは先づ初めに、先帝陛下が崩御せられて悲痛極りなき悲しい事である、けれども天子の位と云ふものは一口も空にして置く譯には行かぬそれが爲めに取り敢えず踐祚式と申して天子の位を御繼ぎなされる式を行はせられる譯である斯う云ふことが初めにあつて、それから次に先帝陛下は四十五年御在位遊ばされ、國家の爲め御盡し下されたる御功勞の趣を御述べになつて居るのである。次に至つてどう云ふ事を仰しやつてあるかと云ふと、御自分の責任をお述べになつて居る、斯く／＼までに先帝陛下は國家の爲めに御盡し下された其後を承継ぐ譯であるからどうか此事に就て遺漏なからんことを期す、間違の無いように責任を完うしたい、斯う云ふ事をお述べになつて、而して其第四番目に至つては

どう云ふ事であるかと云ふと、其次は全く國民全體に對しての御希望を述べてある。勿論其中には二通りになつて居る。役人に對するのと、全體の臣民に對する御言葉と兩方になつて居る様に思はれる。先づ初め役人に對して、有司須く、先帝に竭したる所を以て朕に仕へよ、斯う仰せられてある。有司と云へば總理大臣を始め、政治係りのお役人である、役人たるものは先帝に忠義を盡したる通り相變らず朕にも仕へるとの仰せで、是は御尤もである。次に臣民亦和衷協同して忠誠を致すべし、云々と仰せられた。此臣民と云ふ中には一般が皆んな籠つて居る、私共もあなた方も、男も女も、年寄りも子供も、此中には這入る勘定である。それで此和衷協同と云ふことは大切な事に違ひない、何事でも和合しなければ成立せぬ。それも表面ばかりではいかぬ、心の奥底で和合して事を計るやうにしろ、それには自分最負、手前勝手の根性では仕様がな、だからして和合して忠誠を致すやうにしると仰せられてある、此忠誠と云ふ文字が使つてある、忠誠を致せ、忠誠でなければ和衷協同は出来ぬ、それにちがひない、幾ら和合しやうと思つても片方から手前勝手をしかけたら和合は出来ぬ。だから互に親切を盡し合ふことで、初めて和衷協同の實と云ふものが擧るのである。だから和衷協同するにはどうしても忠誠を致さなければならぬぞと云ふ御希望である。更に御即位式に就て仰せ出された御勅語は、是は皆さん御承知の通りで

ある。是も略ぼ朝見式の時の御勅語と似て居る。初めには先般は唯だ踐祚式を行つて居たが今度は改めて即位式を行ふ、それに就て皆んなに告げると云ふことを先づ初めに御述べになり、それから我日本の國體と云ふものは、神代の昔から今日まで傳つた國體であつて、天子の位と云ふものは實に尊いものである。而して臣民も亦よく今日まで忠義を盡してすつと繼續して來たのが我日本の國體である。故に天子と臣民との間は其義は君臣、主人と家來の義理合であるけれども、若し情の上から云へば親子の關係と同じ事で、之に依つて成立したものが我が日本の國體である斯う云ふことを初めにお述べになり、それから次にやはり先帝陛下の御徳をお述べになり、それから次に御自分の責任をやはりお述べになつて居る。而して終りに至つてやはり吾々臣民に向つての御希望がある。其希望の所ではどう云ふ鹽梅にお述べになつたかと云ふと、「爾臣民忠誠其分を守り勵精其業に従ひ以て皇運を扶翼することを知る庶幾くは心を同くし力を戮せ倍々國威を顯揚せむことを爾臣民其れ克く朕が意を體せよ」斯う云ふ鹽梅に仰せられた。その精神から云ふと前の御勅語と今度の御勅語とは恰も符節を合するが如しと云ふても差支ないと思ふ、勿論御言葉は少し違ひます、今度のはさう申しては畏れ多い事であるが、天子様は御如才がない、少しも小言を仰せられない、爾臣民の皆んなが誠に忠誠にしてよく分を守つてよく働いて國家の爲めに

盡して呉れることは知つて居る。斯う仰しやるのである。實に痛み入つた話です。親切によく働いて仕事をし、さうして國家の爲めに盡し皇運を扶翼することを期する、豫め其事はよく承知して居る、庶幾くは、此上、尙ほ一層皆んなが心を同くして力を戮せて、さうして此國の光を益益明かに立派に顯れるやうに働いて貰はなければならぬと御望みです。すると今までもよく働いて居るが是からはもう一層やつて貰はんければならぬと云ふのが、天皇陛下より吾々に對しての御希望です。而も丁寧な御言葉があつて、「庶幾くは心を同くし力を戮せ倍々國威を顯揚せむことを」と仰しやつてある。天子様の方から「庶幾くは」と云ふ御望みである。普通の御望みではない、皆んなに是非頼むぞ是非やつてくれとの御希望です、然れば吾々國民たるものは此度の御祝を申し上げると云ふことに付けても、此精神を吾々の精神として、天皇陛下の仰せられた通り其御歡慮に副ひ奉るやうに、各々其事業に努めて初めて満足なる奉祝を申し上げたと云ふ事が言へるだらうと思ふ。此兩度の御勅語の中には、別に假裝行列をやれと云ふやうな事も書いてない、又酒樽を多く空けなくちやならぬと云ふ事も書いてない、或は御輿を昇いでわつしよいとやれと云ふやうな事も書いてない、唯其御希望の精神となる所は何處にあるかと云ふと、忠誠其分を守り勵精其業に従ひ以て皇運を扶翼せむことを期すると云ふことが根柢であらうと思つて居る。

勿論脚精と云へば、勵んで各自の仕事をしろと云ふ事である。其自分の業務を勵むにつけても、忠誠其分を守るといふことがどうしても根柢になつて居るであらうと思ふ。例へば自分が業務を勵むにつけても、心を同うし力を戮せるといふことにつけても、其根柢は何處にあるかと云つたならば、忠誠其分を守るといふことが先づ主眼であると云ふて宜からうと思ふ。すると、今上陛下が吾々臣民に對して御希望なされた要點を指して見ると、何處にあるかと云ふと、忠誠其分を守れと云ふ事であるやうに思ふ。

さて忠誠と云ふことですが、是は味うて見れば味うて見る程尊い事である。忠も「まこと」誠も「まこと」である、どちらも「まこと」であるけれども、其意味に於ては餘程違ふ所がありはしないかと思ふ、誠の字の方は、誠實とか、至誠とか云ふやうな熟字になりまして總て嘘言でないことと云ふことである。心に思つた通りを口に言ひ言つた通りを身に行ふ、口と心と違はぬ言つた事と身體の行と違はぬ内外表裏の區別なく一貫して居る。少しも嘘言偽りがないと云ふことが、此誠の字の意味であらうと思ふ、さうして見ると誠と云ふことは大變に範圍の廣い話である、けれども此誠の字の「まこと」は一般に亘る「まこと」であつて、謂はゞ普通の「まこと」である、俗に言つたら普通の誠である。處が、此忠の字の「まこと」は同じ「まこと」であつても是は普通

の「まこと」ではない、餘程是は込み入つた「まこと」になる、謂はゞ精一杯に遣り抜くといふやうな意味が此忠の字には備つて居らうと思ふ。又此忠の字に就ては斯う云ふ考がある、忠の字には偏らぬと云ふ意味がある、偏らぬと云ふことはお互人間としてなかく困難な事である。何故と云ふと、人間は感情の動物と云つて、他の動物よりは智慧も優れて居る意志もある。けれども、どちらかと云へば感情が主である、人間は感情の方が強い、だから幾ら理窟がよくても自分の感情に依つてはどうしても、さう思ふことが出来ぬやうになる。自分で自分の心を支配することが出来ないやうになつて来る。どうも變なもので、感情と云ふ奴が土臺になる。所が此感情と云ふ奴は偏りたがるものである、盲目的の奴であるから憎いと思ふと矢鱈に憎くなる、可愛いとすると又無暗に可愛くなる、嫌と思へば矢鱈に嫌になつてしまふ。即ち偏つてしまふ。目出度いとして泣き出す、詰り人間の生涯の有様は泣いたり笑つたり、まるで赤ん坊と同じ事である、氣に入ればにこ／＼して居るが氣に喰はないと無暗に泣き出す、實際大きい者も小さい者も、其形は皆んな同じ事である。唯だ其中に淺深厚薄の差別があるだけで、大體の形式は皆んな同じやうなものである。どうも吾々の心は心理學の上から云つても智情意の三つが併行して居らぬ、感情の方

がどうしても強くなる、そこで感情を偏らないやうに支配して行くのはどうしたらよいかと云ふと、智力でなければ駄目だ、智力と感情とがうまく調和して、さうして何か憂ひとか芽目度ひと云ふ時にも其中から初めて之を遣り過ぎたならば其結果はどうなるかと將來を考へて、悲觀となるべき下拵へなどをしないやうに用意するのは皆な智力の力である、又悲しい中にも悲しむばかりではいけない、悲みの中に自分を慰め、自分だけで喜んで行くと云ふ工夫をして行かなければならぬ、智力が感情に先つてさうしてうまく支配して行かなければならぬ、さうすると偏らせない所が眞の中道である。佛教の上から云つてもさうである。是は道理の上から云ふて、空即是色色即是空などと云ふ。色と云ふものは形のあるものである、形に表れたものを色と云ふ。空と云ふのは形を造つて居る時の有様である。形の無いものが其儘形のあるものである、形あるものが其儘形の無いものである斯う云ふのである。それでは譯が分らないぢやないかと思はれるが、實際はさうである。例へば水のやうなもの、何で水の形が出来て居るか云ふと、是は水素と酸素が集つて出来て居るのである。之を機械で以て水素と酸素とを引分けると形は無くなつてしまふ又無くなつても之を合せれば又形が出来る妙なものである、お互に人間が生きて居るのは何の爲めであるかと云ふと衣食住の爲めである、併し衣食住だけでは駄目である。衣食住は必要なもの

ではあるがまだ必要なものは形の無い空気と云ふものである。衣食住は一日位は無くても生きて居られるが空気が半時でも無かつたら人間は直ぐに死んでしまふ、蠅などは排氣球の中に入れて空気を脱くと直ぐに死んでしまふ、だから大きな排氣球を拵へて其中に人間を入れて空気を脱いたならば人間も直ぐに死んでしまふ、それは肝心な空気を吸ふことが出来ないから死んでしまふのである、衣食住よりも大事なものは空気である、即ち何も無いと思つて居るものがなか／＼大切なものである、所が、空気でも壓搾器に入れて之をすつと壓搾すると、終ひには液體になつてどろ／＼したのものになる面白いものです、それで酸素などを取る時にしつかり壓搾して口を開けると、炭素は先きに吹き出て了ふ、宜い加減な所に酸素だけが残るのである。そんな鹽梅にして酸素を採るのであります。是は何にも無いやうであるが壓搾すると形の有るものになつて来る、だから物が有ると云ふのは無いのである、無いのが形に現れて居る、何にも無いと思ふものが集めさへすれば形が出来、二つ以上のものを集めると形を成すことになつて来る、自分共のやうなものでもさうである。今生きて居るには相違ないけれども元は無いものである、今斯う云つて居るけれども今に死んで了ふ、焼けば灰になつて了ふ、埋めれば土になつて了ふ、土になれば人間の身體は消滅して了ふ。

引きよせて結へは假りのいほりなり

ほどけはもとの野原なりけり

で、こんな立派な建築が出来て居るが、是は木は木、石は石、と別々にしてしまへは無くなつてしまふのである。それで、空と云へば空一方に偏りたがる、又有ると云へば有る方一方に偏り、肝腎な真理が分らなくなつて了ふ、そこで、空が其儘即ち色である、色が其儘空であると云ふ道理に、よく融通の附いた時が真の中道である。佛教などで云ふ真理と云ふものを説明するには、斯う云ふ鹽梅の説明をして居る。さう云ふ上から云つても吾々の心を偏らせぬやうに徹底させねばならぬ。それで忠の字には自ら偏らせない、所謂不偏と云ふ意味と、もう一つは徹底した意味が含んで居る。偏らぬ、中道を得た心である、だから偏らないで而して徹底しなければならぬ、道理の奥底まで遣り貫かねば承知せぬ、だから此の「まこと」も、うんと遣り貫く所の「まこと」が忠の字の意味になるのである。忠實などと云ふのは物事を遣り貫くと云ふ意味がある。それを遣り貫けないと云ふと途中で挫けたり間違つたりして横道に這入つて了ふ、さう云ふ譯で日本では此の忠の字を殊に君に對する親切を忠と名けて居る、家來たるものが主人に對しての務め方を忠と云つて居る。是は大に意味があるだらうと思ふ。日本の主従關係は其主人に自身の身命を捧

げて了つたものであると云ふ約束をするのである。君臣の關係は勿論でありまして君の御馬前で戦死するなどといふことは非常に名譽な事に思つて居る、是が日本の武士道の根據である、生物の身に取つて何が一番大切であるかと云ふと、自分の身體と命より大事なものはない、其身體も命も自分の主人の爲めには捧げて了つて置くものである。斯う云ふ了簡で親切を盡す。それですから、「まこと」と云ふものが、普通の「まこと」ではない、徹底して何處までも遣り了さねば承知せぬところの「まこと」である。彼の孟子が、「一以て之を貫く、忠恕のみ」と云つて居ります、即ち唯一つを以てすつと何處まで貫くのであると云つて居るのである。さうすると忠の字の「まこと」は何處までも徹底して貫かねば承知せぬ、此忠の字が口を書いて其下に心を書き、さうしてまん中から棒を通じてある所は徹底して何處までも貫かねば承知せぬと云ふ意味である處が親切が通らないと突きぬけない、同じ親切でも平重盛と源義朝とは違ふ、あれは自分の主人即ち天子様と自分の親との間に挾つて苦んだ人である、謂はゞ、あちら立てればこちらが立たぬと云ふ事になつて了つたのである。源義朝は天子様の方を大切として自分の親を殺して了ひました。併しあれでは眞の忠義とは言へないだらうと思ふ。自分の親を殺して了つたなどは、どうしても徹底して居らぬ、之に引換へて重盛の方になると忠孝兩全を得たのである。其間に挾つ

ていろ／＼と工夫をして自分の身を犠牲にしたのである。其結果自分の親に對しても不孝とならず天子様に對しても不忠とならない實に忠孝兩全を得た人である、是が眞の忠孝と名づく所以であらうと思ひます。謂ゆる「まこと」が徹底して居る。だから忠と云ふ「まこと」は徹底した「まこと」でなくちやならぬ。言葉を變へて言へば普通の「まこと」ではない、是は親切な「まこと」である。唯一應の「まこと」ではない、再應、再三、何處までも盡して徹底せねば置かぬと云ふ誠である。道理の奥底まで盡してしまはねば置かぬ、斯う云ふ誠が忠の字の「まこと」になつて居らうと思ふ。

さうして見ると、忠誠と云ふことは、普通には普通の「まこと」を行ひ、而して又一朝事有る時には徹底した「まこと」を行はねばならない、我日本國民たるものは必ず此忠誠を維持せよと云ふことが、今上陛下が吾々に向つての一番大切な御希望になつて居る、而して此忠誠と云ふことは獨り人間の道徳の上のみ必要であるかと云ふと決してさう云ふ譯ではない、茲に至ると私には人道と佛道と云ふもの、關係なども餘程面白い風になつて居る事を感じて居る。或は世間道、出世間道とも言ひますが、同じ忠誠であつても、唯だ現在に得た身體を當てにして生きて居る間の忠誠、人間の交際上に就てだけの忠誠であるならば、是は人道と名けることは出来る。併しな

がら道理と云ふものは、此身體が解散してしまつたら、それでおやめになると云ふものではない過去世未來世を通じて消滅せず活動して居るものが道理の作用である。だから道理の活動と云ふものを信じて見た以上は僅かに吾々が此世に生きて居るだけを目的にして、それだけの間の忠誠を守りさへすれば宜いと云ふのでは是は誠に淺墓な忠誠になつて了ふ。そこで此忠誠を未來世を盡して何處までも忠誠を育て、徹底せねば置かぬ、さうして愈々徹底した所が佛果菩提である。其處まで目的を立て、忠誠を心掛ける場合に佛道と云ふ名前が附くのである。人道と佛道とは違つては居らない、行く道は一本道である。一本道であるけれども、或る程度までの目的は人道である。それを何處までも一つ徹底せねば置かぬと云ふことになれば佛道になつて来る是だけの違ひである。例へば東京から下關の汽車が出る、けれども京都まで、宜い人にはそれが京都道である、下關まで行く人には下關道である、レールに違ひはない同じ所を通つて行くのである。だから京都行の人が目的を變じて下關まで行かうとすれば下關道になつて了ふのである。人道と佛道もそれと同じく道は違はない、どちらにも自分の心が開ければ乗換なしに向ふまで行けるのである。ですから、どうで世に處して行くのならば、徹底した忠誠を以て現在に處して行つたならば實に立派なものが出来るであらうと思ひます。



之に就て私には先年感じた事がある。其は二幅の繪があり、どちらも絹地に立派な極彩色がしてあつた。處が片方は非常に高等に見えるが片方はそれ程に見えない、どう云ふ譯かと思つてよく見ると、片方は絹の裏に箔がべたに置いてある、其上に極彩色を施してある。何となく奥床しい、片方は裏箔がない、だから両方を比べて見ると、一方はどうも表面ばかり立派で、奥光りがない、品位が違ふ。そこで同じ道徳でも此佛果菩提と云ふやうな徹底した忠誠を目的としたならば丁度同じ絹地であるけれども裏箔を置いた絹地のやうなものになりはしまいか、唯だ現在のだけの忠誠であつたならば裏箔も何にも無い、唯だ見える所だけの極彩色を施したやうなもので甚だ淺慕なものになりはしまいか、斯う云ふ鹽梅に考へて見た事があります。それから又斯う云ふやうな事も比較して見た、日本の人には大和魂と云ふものがある、日本に大和魂があれば獨逸の人にも獨逸魂があるに違ひない、支那人には支那魂があるかも知れぬ、それは互格であるかも知れぬ。支那の歴史などで見ると誰が立派な人間であるかと云ふと諸葛孔明である、偉い人間である、日本の楠正成、支那の孔明なりと云ふのは誰でも言ふ事である。處で孔明と楠、成程楠は日本の一番男である。孔明は支那の一番男である。之を比較して見ると、どちらも餘り運の好い人では無い、一生涯縁の下の方持で糞骨を折つた人である。處がそれが價值がある。やうする

とわつしよい／＼と騒ぐのには價值はない、何でも縁の下の方持で糞骨を折つた所に價值がある處で、孔明の書いた文章で有名なものは出師表である、あの出師表を讀んで涙を流さざるものは人に非すと云つて批評した者がある。だつて出ないものは仕方がないが、まあさう言はれる程の文章である。うまく書いてあると云つて、理窟や形容詞だけがうまいのではない其精神に善い所がある。さうして其出師表の結論に何とあるかと云ふと、「鞠躬盡瘁死而後已」と書いてある、あそこが非常に價值のある所である。時の成敗は仕方がない時の運命は仕方がないけれども、命限りの力を盡して死ぬるまではやる、死んだら仕方がないそれで御免を蒙るでお終ひになつて居る。それで以て涙をこぼすだけの價值がある。處が楠正成が死ぬる時にはどんな事をやつて死んだかと云ふと、あれは名高い話で、弟の正季と湊川で刺違へて死んだのであるが、其時に正成が正季に向つて死んでどうしやうかと云つたら、弟の正季が、「死んでも打つちやつては置かせぬ、」  
 「それではどうする」「七度びまでは此世に生れ殘つて來て、何處までも遣り貫く積りである」と云つたので、正成は實に我心を得たりと云つて、互に刺し合つて死んでしまつたのである。さうすると、楠の忠義は鞠躬盡瘁死して而して後に已むのではない、死んでも已まぬのである、死んでも止められるものか、七度びまでは生れ變つて來て、遣り通さねば置かぬ是が楠の信仰であ

る。此楠の信仰は何に依つて得た信仰であるか佛教に依つて得た信仰である。未來にかけての信仰は佛教の信仰である。孔明は實に支那の一番男であるけれども此楠と孔明との忠義を比べて見ると孔明の忠義は成程忠義には違ひないが、僅かに現在の一生の忠義である。之に引換へて楠の忠義は七代まではやると云ふ忠義である。さうすると孔明の忠義は如何に偉くとも楠に比べて七分の一の違ひがある。楠の忠義は孔明に比べて見ると七層倍の忠義になつて居る勘定である。此處か謂ゆる出世間道の尊い所である。世間道を勤むる人が其心に感じて而して後に初めて忠誠を行ふことが出来るといふことになるのであります。然るに今上陛下は吾々國民に向つて、第一の御希望として御望みになるものは何であるかと云ふと、此忠誠であるのでありますから御同様に成るたけ立派な忠誠を拵へて、さうして形式の上は兎に角、此眞の忠誠の上より御祝ひ申上げて、初めてお互が國民の本分を盡したと言ひ得やうと私は信じたので、今日斯様なお話を致した次第である。

### 慈悲と殺生

今日は慈悲と殺生と云ふ標題にて前回述べました十善十悪の内容の一端を研究して見たいと思ふ。

一體人間の仕事は身口意の三つの外はない、或は十善となり或は十悪となる、則ち身に三つ、口に四つ、心に三つの此の十である、十悪の上には不の字をおけば十善の反對の十善である、即ち殺生の上には不殺生、偷盜の上には不偷盜である、殺生が十善の最大たるもので、その大なる殺生を禁ずるのは誰しも諒知する處であるが絶対に殺生を禁ずることは又不可能のことである、人間が生存するには何物か他の生物を犠牲となして生命を繼續するのである、則ち他の生物の生を奪ふのである、生物を取らずには人間は到底死を免かれない、即ち世の中に殺生を全く禁ずることとは出来ぬ、併し一部の殺生を許せば殺生戒の教へは不徹底である、そこで不殺生が十善の一である其精神に避りて考へねばならぬ、何事でも精神と形式とがある、兎角形式は固定し易いかたよつて融通がきかぬ、此の形式が往々弊害の生ずる所となる、故に何事に付ても其精神のある處を根本として考へなければ十善十悪の眞意も明に了解することが出来ぬ、即ち慈悲は十善の精神で、それから殺生を禁ずると云ふ方は是は形に現はした方になつて居る、で、お互に人間は感情動物と云ふ位で感情の強いものであるから、私情と同情、私情の上から推せば自分の都合さ

へ好ければどうでも宜い殺生などは何でもない、當り前のことになる、ところが若し茲に智力の發達せる聖人の眼から之を見ると云ふとどうも捨て、は置けぬ、向ふの情を推察して見ると思ひ當る、是に於てどうしても同情と云ふものが起らずに居られぬ、それで殺生と云ふことは何だと云ふと何と云つても其形は私情を實行するものに過ぎない、此世に生れると自分の生命を繼續させるると云ふ生命欲の無い者はない、然るに自分の生命欲の爲に他の生命を輕んずる其行爲は私情の缺點なるものである、此上から第一に殺生と云ふことが宜くないことだから殺生をするなと御戒めになつた、それで其殺生と云ふに付ていろ／＼分類がある、大體に於て大殺生或は小殺生斯う云ふやうな區別になつて居る、若し絶對にならぬものならば區別が要らぬ、ところが之が聖人に於て戒めたものであるから其場合に依つては大に情狀を酌量しなければならぬ、だから其中に區別を立てる、先づ第一に大殺生と小殺生で、小殺生はどう云ふものだ、小さい蟲でも殺すのかと云ふとそんな譯でない、詰り言ふと小殺生と云ふものは異類と申して類の違つたものを殺す、此部類を總て小殺生と名ける、人間が魚を殺す鳥を殺す獸類を殺すと云ふ類之を小殺生と名けてある、此小殺生と云ふのは詰り大體に於て罪が輕いと云ふことになる、大殺生はどう云ふ類を言ふか同類を殺す譯である、人間が人間を殺すと云ふ類赤ん坊を殺しても人間が人間を殺した

のである、同じ殺生の中に於ても段々輕重の區別が立つて居る、自分に恩のある者を殺すと云ふことになる、と逆罪と云ふ名が附いて居る、同じ大殺生の中に於ても精神から言ふのであるから或る場合に於ては殺しても罪にならないやうなことも又説明がしてある、詰り精神の上から言ふ話である、其故必ずしも物の命數を取るばかりが悪いと云ふのではない、詰り精神内に慈悲と云ふものを失ふそれが悪い、だからして其の慈悲と云ふものゝために據るなく殺さなければならぬ場合がある、さう云ふ殺生であればそれは決して罪にならぬ却て功德になるべきものであると云ふやうな鹽梅に言はれて居る、だから同じ殺生と云つても佛の精神から言ふと其生物には互に情と云ふものがあつてそれが他を思ひやる、其思ひやると云ふのはどうか智力の加つた場合、智力が加らぬければ此感情と云ふものは盲目的のものである、悪いと云へば無性に悪い、可愛いと云へば無性に可愛い之が人の情である、ところがそれが智力の加つて來て我身をつねつて人の痛さを知れと云ふのは是は智力を以て向ふの情を酌むことになる、之に同情と云ふことになる、強ひて名を命けたならば同情の反對は偏情である、同情と云ふときには智力を以て智力を觀察して其上から自他平等の見込を立て、さうして其情を働かせると慈悲と云ふことになつて來る、さうすると此殺生と云ふことも單に盲目的の私情にしてやればそれが罪惡である、若しも同情の上からや

ることであるならばそれは罪惡でない却て功德になる、そこで人間が人間を殺す況んや自分の近親の者を殺すと云ふことはどうも情に於て堪へられぬ筈のもの、其堪へられぬ筈のものを盲目的に驅られてやつて了ふからは非常の大罪である、ところで此思ひ遣りから来るのであるから其思ひ遣りがどんなものかと云へば詰り段々程度がある、私は常に之を此自分の慈悲即ち博愛と名ける、其博愛の程度と云ふものがどうして知れるかそれは思ひ遣りと云ふことで分つて行く、自分の同情がどの位伸びたかと云ふと詰り言へば先づ自分の周圍に於てあなたの方に自分の親ならば親を思ひ遣ると云へば親の所迄其同情が擴まつて行く、更に又妻子を思ひ遣ると妻子の所まで伸びる、今度親類縁者其他朋友を思ひ遣る、其處迄伸びる、遂に社會を思ひ遣る、國家を思ひ遣ると云ふ鹽梅になつて大變廣くなつて来る、ところが何にしる吾々のやうなものは其元の惡習慣が強いし私欲の惡習慣が強い、だから動もすると其境遇に依つて直ぐに持前の私欲が頭を擧げて来る、さうすると折角伸びて行つた同情が縮つて了ふことがある、ところが自分と何か利害の關係が起つて来て、いやそれは宜いが、さうすると此方の方に大變なことが出来て来る、さうすると折角伸びた同情が縮つて了ふ、おかしいもので其處が修養の必要なる所以である、それがために私欲を制してさうして慈悲同情の心を養成して行かなければならぬと云ふのが詰り殺生戒の精

神になつて居る、だから同じ殺生の上にも段々程度がある成べく堪へられぬやうなことをするなそれから又吾々が生きて居るに付ては三度の食事が要る、此食事と云ふことがどんなものだ之が生存競争だ、成程私共のやうに肉類を食はぬとか何とか云へばそれで殺生罪は免かれたやうに言ひますが決してさうはいかない、併ながら絶対に殺生を止めると云ふ譯にいかぬ、それは何せと云ふと今日の所で世間の生物学や何かで言つても彼の有情動物、有情動物は吾々のやうな感情を持つた者、それから非情靜物或は植物類、あの有情と非情と同じ生物でも其境界を一つ極めると云ふやうなことになる、と非常にむづかしい、それで境界は定められぬことになる、さうすると此世に總て成立つて居る程の生物であるならば動物だつて植物だつて何等の區別がない、さうすると縦令肉を食はぬとしたところで何等かの肉を食つて居る、有情の肉を食はぬと云ふだけで、詰り言へば大根を殺す、牛旁を殺す、米を殺す、豆を殺す、殺生をやつて居る、さう言つた日には吾々が肉を食はぬから殺生に關係が無いと云ふことは言へるかといふに言へない、是はどうしてもお互が此世に生存する間は何等か他の生物を食つて自分の體を造つて生命を續けて行くこと云ふのが今日お互生存の有様である、それで佛が同情と云ふことが一番大切であるから其成だけ失はぬやうにして生活しなければならぬ、それには何方にしても此世に生命を續ける上から

には何等か他の生物を犠牲にしなければならぬ、成べく縁の遠いものを取つてさうして食物にする外はない、それで動物が動物を食ふたと云ふのは是は情に堪へられぬことである、同じ生物であつても動物は他の生物を取つて之を犠牲にするが宜い、さうすれば同情を損はぬで済むやうになる、又植物と動物との關係を考へて見ると是は交換生活とも云ふべき有様である、それはなせと云ふと彼の植物は吾々の生活した其残りの滓を取つて食物にして居る、彼等は生存を遂げたあとは後繼者の爲に造られた卵だから生存しやうと云ふだけのこととはそれで仕遂げたもので其結果である、言はゞ餘りものになつて居る、餘りものをお互は取つて食物にして居る此方の餘りものを又向ふへ廻してやる、誠に面白い、彼等は多く根から物を吸収してさうして物を拵へる、人間の方はどうかと云ふと上の口から吸収して下に出す、彼等は下から取つて上を拵へる此方は上から取つて下を拵へる、互に交換生活であるから面白いことだと私は思ふ、何方にしてもお互が此世に生存するには何等かを犠牲にしなければならぬ、絶対に殺生と云ふことはしないことと云ふことは到底出来ることになる、唯々佛の精神としては慈悲同情の心を失はぬやうにせいと云ふことが目的になつて居る、だから成たけ自分に縁の遠いものを取つてさうしてそれを疎略に取扱はぬで食ふより外に途がないと云ふ所から御定めになつたものである、而して又動物が動物を殺

すと云ふやうな場合でもさう云ふ所に至ると云ふと佛は又丁寧親切に其邊の意味を御教へになつて居る、御經の中に殺生と云ふ罪かどう云ふ所に成立するかと云ふことに付て言つてある、因縁、法、業、殺生をするに付て此四つが揃はねば殺したと云ふことにならぬ、それで此殺因と云ふのはどうかと言へば自分の心、彼奴を殺してやらうと云ふ精神が起る、それが殺の因、それから縁、向ふの相手、相手がなければ殺せぬ、法は其相手が出来たところで殺すには何等か方法がなければならぬ、撲殺すとか毒殺すとか蹴殺すとか、何とか方法がなければならぬ、其を殺の法と名ける、さうして愈々殺し遂げて了つた、それが業と云ふもので全く成立した所だと斯う云ふ風に言つてある、それで其前の方は方便罪、之が根本罪と云ふことになる、全く報ひを受けるだけの仕業が成立つ今日の言葉で言へば是は未遂犯と云ふものである、此四つが揃はなければ罪と云ふものが成立せつた所の業は之が既遂犯で、是だけの違ひである、此四つが揃はなければ罪と云ふものが成立せぬ、だから縦令向ふの者を殺しても殺す因を缺いて居つたり、殺さうと云ふ心がなかつたならば罪が圓滿に成立せぬ、其から又相手がなければ殺しやうがない、それから刺殺すにせよ撲殺すにせよ何等かの方法がなければならぬ、殺したにしたところが殺す心がなかつたと云ふことになると斯う云ふものは全くの精神の上から云ふと正當に罪が成立つて居らぬ、縦令殺さぬまでも殺す

と云ふ心が非常に強くていろ／＼の工夫をしたと云ふことになる。矢張精神の上から罪が成立たぬけれども未遂犯の罪は成立つて居る、だから何れにしても此罪と云ふものは殺さうと云ふ心と殺すべき動機、それから仕業、それから愈々生命を絶つてしまふと云ふことが揃ふと罪惡が成立して来る、之が揃つた上の殺生罪、之が實に恐るべき結果を生ずる、即ち殺生の三果と稱へるものである、三果と云ふのは何だと云ふと異熟果、等流果、増上果である、それで異熟と云ふのは變つて成立つ、だから人間であつたものが畜生になつたり或は餓鬼道に落ちたりする、さう云ふ場合を異熟果と稱へる、と云ふと何だか捉へ所がないやうな氣持がしますが考へて見ると分る、例へば世の中には立派な紳士である其人が何か横着なことをした、捕へて監獄に遣る、さうすると忽ちに羽織袴の姿が今度赤い襦袢を着て腰へ鎖を着けて追廻はされる、まるで違つたものでは等は異熟果と云ふものだ、是に由つて之を觀れば何も不思議がない、それで華嚴經に言ふには先づ殺生の罪が満足に成立すると取敢へず地獄、それから地獄の報ひが終へて餓鬼道に落ちて長い間難儀をしてそれが濟むと畜生道に落ちて非常な難儀をする、それが異熟果と云ふものである、そこで其罪が稍々薄らいで輕くなつたゝめに又再び人間に生れ戻ることがある、人間に生れ戻つたところで元の罪惡はそれでびつたり消へてしまつて晴天白日と奇麗になつてしまはぬ、何等か

跡を追ふて来る、どんなものが追ふて来るかと云ふと殺生の言はり附加刑とも云ふべきものが跡を追ふて来る、それは何だ、一には病身である、二には短命、斯う云ふ二つの報ひが跡を追ふて来る、之を等流果と名ける、それから増上果、是は異熟果の上にも等流果の上にも兩方に通ずるもので、さう云ふ罪惡を犯すと自分の周圍が皆な其々に禍を受ける、詰り影響を興える、現代に在つて自分が悪いことをするとそれがために親があれば親を泣かせる、妻子があれば妻子に迷惑を掛ける、親類縁者朋友に至るまで皆に迷惑を掛ける、是は増上果と云ふものに屬する、自分の罪惡の爲に其罪惡の勢力が四方に及ぼして其禍を影響させる、それから此世に生れて出ても多病の爲に周圍の者に迷惑を掛ける、短命ならば短命の爲に周圍の者に迷惑を掛ける、其周圍の者に迷惑を掛け影響を及ぼす所を増上果と名ける、それで此殺生の罪が満足に成立する、斯う云ふ執拗い禍を受けなければならぬ、恐るべきものであるからして此殺生と云ふことは成べく慎まなければならぬことである、斯う云ふ鹽梅に教へられて居る、併し今世間の人はそんなことはないと言ふだらうが、決してさうでない、實際宇宙の道理は誠に奇妙不思議なものである、一々事實の上にそれが證明して来る、何事でもさう云ふことになつて居る、淨土宗の祖師で法然上人、あの人の父親を漆時國と言ひますが詰り法然上人の發心の因縁になる、此漆時國と云ふ人

は元と仁明天皇と云ふ天子様から段々後胤になつて非常に家柄が好いと云ふので其土地でも非常に尊敬されて居る人であつた、ところが其時に定明と云ふ人があつて此人が美作國の預かり所、謂はゞ代官のやうなものでせう、今日で言つたならば郡長とか縣知事になりませう、其土地を支配する役人である、其人が赴任して美作國へ往つたところが時國がなか／＼勢望があつて定明の政治がどうも行はれない、それで定明が非常に憎んだ、又時國も自分の家柄と云ふことに誇つて定明に對して禮儀を行はなかつた、それから非常に衝突が起つて遂に定明が時國の所へ夜討に斬込んで暗殺しやうとして仕損じた、がそれがために時國は深傷を負ふて翌日になつて時國は死亡しました、其死亡する時に九歳になる男の子があつた勢至丸、之が後に法然上人になる人で、それを枕元へ呼んでさうして遺言をした、其遺言がどう云ふことかと云ふと、今拙者は定明の爲に斯う云ふ深傷を負はせられた、遂にそれがために今は死なねばならぬことになつた、先づ通例ならば此仇は忘れてはならぬと遺言をするのが當り前である、併ながら熟々考へて見るのには是も何等かの前世の業である、是は時國が自分を反省したもので、是れ皆な宿業である、向ふが悪いばかりでない俺も悪かつた、若しもお前が後に親の敵だと言つて彼に報ひたであるならば彼の子孫が又そなたに仇を報ひるであらう、さうすると仇に仇を重ねて何處迄行つても際限のないことに

なる、だによつてお前は俺の敵を取るに及ばぬ、どうか俺の亡くなつた後は良い出家になつて我が菩提を弔ひ且又多くの衆生をも濟度したならば之に増した功德はない、と云ふことを遺言して亡くなられた、其結果遂に法然上人と云ふことになることが出来た。實に面白い、此定明と云ふ者は時國を殺してそれが露顯しては大變だと云ふので其土地にも居られぬで出奔して了つたが是も亦山奥に獨居の後に大に又悔悟する所があつた、遂には後に法然上人の教を受けて往生を遂げたと云ふことが傳聞録といふ書物に書いてある、兎に角時國が自分の家柄に誇つて傲慢な態度を執つたと云ふことゝそれから後に諦めをつけて自分の子を戒めて遺言をしたと云ふことゝ其反響が面白い、初め傲慢の心を起したゝめにそんな結果を招いたのである、人の爲に恨を買ふて殺されるやうな目に遭つた後には大に悟つて、是は何處迄も際限のないことで、仇を報ゆるに及ばぬお前が出家になつて俺の菩提を弔ひ衆生濟度に心掛けよ、斯う云ふ遺言をした、其結果がどうであるかと云ふと、其敵となつた定明まで歸依させてさうして之を濟度することが出来た、それのみならず今日に此淨土宗と云ふ宗旨が行はれて社會一般の者がどれだけの利益を受けて居るかと思へば際限がない、是を以て考へて見ると云ふと今華嚴經に言ふとふろは實に尤な話でさうなければならぬ筈である。近い所で言ふと、あの徳川家康公と織田信長公との性格が大變違つたこ

とが著しく現はれたことが何だと云ふと、甲州の武田勝頼を滅した時である、武田勝頼を天目山に押寄せて織田徳川の軍勢を以て撃滅して了つたので、勝頼は天目山で自殺した、其首が織田徳川の陣所へ廻はされて大將の實驗に供へると云ふことになつた、信長公は總大將のことであるから信長公の前へ先づ持つて行つた時信長はどう云ふ態度を執つたかといふと、非常な悪口をした、貴様の親父は今迄傲慢なことをした、俺にどの位不自由を興えたか分らない、而も貴様の親父は都へ上つて天下に號令しやうと云ふことを目論んだ、然るに貴様の今の態は何だ、貴様の首を京都へ廻して獄門に梟してやると云ふことを言つた、更に其首を徳川の陣所家康公の前に實驗に供へる、家康公は勝頼の首が來たと云ふので自ら禮を爲し首を三寶に載せて之を上段に供へて恭しく禮を爲し誠に御氣の毒なことである、若し老臣達の諫めを用ゐたであつたならば今日此境遇に至らなかつたことであらうのに誠に遺憾なことである、定めし口惜しいことであらうと言つて非常に同情の涙を以て首に對して禮儀を述べた、それから實檢の濟んだ後には首は信長公のものであるから向ふへ御返しするより仕方がない、併し其體が何處かにあるだらうと云ふので其體を捜してそれを丁寧に葬つてさうして寺迄も建て、後々の供養も致させるやうにしたと云ふことがあつた、是等考へて見ると信長公の京都本能寺で殺された其年だ、あ

れ程の豪傑あれ程の勝誇つた人が忽ちにして明智光秀の謀反に依つて死んだ、それに引返へて徳川家康公は天下を取り而も三百年の泰平を開くことになつた、是が慈悲同情の心のある所だ、唯自分の私情に驅られて勝手なことをすると云ふ其因つて分れるところのけじめで、實に明かなるものである。唯文字上の教訓でない、全く道理の上にさうなければならぬ、と云ふことを先覺者がちやんと御認めに相成つて其上からは御教戒になつたものである、實に恐れ慎まなければならぬ、先づ佛が此殺生罪の恐るべきことを吾々に教へてさうして御戒めになつたと云ふことは概略斯う云ふことになつて居る、それならば總て生物を殺すのは何處迄も唯々悪いとのみ仰しやつたかといふにさうでない、事に依ると殺生をしても却て功德になると云ふやうなことを言つてある。因果經と云ふ御經の中に書いてある斯う云ふ又一つの事實がある、或る菩薩が非常に同情の深い人であつたが其朋友の中に一人非常に悪い者があつて悪事を働く、それで菩薩が非常に悲んで何とかして改心をさせたいと思ひ、意見をすればする程意固地になつてどうしても止めぬ、それで菩薩は熟々其手段に困じた、彼の悪事を一つ止めんとするにはどうしても彼の生命を絶つて遣るより外に途はない、實に困つたものだが、一日生かして置けば一日だけ僻みが入つて來るそれも唯自分が僻みの這入ると云ふだけならばまだ宜いが、それがために社會がどの位迷惑する



か知れぬ、又周囲の者がどれ位難儀をするか分らぬ、併し彼の生命を絶てば自分は大殺生の罪を犯したのであるから御經に教へられた通りに見れば自分は未來は三惡道に落ちて長く苦みを受けないければならぬ、縦令自分の身は三惡道に落ち長く苦難を受けやうとも今朋友が心得達の禍に陥つて居るのを其儘に見て居られぬ、是は寧ろ自分の身を犠牲にしても彼を救ふより外に途はないと云ふので遂に彼を殺してしまつた。けれども佛の教に反いて大殺生をしたのであるから自分の心に濟まぬので其事を佛に訴へた、斯様な事情に依つて據るなく大殺生の罪を犯しましてございませう、是は如何にしたら宜しうござらうか、斯う言つて伺ふた、すると佛の仰せにはいやさう云ふ道理で殺生をしたのであるならばそれは却て功德になる之を利益殺生と名ける、社會を利益する殺生で決して罪惡でない恐るゝに及ばぬと云ふ御教訓であつた、さうして見ると云ふと佛が殺生を戒めたこととは唯殺してならぬと云ふのでない縦令同類の人間を殺してもそれがために社會の爲に利益をさせることがあつたならばそれは却て功德である、之を以て見ると今日政治を取扱ふ者や何かもどうしても人を殺さなければならぬ、或は戦争に依つて人を殺さなければならぬ、併ながらお互は此間に處して行かなければならぬのでありますから餘程考へて置かなければならぬ、要するに佛が此殺生を戒めたこととは其慈悲同情の心を失はぬと云ふことが

大事である、其殺生と云ふ行爲が全く慈悲同情を失つた行爲であるから御戒めに相成つたのである、同じ殺生でも必ずしも悪いとはきまらぬ、其證據を言へば漁夫とか獵夫或は養蠶家と云ふやうなものになつたならばどうしても殺生しなければならぬことになつて居る。同じ殺せばとても其間に慈悲同情の心を失はないやうにして行けば宜い、之に付て思ひ起すが、山口縣の長州に大日比と云ふ所がある、此處が島になつて居つて其處に西圓寺と云ふ寺がある、其寺には百五十年程前から三代程續いてえらい高德に住んだ寺である、一番最初は法岸上人と云ふ人、其次が法住上人と云ふ人、是は學者である、其次が法道上人、是は亡くなつたのは今から四五十年前、三代續いた、其土地が其三代の間で非常に徳化したものと見えて大に教法の盛んに行はれる念佛をよく申す所である、島であるから皆な漁業家ばかり、其漁業家が網を打ちながら釣をしながら皆な念佛を申す、面白い所だ、それから鯨が大變獲れるので捕鯨會社と云ふ會社がある、ところが面白いことは其鯨を獲るために毎年夏の頃で捕鯨會社が先に立つて大層な大法要が勤まる、非常に面白い、其土地の人が殺生しながら佛道修業をして居る、それが昔長州毛利家が御支配なされた時分から決して其土地から罪人と云ふものが出來たことがないと云ふ位な土地である、從て朝鮮の方へ移住して居る人が皆な信者である、是を以て見ると云ふと殺生と云ふことは此慈悲同情

の心を養成して生活をするに云ふこと、は全く別物になつて、何も佛が殺生を戒めたのが殺生の形式其ものに拘泥した譯では決してない、是は精神的に慈悲同情の心を養成せんがための手段として之を御戒め下されたものである、さうして見れば今日御互が自分の身の爲に社會の爲に此精神の修養を行ふと云ふときにはどうしても自分の私利私慾を抑へてさうして反對なるところの慈悲同情の心を養成するより外に途はない、然るに其慈悲同情の心を養成せんとする場合に於てどう云ふ方法を執つたならば一番効能があるかと云ふと矢張佛の大慈を思ふて其大慈に御絶り申して自分の私利私慾の起る都度に能く反省して行けば心の根底から私利私慾の心が失せて了ふ、さうすれば何をしても皆な其親切の心が失せず、總ての仕事をして行くことが出来るやうに相成ります。人間の道徳と云ふことも期せずして自然に行はれて行く、是に至つて始めて私は徹底した道徳を行ふことが出来るだらうと思ひます、道徳といふことも形式に拘泥すると肝腎の精神を失つて了ふ、冀くは餘り形式に拘泥せず、精神的に、道徳の根柢は何處に在るか、と云へば其私慾を制して親切を養成すると云ふ外に途はあるまいと考へる。

### 守分と偷盜

前回に續いて殺生の事をお話する。殺生の反對は慈悲であるから、慈悲と殺生と云ふことの御話を致しましたから今日は此十惡法の第二に於ては偷盜を反對にすれば不偷盜である、此偷盜の裏を言つて見ると分を守ると云ふことにならうと思ふ。勿論それをすつと進んで行きますと終ひには無我の悟りまで至れる道理になつて居る。兎に角分を守ると云ふこと、偷盜と云ふことの關係を一つ御話しやうと思ひます。

一體此偷盜と云ふことは餘り甚だしい文字で、皆此名と云ふものは其部類の中の最も重なるものを取つて名とするに云ふことは、何の部類でも極つて居るのである、それでまあ偷盜と云ふ大きな名を付けたのである。其實言ひますればちよつとしたことでも、猫とか、横着とか言はるゝ程のことは皆此偷盜の部類である、斯う見なければならぬ、一體偷盜と言ふことは私慾の上から起つて来るもので、横領などと云ふやうなことも、皆な此泥棒の性質である、之には矢張り積極とか消極とでも言ひますか、與えざるを取る、是が先づ總て偷盜の部類です、又與ふべきもの

を興えぬ、最も偷盜の仲間に入らる、そうすると吝嗇と貪慾はそれが形に現はれて偷盜と云ふことになつて来る斯う云ふ譯なのである。

それで興えざるものを取るのには總て悪いと云ふことになる、此世の中に於て未だ人間の所有が定まらぬからあるものは誰しも知らずにそれを取る場合がある。さうすると新發明と言つたやうなことは總て偷盜の仲間に入らるかと言ふ議論が起る譯であるが、それは差支のないことにならうと思ふ、茲に於て此道理を明にする爲には此天有と人有と云ふことを明にしたら宜らうと思ふ。此宇宙の森羅萬象總ての現象、形に現はれたほどのものは皆道理の作用に依つて現はれて居るものである、果して宇宙の森羅萬象は悉く天然の道理の作用に依つて現はれたものならば森羅萬象悉く天有である、而してそれは吾々の取ることと言はゞ許されてある、然るに其中には未だ發見せざるものがどれだけあるか分らぬことである、謂はゞ天有にして未だ人有に歸せざるものがある、それで人有に歸せざるものであるならば皆總て道理の作用に依つて成り立つて居るものであるから自由勝手に使用して差支のないものである。

其天有を開發して取ると云ふことには決して差支ないが一度人有に歸したる後はさうはいかぬすると人間の所有と云ふことは全體どう云ふ意味のものかと言つたならば言ふまでもなく先取權

でそれが人間の所有權である、例へば電車に乗つても自分が先に腰を掛ければ先づ其處を占領したので、天有を人有にしたのである、共有に興えられて居るものを自分が先に取つたのであるから他より侵される氣遣はない、それを強ひて侵さうとすれば人有を侵したのである。是は泥棒の中に這入つて来る、斯う云ふ譯になつて來ます。すると世界の森羅萬象天有にあらざるものはない、其中に於て人有——人間の所有に歸したものも歸せざるものがある、而して其人間の所有に歸すると云ふことはどう云ふことであるかと云ふと詰り先取權である、それを賣買すると云ふことは先取權を賣買するのである、斯う云ふことになつて參る。

だから未だ他の先取權に歸せざるものであるならば幾ら取つても差支ない、勉強して取る分には差支ない話である、勿論其中には共有と言つたやうなものも澤山ある、其共有には國有もあれば町有もある、市の所有もある、或は會社の共有と言つたやうな類ひもある、それは多くあるに相違ない、併し其中で誰が使つても差支ないと言つたやうなものとは限らぬ、世界的のものには誰が取つても差支ない、それはどんなものであるかと言つたならば、詰り山間の明月とか江上の清風とかさう云ふものは幾ら誰が取つても差支ない話である、詰り個人の所有に屬したものを侵すと云ふことは、細かく言へば際限のない話であるが、法律や何かの上で刑法などの上に其

範圍を明かにしてあるのを見ると色々なものがある。それは大きな所で窃盗強盗、それから又遺失物を拾つて勝手に自分のものにする、或は又埋藏物、掘出し物を自分勝手に自分のものにする、或は又詐偽取財であるとか、賄賂を取つたりするとか、或は贓物師、泥棒の物を買ひ取つたり、或は又家資分散に關する罪惡なんと云ふやうな項目を挙げまして、泥棒の罪となるべき範圍は略略定つて居るやうである、併ながら道徳上から言ふ日には唯そんなものには限らぬのである。すつと廣く言へば明了論の中に斯う云ふことが言つてある、此中に泥棒するのに六大を盗む、六塵を盗む、六根を盗むと云ふことがある、六大とは何だと云ふと、地、水、火、風、空、識である、六塵と云ふのは、是は六境と云ふ方が宜いのだか、塵と云ふのは汚す心を汚すと云ふ意味から塵と名を付けたと云ふのである、明了論では六塵と云つて居る、六塵とは何であるかと云ふと、色、聲、香、味、觸、法、斯ふ云ふものである。六根とは眼、耳、鼻、舌、身、意である。斯う云ふものを泥棒するといふのは譯の分らぬ事である。随分細かい話である。

それで六大といふと地水火風空識であるが、此水泥棒などといふと農業者などには早の時分などに能く此水泥棒があるが是等は大きなものが知れませぬ、それから火泥棒、泥棒と言ふのはおかしいが寒い時分には同じ爐を圍んで、まあ君、ちつとそつちへ寄れと人のあたつて居る先取權

を奪つてあたることをしたなら火泥棒になる、風泥棒、先づ寒い時分には風泥棒はないが、暑い時分であつて人が涼風を向へて居ると、君、そつちへ寄れと自分が人の風上に立つと云ふのは或は風泥棒になる、或は虚空泥棒、空間を盗む、どんなのが空間を盗むことになるかと云ふと人の眺望を妨げるといふことが虚空泥棒になりはせぬかと思ふ。それから識、是は知識である。それから舌の泥棒、色泥棒、意の泥棒、皆結果に於ては同じことになつて了ふ、此色、聲、香、味、觸、法と、眼、耳、鼻、舌、身、意と向合ひます、眼の相手になるものが色、耳の相手が聲、鼻の相手が香、舌の相手が味、身體の相手が觸、意の相手が法である。此意は意識と言ひまして尻の三つは結果は同じになる、意識と法とは離れませぬ、相手にするとせらるゝものとの違ひである、詰り言ふと人の發明を盗んで、自分が考へ出したことでないことを自分が發明したやうにする廣く言ふとさういふやうなことになるのである、例へば聲などにした所がさうである、大きな聲を自分が精一杯の力を出せば分るのをそれを態と小さな聲で言つたり何かする、それは矢張り聲を盗んだと云ふことになる、能く人が立ち聞きしたと云ふ、是は與へざるを奪つた方になる、さう云ふやうな類ひで何の上にも是はあることになつて居る、それから觸と云ふて當り觸るといふことで、色々なものに猥りに觸れたりするのは詰り此觸を盗んだといふことになるかも知れぬ

それが又自分の身體の方に付ては人の眼を盗む。又自分の方でやるべきことをやらぬ場合もある。せう、眼を盗んだといふことは随分ある話であります、影ひなたのあるなどは皆能く眼を盗むといふことである。それから耳を盗む、或は鼻を盗む、舌を盗む、かういふ按排に盗むか知らんが能く調べたら、其與へざるを取る場合と、又せむければならむ場合とがある、それは微細に調べて見れば必ず其中から出て來ることである。

それから身を盗む、是は随分ある、骨折りを盗む、やらねばならぬことをやらぬで人にやらせるやうなことがある、詰り懶け者なんといふものは皆此身體を盗むといつた方の質になる。斯ういふやうな細かいことまでも明了論と云ふ書物に諄々と論じられてある。斯ういふと此偷盜の範圍、泥棒の範圍といふものは随分廣い話になつて來るのである。華嚴經に其結果が擧げて説明してある。それはどんなことになるかと云ふと詰り十惡法の上に悉く其結果のあることをしつと示してある。それは先月も申しましたが、異熟果、等流果、増上果、三つの結果が成立する、此異熟果といふのは現在の形と變つたものに變化して、例へば今までは善良な者であつたものが今度はそれが誠に悪いといふ形に變化して來る、さういふ類ひが異熟果といふ、現在に酷い悪いことをして未來に地獄に落ちなければならぬ。餓鬼道に、畜生道に行つて苦まなければならぬな

んといふのが此異熟果といふ、それから又等流果と云ふのは後へ災がいつ迄も付いて來る、それが等流果といふ先づ初にさういふ、荒つばい異熟果を受けた後に其罪惡が稍々薄らいで來てそれで又元の人間に生れ戻る、生れ戻つた所で又災が尻から付いて來る、此偷盜の方の罪であるといふと、どんなものが付いて來るかといふ一つには貧窮貧乏といふのが其結果である、それから其次が此其財自由を得ずと言つて縱令自分の身に具はるべきものがあつても、それが他に關係があつて自分の自由にする事が出來ないで矢張り不自由をする、斯ういふやうな結果が後で付いて來る是が等流果と名付くべきものである。

それから増上果と言へばやつた時から其人の周圍に影響を與えてさうして自分ばかりでない、其緣故のある者に悉く其災の響を與えるやうになつて來るので、自分のやつた罪が大きければ、大きいだけ結果は自分がそれだけ矢張り難儀をしなければならぬ、所謂是が自業自得の結果である。又罪が薄らげば薄らいだだけそれだけの災が始終其身に付いて來るのである。それが増上果と名付ける、さういふやうなことが此華嚴經の中に非常に詳しく説明せられてある。

それで又もう一つ言ふと、人の性と云ふものは謂はゞ生れ付きと言ふものがある、此性に第一の性と第二以下の性とがある。第一の性とはどういふことであるか、是は今日性惡論、性善論と

いふて昔から随分學問上にやかましい議論なのであります。若し佛教の方から之を言ふと第一の性は佛性で、佛になる性質性善論に近いのである。性と云ふものは未だ活動を始めない以前の状態を指して性と云ふのであるから活動したら性とは言はぬ。それで佛性が活動すれば佛心となる。即ち佛の心になるべき性質を具へて居る、初より地獄の底に落ちやうとも佛性といふものがそれで消滅して仕舞ふものでないが、他の障礙物に依つて其活力を失つて仕舞ふといふのである。それで活力を失はせるには一方にそれだけの反對の勢力が増して來たのである。其反對の勢力は何であるかといふと我執といふものである。いつやら御話をしました所の心の中に我といふ觀念が起るのが抑もの始まりである、道理の中に成立したものであるから、何事も道理に一任して行けばそれで宜いのである。所が此個人の我れといふものは、個人の心が出来ると我れといふ觀念が出来ると、我れが出来ると彼れが出来ると、そこで我れと彼れとが相對すると我れの方の最負がしたくなる、それが抑も我執といふもの、始まりである、それが段々激しく働くやうになつて來る、さういふ習慣が又我々の心に深く染込んで來ると言つて佛になる性質が失せた譯でない、反對の勢力が我々の心の中に大變増して來る、それで反對の勢力が増してそれが主人公になつて此身を支配する之を凡夫性と名付ける、迷つて凡夫である、迷ひといふことはどういふことかと

云ふと道理を見損つて居ることである、詰り言ふと實有の我れといふものゝないにも拘らず之を實有と斯う認めて之に接觸する、是は抑も根底の迷ひである、さうして自分は常に安樂を求めて苦痛を避けんとして居る、而して其苦痛の原因となるべき私利私慾、手前勝手をやりたくて仕様ががない、それが大變得用なものゝやうに思つて居る、此私利私慾の手前勝手に依つて自分が始終安樂を得られるものである、斯う云ふ見當を付けて居るが抑もの迷ひなのである、豈圖らんや私利私慾は苦痛の原因である、苦痛の原因を取つ捕へて安樂の基に之を使はふとして居る、それが凡夫の性質である、そんな馬鹿々々しいものを何處から捕へたと云ふと、詰り習慣性で染込んで了つて居る、だからして成程それではいかぬと悟つて見た所でそれが直ちに實行が出来るか、それは出來ぬのである、なか／＼癖と云ふものは唯自分の心で發明した所で承知しない、譬へて言つて見ると流れの水の様なもので、後から／＼押して來ると同じであるから之をきちんと喰止めし仕舞はふと云ふても、なか／＼言ふことを聞くべき筈のものでない。

併しながら其方針だけなりとも大に發明をして是ではいかぬ斯う云ふ觀念が成立てばそれで先づ悟りの一部分である、其悟りの一部分が成立てば見當だけはちやんと付いたのである、見當の付いた後は今度は方法である、其惡習慣を如何にして之を取除くか、善習慣を如何にして之を育

てんかと云ふことが其方法である、能く世間の教へにも聖賢と云ふことを言ひます、賢と云ふ方は、賢を見て等しからんことを思ふ、見當だけは付いた、見當だけは付いたが未だ實行の上に於て思はしくいかぬ、それでは詰り修養中である、是非とも一つやりたいものである、斯う云ふのであつて修養中のものが賢と名付ける、それから凡夫が氣が付いて悟つて賢人の中に這入ることが出来る、それで菩薩の階級で言ふと賢人の位と云ふものは大變數が多い、三十段の等級が擧げである、それを段々修養して行く其修養は何であるか、詰り言ふと悪習慣を除き取つて善習慣を育て、行くことと云ふことに過ぎない、其三十段の等級を仕上げると云ふと今度は聖位即ち聖人の位に至る、此處から先き十段を十聖と稱へる、初地二地三地四地五地六地七地八地九地十地とある此處へ來ると容易に昇進がむづかしくなつて來る、ものと云ふものはそんなもので、粗い間は運びが早いが細くなつて來るほど運びが面倒になつて來る。

それで菩薩の佛になる迄の間には能く三大僧祇劫と云ふことを言ふ、僧祇と云ふのは阿僧祇で詰り無始劫と云ふことである、數限りのない長い時間である、長い時間のことを印度では劫波と言ふ、それを翻譯すると云ふと詰り長い時間と云ふことになるのである、長い時間とはどんなことかと云ふと逆も算盤を以て數へる譯にいかぬ、人間の思想を以て測ることの出來ないほどの長

い時間であると云ふやうな説明をしてある、其無始劫に三つある、第一僧祇、第二僧祇、第三僧祇と云ふ、それで第一僧祇と云ふのが初めの位を仕上げる時間である、第二僧祇と云ふのは時間が何處まで行くかと云ふと初地から七地まで、ある、其間の聖位を七地まで仕上げて行く間が第二僧祇である、それから先へ行くと尙ほ面倒になつて來る、それで今度は八地九地十地此三段を仕上げる間が第三僧祇である、之を三大僧祇劫と云ふ、之を仕上げて初めて佛果と云ふものを得ることが出来る、斯う云ふ按排に言つてある。

そこで聖位と云ふのはどうかと云ふと第二以下の性を殆ど滅却して了つて、それで第一性の佛性の方をすつと發達させる、謂はゞ論語などに言ふ「心の欲する所に従つて矩を踰へず」彼の境界である、自分の思ふまま、勝手次第にやつてそれでもやんと自然に善いことがやつて行ける、だから其善いことが非常に樂みになる勘定である、一生懸命やりたいと思つて其善いことがやられるから喜び樂みつゝ、能く行ひが務つて來る、心の欲する所、人間は何でも自分の思ひ通りやられれば樂みになる、所が思ひ通りやらうと思ふ所へ故障があつてどつこいさうはいかぬ其時が苦痛なのである、それが思ふことがやらうとして見當が稍々付いて是非ともやらなければならぬ、欲する所が定つてそれが着々實行されて行つたならばそれは非常に愉快なことに相違ない、其愉快

な其儘で自分に試めし人に試めし、益々愉快を重ねて行けることが出来るやうになつて来る、此處が聖人の境界である、孔子は十五にして學に志し……十五のなつてからさう云ふ志望を起して、それから極く勉強して三十迄刻苦勉強した結果がやつと三十にして立つ、志がぐらぐらしいやうになつたと云ふ、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ひ、七十にして心の欲する所に従ふて矩を踰へず、随分長い話で、七十で漸く先づ是だけの卒業が出来てそれで七十三で死んで仕舞つたと云ふ誠に御氣の毒な話である、若し人間と云ふものが此世限りのものであるならば、此聖人になると云ふことも、随分何だか餘り割の良いものでないやうな氣持がする、兎に角十五から七十まで刻苦勉強して漸く心の欲する所に従ふて矩を踰へず、所で七十で死んで仕舞つたのであります、此因果の法則から見れば決して止むものでない、今日に至つて世間の上から見ても、今日孔子が本當に全體の人に貴ばれ、全體の人の標準となつて多くの人を導きつゝあると云ふことは其心の欲する所に従つて矩を踰へずと云ふ意志が今日に行はれて居る所を見ると云ふと、随分愉快なものに相違ないのである、それで不偷盜の性質猶いことをしない性質に成立つて仕舞ふ、猶いと云ふやうなことはちつともやらすに濟むやうになる、猶いと云ふことは非常に苦痛なことで正直にやつて行くと云ふことは非常に愉快である、斯う云ふ境

涯になつたのが菩薩と云ふ、初地の菩薩が不殺生の習慣を取り、次いで第二地の菩薩に至つて不偷盜性と云ふものを具へる、猶い根生がすつぱり除けて仕舞つて善いことが順々に務めて行かれるやうな境界であると云ふことが華嚴經の中に言つてある、なか／＼今日吾々の容易に望み得べきことでない、併し理想としては是非ともさう云ふ所に吾々の目的を立て、置かなければならぬことであらうと思ふ。

此處までは泥棒の悪いと云ふ方に付て言つて見たのである、今日の吾々の菩薩の餘り高いことを論じて見た所で、詰り隣りの寶になつて仕舞つて吾々に直接何だか關係がないやうな氣持がする、それで之を近く言ふて、吾々が一つ此不偷盜と云ふことの眞似をして行かうとするには分を守ると云ふことである、是が詰り泥棒根性の猶いことを撲滅して行くと云ふことの出来べき方法であらう、勿論此分と言つても皆てんでに立場が違つて居る、女は女、男は男、其人々の立場に依つて其分限と云ふものは違つて行くから一概には言へぬ、兎に角自分の立場を先づ大切とするそれ以上に目的としては成程將來の爲には目的は大きく立てるが結構である、けれども今の立場と云ふものは何で出来たかと云ふと過去の業因である、是までの以前の爲した業が原因となつて今の立場が出来て来たのであるから、今の位置と云ふものは前の爲した業に依つて出来て来たの



である、而して反對に之を一つ變化させやうとしたらどうしても無理なことをしなければならぬ。今迄の務めに依つて是だけの結果を得たのであるからして是は後生大事に守つて行かなければならぬ、此結果の中に於て將來の原因を一つ段々植付けて行かなければならぬ、是が詰り分を守ると云ふことになるのである、分を守ると言つてそれが縮まつて仕舞ふと云ふのでない、今の結果は過去の爲した業に依つて出来たのであるから之を直ちに動かすと云ふことは出来ぬ、幸に是だけのものが出来たのであるから、此結果の中に於て將來の目的を達すべき一つ下拵へをしなければならぬ、是は人事を盡して天命を待つと云ふ所である、人事を盡して天命を待つと云ふことが詰り分を守る、斯う云ふことになつて来る、之に付ては私は常に思ふのは我日本と云ふ國が大變に分を守るには都合の好い國である、なせと云ふと上に標準が一つ極つて居る、國體の上に極つて居る君臣の分と云ふものが開關の時にちやんと極つて居る、上に一系聯綿の天子を戴き、君、君たり、臣、臣たり、臣民と君主とは位置を變へることが出来ぬやうに最初に極つて仕舞つて居る、それで臣民は飽く迄も臣民の分を守つて行かなければならぬと云ふのが我が日本の國體である。

然るに之に引替へて支那や何かは腕づくで互に天子の位をやり取りして居る、だから今日に至つても亂脈になつて居るのは據ない譯である、併ながらどちらにしても此分を定めると云ふことは非常に大切なことに違ひない、獨逸などが今日強いと云ふのはどうしたのかと云ふと「ピスマルク」が永年苦心をして「ゼルマン」聯邦を纏めさうして天子の位を貴んで人民の教育も皆其方針に依つて纏めて仕舞つて、彼の帝國主義と云ふことが詰り此日本の國體の眞似をしたのである。それであつて云ふやうな按排に先づちやんと秩序が立つて来た、然るに我が日本は先天的に是が出来て居る、此國民として之を御手本として分を守ると云ふことに付て非常に便利な國である、是は有難いことで御互に斯う云ふ國に生れ合せたと云ふことは分を守る上に於ても大變に是は御得用、話である、殊に佛教の上から言ひましても此分を守ると云ふことに付ては、此釋迦牟尼如来なども既に自分の身を以て御教へ下されてある、之に付て律藏と云ふ書物の中に斯う云ふやうな話がある、此印度と云ふ國は夏になると雨が多し國である、それで釋迦牟尼佛は毎年夏になると四月の十五日から七月の十五日まで之を九旬と申して、此九十日の間を夏中と稱へる、是は夏中の修行の時日と云ふことで、佛の弟子となつたものは此間一つ所へ纏つてさうして嚴格に修業をしる、斯う云ふ意味は一つは季節の都合から出たのである、兎に角さう云ふやうに修業時間をちやんと御定めになつてある。

所が印度に蘇羅婆國と云ふ國がある、其中に毘蘭若城と云ふ都がある、其處に毘蘭若婆羅門と云ふ（婆羅門と云ふは一面又梵士とも言ふ）、と云ふ人があつた、此婆羅門姓と云ふのは天竺では四姓と申して人間の階級が非常にやかましい、一番上に皇族と梵衆と平民ともう一つ劣等な賤民と四通りの階級が分つてあつて非常に階級がやかましいのである、一體釋迦牟尼佛が出家を非常に奨励したと云ふことは外でもない、階級を破らうと云ふので出家を奨励したので自然出家をすれば皆同じである、川の水は別々であるが海に行けば一つになつて仕舞ふ如く、賤民であらうが何であらうが出家をすれば皆平等に己れの弟子であると云ふことを釋迦が言つて大變に出家を奨励したのである、其中の婆羅門衆と云ふのが學者仲間でなかく、勢力がある、婆羅門族と言つて毘蘭若城と云ふ所の御頭が毘蘭若婆羅門、斯う云ふ豪族である、是が佛の教への尊きことを聞いて佛へ申込んだ、どうか當年の夏中の御修業は私の方で御賄ひを仕りますからどうぞ來て御修業なすつて下さい、御弟子を殘らず連れて御修業下さいと申込んだ、佛が承知してそれでは當年の夏は世話になりませう、斯う云ふことになつた、さうすると云ふと其御約束が濟むと云ふと其晩に毘蘭若婆羅門は非常な愉快な夢を見た、自分の住居する其毘蘭若城がもう白い毛布のやうなものを以てぐるりと周圍を包んだと云ふやうな非常に愉快な夢を見た、そこで婆羅門は心に

思ふた、佛を御招待申すと云ふことに付て斯う云ふ瑞祥があつたのである。何にしても有難いことである、非常な喜んだ、所が其土地に卜筮博士がある、是は常に信用して居る人間であるから兎に角斯う云ふものであるから一つ卜つて呉れと頼んで夢判斷をして貰つた、所が其卜者が佛敎道は大反對である、詰り外道を信じて居る人である佛敎道は所謂仇敵である、そこで其夢は誠に善い夢であると云ふことは知つたけれども自分の都合から毘蘭若婆羅門を欺いて、是はとんだ悪夢である、若し夢を此儘にして置かうならばあなたの御命が難しい此土地を他に奪はれるかも知れぬ大變なことである、さうかそれは困つたことである、どうすれば宜い、左様です、若しあなたに之を一つ通れやうと云ふならば一つの方法を教へて上げませう、どうすれば宜い、是から夏の九十日の間は決して餘所に出ることは勿論人に面會をすることは宜くない、何でも深院に閉ぢ籠つて自分の馴れた腰元か何か置いて決して他人に面會をなさらずに此夏中を御過ごしになつたらば或は随分災難を通れることが出来る、之を措いて他に災難を通れることが出来ない、婆羅門之を信じて、之れは困つたことだが命に換へられぬと其準備に氣を奪はれて仕舞つて、自分は奥座敷に引込んで誰にも面會せぬと云ふことにした、所で時日が到來したから釋迦牟尼佛は大勢の弟子、五百人の弟子を引連れて毘蘭若城へ出掛けて來た、所が毘蘭若婆羅門はそんな始末で面

會せぬと云ふので會ふことも出来ぬ、大變な當ての違つた話になつた、自分ばかりなら宜いが大勢のものを引連れて来て誰も賄する者が無い、宿を借す人ない、據なく樹下石上を宿とした毘蘭若城に林があつてそれは日本の林と違つてあちらの木は下へ枝が下つてそれから上の方に伸びる、夏中一ぱいに葉が茂るから其林が雨が降つても大丈夫で家の様に出来て居るさうである、そこで佛は據なく林の中に陣取つて樹下石上を御住居として修養された、然るに食物がないから餓渴に迫る、所が幸に他の國から馬を澤山仕入れて賣りに来た商人がある、案外に早く賣れて仕舞つて馬の食物の麥が残つた、それで其馬商人は誠に釋迦牟尼佛、御氣の毒である、此馬の麥は大分残つて居る、こんなもので宜しければ差上げませうといふと皆餓渴に迫て居るから有難いことである、早速御受け致しませうと多くの羅漢方は馬の麥を食つて修養を爲したと云ふ随分ひどい話である、佛は宜かつたらうが外の人は困つたでせう。

それで佛の御弟子の中に目蓮尊者と云つて神通第一の何處でも飛んで行けると云ふ偉い人があつた、目蓮が此有様を見て佛に申上げた、夏中のごさいますすが是は餘りに酷い、若し私に餘所へ出ることを御許し下されたならば外に食物の澤山ある所を存じて居る、其處へ參つて其處の者を説きさへすれば皆喜んで供養を致して呉れる、私其處へ參つて一つ食物をこちらへ御送り仕る

ことに致しませう、どうか直ぐに御暇を戴きたいと云ふと釋迦牟尼如來は御許しがない、是はそんなことをせぬが宜い、それは今日お前のやうな通力を有つて居つて自由自在に飛んで行ける他の者もお前に歸依して居るからお前の言ふことは聞くだらう、併ながら若し末の弟子達に至つたらそんな藝當は出来ぬ、藝當が出来ぬからと言つても夏中は餘所へ出てならぬと云ふ極まりを定めて仕舞つたのである、而して幸に斯う云ふ馬の麥でも何でも餘所から寄附して呉れる者があつたならば其で満足である、分に安んずるは當然である、然るにそれを無理に此夏中の規則を破つて他に求めると云ふことは甚だ不都合な譯である、そんなことはせぬでも宜い、斯う云ふ譯で抑へられて仕舞ふたのである、其次に阿難尊者と云ふ人、釋迦牟尼佛の從兄弟に當る人である、是は又自分の迦毘蘭城の親戚へ行きさへすれば皇族であるから皆喜んで食物を贈るに極つて居る、是は餘り酷うございますから私に親戚の所へ行つて一つ食物を求めて參る積りである、直ぐに御暇を下さいといふと、それはいかぬ、お前のやうに親戚のある者は宜からうが末の弟子のやうにないものはどうするか、兎に角今の麥で宜い、今日はだけのものがあれば夏中を務めることが出来るから其分を守れ、それが修養であると云ふのでは是も御許しがない、それで到頭九十日の間釋迦牟尼佛初め多くの羅漢方も馬の麥で御過ごしになつた、其九十日を過ぎると婆羅門は夏中を

過ぎさへすれば宜いと云ふので出て見た所が、釋迦如來は御約束したが城外の山林で御修行になつて居ると云ふことを聞いて大に慙愧して、誠に濟まなかつたと言つて佛の所に行つて御説教をした、それから非常な大信者になつてさうして佛道を修業し満足に仕上がることの出来るやうに相成つたと云ふことが律藏と云ふ書物の中に書いてある是等は佛が自分の身を以て分を守ると云ふことを御教へになつたものであらうと思ふ。

分を守ると云ふ所から段々此道理の真相を観察して見ると遂には無我の觀念の悟りに入ることが出来る、茲に於て全く阿羅漢の悟を開くことが出来たと云ふことが言つてある、さうすると云ふと此偷盜と云ふことを慎んで其裏の分を守ると云ふ心掛を以て行くと云ふと、取りも直さず現世にあつては安樂を得、遠くは佛果を得る所の道が之に依つて成立して行くことが出来る、而して其點を一口に言つたならば、詰り人事を盡して天命を待つと云ふことである、天命とは何だ、因果の成行である、善因善果、惡因惡果の成行である、現在の此結果の上に於て自分の爲すべき仕事を十分に務める、結果は向ふの仕事である、すると前途は自分の仕事である、其報は天然に打任せるより仕方がない、是れ所謂人事を盡して天命を待つと云ふことが此不偷盜の極處である之を唯能く守り得たならば、近くは此善良の人になることが出来る、遠くは之に依つて永遠の安

樂を求めることが出来る、斯う云ふのが此第二の不偷盜と云ふもの、先づ大體の趣意になつて居る、およそ何事をするにも現在の結果は過去の業因で成立したものであるから動かすことの出来るものである、此結果の中に於て務めることは又後の結果を迎へることになるのであるから、若し其希望があつたならば先づ後の結果を今の希望の上に實行するより外道でないのである、此心得で行きさへすれば偷盜の範圍に陥るやうな虞がないと云ふのが十惡法の中の第二の不偷盜と云ふもの、精神が斯う云ふことになつて居るのである。

### 治心と禮節

前回十善十惡の關係に就て御話をしたが、十惡とは身に三つ、口に四つ、心に三つ、それで身に三つといふものが一つには殺生、二つには偷盜、三つには邪淫斯ういふ名が付けてある、其内の邪淫といふことですが、文字は餘りに極端な爲めに、聞きよい文字でもなければ、言ひよい文字でもない、詰り十善十惡の名目といふものは其多くの部類の中で最も主なるものに就いて其名を付したのであるが、謂はゞ極端な大きなものを以て其名前の主としたので、殺生とか偷盜とか

邪姪とか斯ういふ大きな名前になつて居る、其實を言へば其中には有ゆる行ひが皆込めて居る、其類のものが其中に集つて居るのである、此邪姪の裏は不邪姪である、不邪姪とは何ぞやと言ふたならば禮節と云ふことになる、其禮を缺いた無禮の極端なものが詰り邪姪なのである、それならば寧ろ禮節と云ふ名前前で御話した方が辭も綺麗であり餘り聴きにくくないから、却て其方が宜からうと云ふので、實は邪姪の文字を禮節の二字に變へたのである。

人の禮と云ふことは實に人間として缺くべからざることである、禮記などいふ書物には大變むづかしいことが言つてある、細かいことまで規定してある、所謂禮儀三百威儀三千大變な話である、三千どころの騒ぎでない、佛教などでは八萬の威儀などいふことを云つて居て無限なものである、併し一人々々に悉く其數の多いものが皆要るといふ譯のものぢやない、其人の立場に依つて違ひますから一概には言へぬ、併し何れにしても此禮といふものが無かつたならば人間としての資格が無いと云ふ、彼の禮記などの初まりに「鸚鵡能言不離飛鳥、猩々能言不離禽獸、今人而無禮、雖能言、不亦禽獸之心乎」など言つてある、さうすると此禮といふものが行はれるところに人間の資格がある、若し禮といふものが無かつたならば最早人間の資格を脱したものである、だから禽獸社會と異つたものでない、斯ういふやうな鹽梅に言はれて居る、人間としての條

件は嚴しい條件である、どうしても斯うしてもやらなければならぬことである、然らば今日吾々の禮としてどういふ事をやるのかと押へて見ると、洵に漠としたものである、それは何故だと云ふと其人に依つて違ふのである、立場に依つてやり方が違つて来る、今から六七百年前彼の京都の梅尾山に明恵上人と申す仁が居た、是は偉い人で、北條泰時などの御師匠様である、此人の訓誠に面白いことを言つてある、禮とは何ぞや「あるべきやう」といふものである、親は親として「あるべきやう」、子は子として「あるべきやう」、夫は夫としての「あるべきやう」、女房は女房としての「あるべきやう」、男は男としての「あるべきやう」、此「あるべきやう」といふことが即ち禮といふものであると云つてある、成程そんなことにも言はなかつたならば、概括して言葉が恐らくないと言つて私は宜いだらうと思ふ、詰り言ふと此禮といふものは附合のないところに格別必要のないものであります、何か對手があつて向合ふ場合に於て此禮といふものが成立つて来る、人間は社交的動物で、附合をしなければならぬといふ生物である、さうするとまあ此禮といふものは一種の交際法と云つて宜いので、人間同志の附合法である、だから若し禮を失つたならば人間同志の附合法を知らないものである、斯ういふことになる、だから成程人間の資格が無いと言はれても大きに申譯のないことになる勘定だ、だから彼の論語などにも面白いことを言

つてある「禮之用和爲貴」禮といふものは人と人との和合を求め爲めのものである、仲好くさせるのには禮でないといふと仲好く附合つて往けないといふのであるが、此奴一寸訝しい、近頃になると、いやなに君と俺との間柄はどうでも宜い、そんな七むづかしいことを言つたつて仕様がなない、どうでも宜いと言ふ、さうすると間柄には禮は要らないと云ふ勘定になるです、所が孔子様あたりには言はせるといやさうではない、どうでも宜いと極めるからそれが破壊してしまふ、どうでも宜いやうに極めないで、それを守るべきをちやんと守つて行つて初めて和合を保つことが出来る、だから旨く和合して事を整へて行かうと云ふには是は必要のものである、其次に孔子は斯ういふことを言ふて居る、「有所不行知和而和不以禮節之亦不可行也」和合の貴きことを知つて和合して見たところで其和合がどうかすると行はれないことである、和合の貴きを知つてお互に附合をして和合の行はれないと云ふのはどう云ふ譯であるか、詰り「不以禮節之亦不可行也」是は禮といふものが缺けて居るから互に和合しやうと思つても旨く其和合が整つて往かぬのである、禮といふもので之を旨く整へて行きさへすればそれはちやんと其和合は整つて行くに極つて居ります「禮を以て之を節する」といふ「節」といふ字が面白い字である、彼の竹の節の節といふ字ださうである、それで彼の竹の節といふものは洵に行作のよいものである、

所謂秩序を誤らぬものである、能く秩序を保つて居る、例へば斯う短い所から段々伸びて行くといつても一概にそんなに飛越して一寸から一尺になつたなどいふそんな馬鹿なことをしない、一寸のものが伸びて行くには其次は一寸二分其次は一寸三分といふ鹽梅に順よく旨く伸びて行く洵に行儀のよいものである、此「節」といふ字は詰り言ふと「程好し」といふ意味だと云ふことで、能く言ふ言葉で「あゝ好い鹽梅に」などと云ふ、その好い鹽梅といふことは何處にあるかと云ふと此程好き所にあるのだ、詰り言ふと秩序を紊さぬ所にあると云ふのである、それで此「節」といふ字が詰り「程好し」といふ字で都合好く整へて行くといふ字である、それで此禮節といふときには人間の附合に就て互に無禮のないやうにする、無禮とは何であるかといふに、向ふの感情を害することである、何でも相手の感情を損はないやうにやつて行く、夫故に其標準といふものは私には是は餘程面倒な話ぢやないかと思ふ、何時やらも御話したが論語の中に孔子が「入大廟毎事問」といふことがある、大廟といふのは殿様の御靈屋で、孔子が魯の國へ仕官をした時の事、所謂御家老様になつた、處が御靈屋で今度御先祖の御祭がある、大夫の資格を以て列席をしなければならぬと云ふことであつたから傍の者が大に注意をした、常に禮儀々と云ふて非常だやかましく言ふ男である、それが今日儀式の定まる御祭の所に列席をするのであるから嘸見事

な態度で列席をするであらう、是は見ものだと言ふので皆注目した、どんな態度で先生列席するかと思つてな、所が毎事問つと云ふ、一つ／＼聞いて廻つて居ると云ふ、門口へ行くといふと突然門番に、此處を入つても宜しうございますかと聞いた、入つても宜しい、ちやあ御免下さい、人の居る所、番人の居る所何處へ行つても聞く、此處を上つて宜しうございますか、上つて宜しうございますか、入つて宜しうございますか、入つて宜しい、此椅子へ掛けて宜しいか、宜しいと云ふ斯う言つた鹽梅に何でも一つ／＼聞いて行く、自分の身體を一寸動かすにも人に聞いてからでなければ動かさぬと云ふ鹽梅式である、それで外の注目して居る人達が案外に思つた、あれ程禮儀々々と云ふて平生やかましく言ふ男だから定めて禮の事は明るいであらうと思つて居つた、然るに今日は大切なる御靈屋の御祭、儀式の定まる所へ行つて片づ端から聞いて廻つて居る、あれでは別に禮を知つて居るといふ資格は無いやうである、此人は禮儀々々とやかましく言ふが、薩張り禮儀なにかは知らない人間である、斯う云ふやうな批評が起つた、それで或人が是は所謂孔子様最負の人でせう、それを聞いて孔子様の所へ行つて話をした、今日あなたが御靈屋に御列席になつて一々聞いて廻つたそれで世間の人の批評には孔子は非常に禮儀のやかましい人であるのに今日の態度は何んだといつたやうな譯である、あなたはどういふ譯でそんな事をするのかと

いふと、孔子の曰く「是禮也」聞くのが禮なのである、縦令自分が知つて居つたからといふて知つた風でずか／＼やつたら無禮だ、だから縦令知つて居つてもそれを一々其係りの者に御尋をして自分が事を行ふと云ふのは即ち禮である、斯ういふことの孔子が言ひました、成程是は尤な譯で、それなら何でも人に尋ねさへすればそれが禮といふものになるか、斯ういふと此處に又問題が起つて來やうと思ふ、所が其尋ね方にも種々の尋ね方があらうと思ふ、知らずして尋ねるものもあるであらう、又彼の詰問などいふやうな餘りあれば宜くない尋ね方である、自分は知つて居つても一つ向ふの奴を困らしてやらうと云ふもので、それで態々尋ねるので、それを詰問などいふ、それから又一番恥を搔かしてやらう、彼奴知つた風をして居るから一つ恥を搔かしてやらうと云ふ意地悪く突込まれる者がある、あゝいふやうな聞き方になつたならば決して私にはあれは禮といふものではない、却て無禮になる、何故と云ふと向ふの方にそれだけ迷惑を掛ける困らせることになる、それでは人間附合は旨く整つて往かないのである、だから此禮といふものは詰り言ふと其時の場合に依つて向ふの人の感情を害さないやうに而して道理に違はぬやうに之を先づ行ふて行くといふことが禮といふものだらうと思ふ、今日日本で人の家へ行くのに「へえ今日は」と言ふて行くが「今日は」ではどう云ふ意味か解らない、「御免下さい」「御頼み申します」と云

ふなら分つて居るのに、「今日は」と云ふ、併しあれで通つて居るとしても、今日はで黙つて入つて往けない、「今日は」「へえ入らつしやい」なんてちやんとそれで極りが付く、「今日は」無しにやるとおかししい、さうすると「今日は」も一つの禮になつて居る勘定である、人の家へ入る禮としては「今日は」と斯うやる「今日は」と言ふ、今日は雪が降りまして、今日は雨が降りまして今日は御天氣でと言ふのだらうけれども、其先きの方までは言はない、唯初めの「今日は」と斯うやる、それであれが一つの禮になつて居る、併し又場所に依つては「今日は」では都合の悪い所がある、「御免下さいまし」とやらにや都合の悪い所がある、又所に依つては「頼む」とやらなくしてはならぬ所もある、「頼む」とやらにやならぬ所へ行つて、「今日は」と言ふては些つと拙い、と言つて裏店向が何かへ行つて「今日は」で済んで居る所へ行つて「頼む」むなどと言ふては是も何んだか妙なことになるだらう此邊が禮節と思ふ、其場合々々に依つてやつて行かなければならぬ、だから餘り突拍子もないことをやつては禮にならぬ、さうすると禮といふものは詰り通俗的に言へば向ふの感情を害さないやうに都合好く附合つて行くといふことが此禮といふもの、精神になつて居ると思ふが、何處で標準を立てるかと思ふと仁義禮智と云ふことで立てる、彼の順序は私に洵に都合の好い順序に出来て居る、彼の仁といふは詰り親切な心で、あれが土臺になる、彼の

仁といふ親切な心が土臺である、それを一つ行はうといふ時が即ち義といふものである、それに背かぬやうにして行く其義が形に現はれて禮といふものになる、而してそれを分別して其鑑を付けるといふものが全く智の力である、智が無いと見當違をしてからに飛んでもない禮儀の積りで無禮をして下ふことがないとも限らぬ、そこで智といふものを後から付けたものであらうと思ふ、併し起りの順序を言ふと仁義禮と云つてゐる、だから土臺に仁といふ親切な心があつてそれが此心の上に極つて其處が義だ、心の上に極るところが義である、其極つたものを形に現して來る、言葉になり態度になり之を現して來る、此場合が詰り禮といふものになる、すると其中に親切な心があつて之を形に現した場合は即ち禮である、内に私利私慾手前勝手な根性を有つて居つてそれを形に現したのでは如何に其態度が宜くともそれは禮として言ふことが出来なくなつて來るのである、すると此禮と無禮との標準は何處にあるかと云ふと、詰り此親切なる心を形に現したのである、是が即ち禮といふものであると斯う見て宜からうと思ふ、勿論論語などには「禮主於敬」とあつて、敬といふのは向ふを粗末にせぬ、向ふを粗末にせぬと云ふのは此方に親切と心があるからである、禮は敬を主とす、敬とは心の敬ひである、心の上に向ふの者を敬ふて居る、其上からする仕業である、それが詰り禮といふものになつて來る、斯ういふ鹽梅に言つてゐ



る。それから禮記の中の「冠義」といふ一段に其處に妙なことを言つてある。禮儀の始まりはど  
ういふ所から持出すかと云ふと第一に態度である。容體を正しうすることが第一で、向ふに對し  
て粗忽のないやうにしなければならぬ、それから言葉遣ひである。是は餘りぞんざいのことのない  
やうにしなければならぬ、それから又顔色である。顔色はむづかしい話で、どういふ顔色をして  
宜いかさうすると禮義をするには一つ御化粧でもしなければならぬ、だつてそれも變な話である  
勿論此顔付といふものに付ては論語の中には面白いことがある、子夏といふ人が孔子様に親孝行  
のことを聞いたことがある、親に孝行するにはどういふ鹽梅にやつたら一番宜しうございませう  
と尋ねると「色難し」どうも顔色がむづかしいものである斯ういふことを言つて居る。親に孝行  
するにはどうしたら宜いかと云ふと顔色が難かしいと云ふ、一寸聞くと訝しい話だ、親孝行は顔  
色が難かしい、さうすると其顔色を麗くするには、どういふ鹽梅にしたら宜いでせう、すると  
其次の説明に斯ういふことを言つてある「有、事弟子服、其勞、有、酒食、先生饌、曾是以爲孝乎、何  
か骨折仕事があつたらばさせて貰ふ、それを吩咐けられたならば是は此仕事をさせて戴いて有難  
い、斯ういふ心持でやらなければならぬ、すると顔色が麗い、所が何か用を吩咐けられると何  
んだか何時でも、私にばかり斯んな事をさせるなんと云ふやうな心を持つと云ふと其顔色が

何となく變になる、頬が膨れたり眼付が悪くなつたりどうも工合が悪いものである。縦令痘痕が  
あつても色が黒くても極ひませぬ是は仕事をさせて戴いて有難う存じますと云ふ此心持でやると  
いふと顔色が親の眼から見ると大變麗い顔色であると云ふ、それで今の禮記のやうに禮義の始  
まりは何だと云ふと一に動作、それから顔色、それから言葉遣ひでは成るだけ向ふの者の感情を  
害さないやうに盡して行くのが抑々禮の始まりである。斯ういふやうな鹽梅に言つてある、それ  
で此禮義といふことで非常にやかましいのは軍人の仲間である、勿論あれは明治十五年一月四日  
付けで彼の御勅諭が出て居ります、明治天皇様の、是は今日でも軍人の魂といふ位のもので、  
其五ヶ條は何だと云ふと、第一が忠節、其次が禮義、其次が武勇、それから其次が信義、それか  
ら第五が質素、斯う五段に分けてさうして懇々と分り宜いやうな説明になつて居る、それで其禮  
義の仕方はそれはやかましいことを言つてある、軍人たるものは上元帥より下一兵卒に至るまで  
階級がある、其上官の命令には服従しなければならぬ、又同列同輩の者と雖も前任者と後任者  
とがあるからして、前任者に對しては後任者は敬禮を必ず行はなければならぬ、斯う云ふやうな  
鹽梅に恐しく嚴しい、縦令自分の隸屬する所でない組の違ふ所の者でも自分より眼上の者と見た  
ならば之に對して敬禮を行ふ、もう上官の命令は直ちに朕の命令と心得ると云ふ、上官の者が

らの吩咐は天皇様から直ちに御命令のあること、心得て服従しなければならぬ、斯ういふやうな恐しく厳しいことが言つてある、又今度は上官の方に對して又上官たる者は自分より眼下の者に對しては決して傲慢な態度をしては可かぬ、能く面倒を見てさうして慈愛を與へてやるやうにせよ、それから其結文に至つて面白い、若しも敬上惠下——上を敬ひ下を惠む此附合が出来ないやうなことでは軍人たる許りでない實に國家の上にも容し難き罪人である、確と守れ、斯う云ふやうな鹽梅に大變嚴しい、併し是等は一つ考へて見れば何も軍人に限つた譯ではない、總て何事か組織をしてさうして一つ大きい仕事をしやうといふ時分にはどうしても斯ういふやうな規定を自然に守る風が出来て居らなければ仕事は著々其歩を進めることが出来ぬ勘定である、勿論軍人の方は別段厳しくしなければならぬ、何故と言ふと戦争などに向つての命令は何んだと云ふに生命を打棄れ——死ね——と云ふ命令だから此世に生れて何が一等欲しいと云ふに生命より大切なものは無い、一番大切なものを打棄つてしまへと云ふて、それを否應なしに言ふことを聽かせなければなりませんぬから餘程厳しくなければならぬと思ふ、縦令外の仕事でも精神は私には其處になければなるまいと思ふ、だから是は獨り軍人ばかりではない、何の上にも斯ういふことはちやんと守らなければならぬ、まあ佛教の修養法は「惠下」惠の字が書いてある、矢張り同じこと

で、上を敬ひ下を惠むと云ふ、是が詰り人の禮である、下を惠むと云ふことが矢張り敬ふので結局言へば双方で敬合ひをするのである、だから葛城の慈雲尊者といふ方の御言葉に斯ういふことがありました、人を敬ふといつたからと云ふて君と稱して敬ふべき者は君と稱して敬ひ、汝と稱して敬ふべき者は汝と稱して之を敬へと云つてある、貴様と言つて宜い程の者は貴様と言つて其人を輕蔑しないが宜い、又旦那様と言ふべき人は旦那様と稱へて其人を輕蔑しないが宜い、だから親が親として子を能く教育をして行くといふことも其子を粗末にせぬと云ふ詰り子を敬ふので、上と下の位に付て唯敬上惠下といふ名を付けたまでのことである、詰り惠むと云ふことは唯情を掛けることではない、畢竟それを元へ論じ詰めて見ると互に敬合ひをする斯ういふことになつて来る、之に付て法華經の中に不輕品と云ふ一段がある、何でも世の中のものゝ輕んじない大切に敬ふと云ふ事が法華經の中に書いてある、此不輕菩薩はどういふことで不輕といふ名を貰つたかと云ふと世界中の生物に就ては何の生物に向つても必ず禮拜する敬禮をする、何故さういふことをするかと云ふと一切の生物には皆佛性——佛になる性質を備へて居る、今こそあゝいふ果報を受けて拙い身の上となつて居るけれども佛となる性質はちやんと備へて居る、是が發達さへすれば立派な佛になれるのである、だから敬ひ申さなければならぬ、今に佛になります有難い

佛でございませす、どうぞ御大切に御修業なされるやうに斯う言つては御辭儀をする、中に意地の悪い者は貴様達にそんな事を言つて貰はなくとも宜い餘計な事を言ふな、それでもあなたは佛に なります、人を馬鹿にしやがると言つて中には石を投げたりすると、逃げながらそれでもあなた は今に偉い佛になりますどうぞ御大切に御修業爲さいませ、斯う言つてやつたと云ふ事である それで不輕菩薩といふ名が付いて居る、斯ういふ上から言ふと縱令馬方が馬を使ふといふにした ところで其馬を粗末にせぬと云ふのは是は一つの禮でございませ、其馬を大切にされる、さうすれば又馬も馴染んで能く言ふことを聴く、斯う云ふことに自然なつて行くに極つて居ります、だから此禮といふものは人と人との間に最も多く行はれるものだが、其實言へば汎く一切の中に此事は自然に行はれて行くべきものに相違ないのである、それで此禮といふものを缺かぬやうにするといふには服従といふことである、此服従といふことは結構なことである、動もすると非常に間違が出来たがつて困る、服従といふことは善いことである、所が此裏にいやなものがある、一つある、盲従といふ、斯うなると又仕様がな、それから又屈従などいふことがある、斯んなことになると困る、此服従といふことに眞實従ふのである、所謂心服の意味である、實に是は結構なことである、だから何事にでも服従して初めて仕事が出来、所が其中には盲従などいふ盲従は割

合にやりたがる盲従といふのは何かと云ふと俗に流行物好きといふのがある、是が流行るからと言つて人眞似をする盲従雷同と云ふことでありまして餘り宜いことではない、だから是はまあ新聞などいふものはなかくさういふ所に力の有るもので、新聞などが筆を揃へて書立てると大概世間の人々がそれに従つてしまふ、私はあゝいふのは勿論道理を考へて道理に的中したことで大に尤なことゝ感服してそれに意を向けるならば服従の仲間か知らないけれども、人が皆言ふのだから大丈夫だと言つて矢鱈無性に世間の評判記に驚いて騒ぎ立てる、あゝいふ人間になると之はどうも盲従の仲間だらうと思ひませす、それから又屈従といふことはどうかと云ふと、是は多く野心のある人が屈従する、何か先へ行つて一つ謀叛でもあれば是は仕方がない暫くの間くなくやつて居る、或は金力の爲めに屈従する、或は腕力の爲めに屈従する、此屈従盲従は甚だ宜くないけれども服従といふことは是は非常に結構なことで、服従することがなかつたらば人間は何の仕事も出来ないと思ふことになり、依つて此服従といふことは非常に善いことだらうと思ふ、例へば吾々が信仰の問題などに付て考へて見てもさうである、例へば阿彌陀様を信する、御釋迦様を信するにも、其教に従つて之を實行するといふことになれば是は服従である、それをどうかすると彼の流行神などいふものがあつて成田の不動様は護摩を焚けば何でも叶ふと云ふぞ

んなことを言つて彼方此方へ駈摺り廻るあゝいふのは詰り言ふと盲従信仰など、云ふのだらうと思ふが随分屈從な信仰であるだらうと思ふ、例へば雷が鳴つて来る、「雷は近くなる程様がつく」などいふことがある、遠くの方で鳴つて居る時分には又今日も雷々と言ふて居るが、近くへ来てがら〜と云ふとあゝ雷様は怖いと屈從してしまふ、氣味が悪いものだから縮まつて了ふそれと同じく此精神の上の信仰に付ても私には服従とそれから盲従と屈從の區別はあるやうに思はれる、お互が此世間に在つて人と人との間に附合を完ふして行かうと云ふ場合に於て各々禮節を以て此附合をしやうと云ふときには此選別を一つして置かなければなるまい、此服従の上ならば縦令どのやうに割が悪からうがどうしやうがそんなことを厭ふことはない、服従すべき道理があつたならばちやんと服従してどのやうな事にも忍耐して之を努めて行く、又それに引替へて盲従或は屈從といふやうな事には人としては甚だ恥づべきことであるからしてさういふことには従ひたくないといふことは常に心掛けて置かなければならぬ、そこで御互が禮節を完うして此生涯を送らうといふ場合に於てはどうしても自分の心を先に治めるといふことが本になつて来る、何故と云ふと此禮義の基は何處にあるかと云ふと矢張り自分の心である、其心一つでは是が禮ともなれば無禮ともなるのである、若しも縦令自分の主人なら主人、眼上の人なら眼上の人に對して仕

へることがあつても屈從盲従であつたならば是は眞に其人に能く心服したのでないのである、此禮の上から言つて無禮になる、之に引かへて縦令其人に反抗しやうといふことがあつても自分の精神の上には親切なる心を以て之に對する場合であつたならば、矢張り是は禮に適ふて行くことになるのである、だから禮と無禮との境界は何處にあるかと云ふと心の向け方一つにある、親切な心から出たのならば悉く一切の動作が皆禮となる、之に引替へて私利私慾の手前勝手根性からやる動作であつたならば悉く是は無禮の行爲であると斯う言はなければならぬ、そこで其無禮の一番親玉が何だと云ふと男女の關係である、是が亂脈になると最早人間の資格は全く無くなつて了ふ、人間の結婚などいふ事を非常に重んずるのは此處が土臺である、そんな所から邪姪といふ名前が出て来た、併し邪姪と云ふと餘り事が大き過ぎる、だから普通の禮節といふことに付て唯御話したのみである。

そこで禮節の本は何處かと云ふと自分の心で、其禮節を完ふせむとするには自分の心を治めるといふことが根柢になる、其の治めるといふことをどういふ鹽梅に行つたら宜いか、治めるといふことは詰り秩序を整へることである、國を治める家を治める、別に遣りやうはない、詰り秩序の紊れぬやうにちやんと整へる、さうすると吾々の心も秩序も紊れぬやうに整へなければならぬ

所が吾々の心の上を常に考へて見ると、彼の感情は盲目的のもので、まあ何か氣に入つた物を見  
ると欲しくなる。氣に入らにや憎くなる、何でも都合が好くなれば人のやつた事まで自分のせい  
にする、そんなものが矢鱈無性に後から後から起つて来る、あんなものに割込まれたのでは吾々  
の良心は茶々滅茶にされてしまふ譯である、それでは吾々の秩序が立つたといふことは言へない  
のである、そこで自分の心の秩序をちやんと正しくしやうとしたならば何か此心の對手となるも  
のを常に極めて置かなければならぬ、勿論其對手を極めるに付て種々なる主觀的の觀察をしてさ  
うして自分の心の奥底はどうである、佛になる性質を有つて居る、だからして此性質を滅却させ  
ると云ふは甚だ自分の責任の濟まぬことである、どうしても之を立派なものに仕立て行く、斯う  
いふやうな鹽梅でやつて行くのもある、それから又今度は向ふの對手を見る佛様或は因縁因果  
の法則、其法則に依つて成立つた佛といふものがある、佛といふものは吾々とても佛である、皆  
佛になる性質は有つて居るけれども唯下らない所謂佛敎の語で客塵と能く言ひますな、客塵とい  
ふのは他所から來た御客様といふ、客塵煩惱と言ひまして外から塵が入つて来る、人間の家の座  
敷が汚れるのは外から塵が入つて来る、誰だつて座敷は汚したくないけれども向ふから入つて來  
て困る、私共の身體の五官、眼、耳、鼻、口皆心の受付をする受付所になつて来る、それに種々

な御客様が入つて来る、其中で一番忙しいのは眼と耳である、一番御用が多い、口なんぞもなか  
なか御用は多い、併し幾ら卑しい者でも朝から晩まで喰通しに食つて居るものではない、眼とい  
ふものは眠らない間は一年中止めずに何かやつて居る、所が今言ふ通りそれが氣に入つたものを  
見ると直に病氣があるものだから向ふのものを此方へ迎へてそれを御主人様に御招待する、彼奴  
は宜いなどといふ慾張りを起す、それが爲めに自分の良心などの位置を取替へて了う、良心など  
は其處に居るか分らなくなつて来る、それが遂に心を滅茶々々にして了う、だから常にそのな  
いやうに何かと工夫をしなければならぬ、近頃いろ／＼流行する静座法なども彼等も治心法の一  
つである、併ながら静座法などは何か向ふに信ずるところの對手があつて静座をしなければ役に  
立たぬ、却て静座法をすると益々妄想が種々起つて來て種々の事を考へ出す、だから確かりした  
對手があつて静座すれば宜い、所が當なしに遣付けやうものならば、まるで散漫になつて了つて  
却ていろ／＼悪いものまでも引張込んで來て、そんなものに取付かれて妄想を重ねることになつ  
て來る、それで私共はどう考へても是は具體的に佛といふやうな、兎も角人間でも宜い、詰り  
人間といふ者は不完全である、どんな人間でもどうも人間同志の内部を考へて見ると俺も人間だ  
が彼奴も人間だ、位こそ違へ、矢張り斯んなものだらう、是はどうしたつて駄目である、又態度

も其通りだ、どうしても吾々人間以上のもの、一つ立派なものを對手とするより外に途がないのである、之を對手にして其處に心を纏めさうして自分の親切なる心を常に失はないやうに秩序を保つ、それだから佛教で云へば報恩主義と云ふ、世界中の物は皆有難いものである。勿論日本の道徳も報恩主義で忠孝、忠といひ孝といひ皆有難いものである、自分の眼上の者に對して親切を失つては相成らぬと云ふのである、是が服従主義である、自分の心を第一に或信仰の目的の爲に服従をさせて置いてさうして之を他に餘り感はされないやうに工夫をして行く、さうすれば今日御互が平生の務め「テーブル」を列べて仕事を居る間に於ても此人と人との間の交際に於て其態度といひ言葉といひ又は顔色といひ自然に此親切なる心の指圖に依つて是が働くやうになりさへすればもう禮節は期せずして自然に行はれて行く勘定である、此上から見ても御互人間が人間たるの資格を圓滿に一つ得やうと云ふには先づ禮節であるが、其禮節を完うするには心を治めるのである、其心を治むるのに又先決問題としては此信仰を一つに持つて常に之を繼續して修養をするると云ふことより外に途がないことでありはしまいかと斯うみづから深く信じて居る、此道が又行はれさへすれば邪淫などの事はもう何も用事のないことになつて了ふ、全く此禮節と治心と吾々は此人間たるの資格を生涯完うすることはしして不思議な事はない。

### 誠實と妄語

今度は口でする仕事、口でする悪事が四通りあると云ふ事を豫め御話をしたいと思ふ、第一に妄語、第二に綺語、夫れから第三には惡口第四には離間語、詰り中口を利く、大體此四つの中に合めて見る事が出来る、さう云ふ事をしないやうにすれば善行で、其第一に算へられたものが妄語と云ふ事で、妄語と云ふのは詰り嘘を吐くと云ふ事である、其妄語を引繰り返せば詰り誠實と云ふ事になる。

其處で口でする悪事の中に於ても妄語と云ふ嘘吐きは一番やり宜い、是位調法な物は無い、好く口は調法だと言ひますが、調法と云ふのは何う云ふ譯であるか、詰り勝手次第に喋舌る、理窟の合つた事でも合は無い事でも構はず喋舌る、詰り心と一致しませぬから其處で矛盾と云ふ事になる、世の諺にも嘘は泥棒の始りと云ふ、成程總ての悪事に嘘の伴はない悪事と云ふものは少い、悪い事と云ふと大概嘘が導きをして居る、導きと云ふか先驅と云ふか、悪い事の總ての魁とする事は妄語である、夫れから十善法語と云ふものの中にも斯う云ふ事を言つて居る、妄語の中

にも大妄語小妄語の區別を立て、ある、是は十善法語ばかりでなく、戒律の上にもさういふ風に區別が立つて居る、詰り大嘘小嘘と云ふ事でも、其類別は何う云ふ鹽梅に分けてあると云ふとも事件が大きいから夫れで大妄語である、事が小さいから小妄語と云ふ譯ではない、事件に關係はない、夫れでは何を標準に大小の類別をしたかと云ふと、戒律の方から言ふと道德に關係のある嘘を以て大妄語として居る、言はゞ偽善者である、夫れ程の事をやりもせぬ癖にやつたやうな風の事を言ふ、俗に山師といひ、山師行者といつたやうな類、あゝいふ類を大妄語と名くべきもので、道德を害するもの、嘘の中でも大嘘である、其他の事は假令何のやうに事件が大きくても國家に關係する程大きな事件であつても其他の事に就いて嘘を吐いたのならば、是は小妄語の仲間に入れるものである、斯う云ふ風に言はれると何だか釣合の取れないやうな氣持がする、道德上の事はちよつとした事でも大妄語に入れる、夫れで其他の事は何んな大きな人殺しに關係のあるやうな事も皆小妄語の中に入れる、夫れで釣合が取れぬかと思ふ、處が戒律の方で言ふとさうでない、此妄語にはもう一つ附加刑と稱すべきものがある、夫れに伴ふものが出来て来る、別して此妄語には多い夫れを兼罪と稱へて居るが妄語には兼罪が多い、だから假令小妄語の部に這入つて居つても此兼罪の上から是が大罪であるといふ事が論じてある、兼罪とは何んな鹽梅か

といふと、先づ嘘を吐いて人から金を取つたといふ様な事があるとは是は今日の言葉では詐欺取財といふ、さういふ事があると、嘘の方よりは金を取つたといふ方が重くなる、是は泥棒を兼ねて居る嘘であるから其嘘の方丈けでは別にさう差支へないが、一方の兼罪が重いのであるといふ鹽梅に成る、又嘘を吐いて人を殺す人を死に落す斯ういふ事があると、嘘が殺生を兼ねて居る事になる、夫れで嘘といふ奴が何んでも悪い事といふ悪い事の爲めにはきつと道案内をする、だから凡そ悪い事に就いて嘘を兼務して居らぬ悪事は殆んど無いと言つて宜い、嘘の罪を定める時分には兼罪の方を以て其嘘の罪を定めて行く、ですから事件が大きければ大きい丈け妄語の方の名前は假令小妄語であつても兼ねる方の罪が重いので其處で大罪となる事が出来ると云ふ風に論じて居る、尤もな次第ですから、此妄語と云ふものは總ての悪事に魁するので嘘を止めて了ふと殆んど悪事が出来ないやうになつて了ふ、其處で是は道德上非常に大切なものだと思ふ、何事でも悪事をしやうといふには嘘が先づ一番先きに立つて出掛けて来る、此嘘といふ事が一番やう宜い仕事だ、其處でまあ多く嘘の吐き始めは何ういふ場合かといふと虚榮心が基である、人に好く思はれ度いとか、好く言はれ度いとかいふ虚榮心が一つある、もう一つ執拗く成ると今度は利益問題、此名譽慾と利益慾の爲めに多く嘘をいふ、嘘といふものは實に道德上慎しまなければならぬ

ものである、一體嘘を吐かねば今日生活して居られぬかといふとさうでない、嘘を吐かぬ方が大變樂なんだ、寧ろ嘘を止めて了つた方が宜い、酒や煙草は養生に害があるといふけれ共、此嘘といふ奴は道徳上、此位害のあるものはない、酒と煙草が養生に害があるならば、一方は道徳に害のあるものである、身體を健全にしさへすれば夫れで道徳は何うしても宜いか、さういふ譯に人間は道徳が基である、そんなら斯んなものは斷物にして了つたら宜いぢやないか、是は誰れでも分り切つた話である、何んな事があつても嘘は吐かぬ、斯う極めて置いて矢つ張り何うかするとちよこく出て来る、近頃其嘘の奴目何んな場合に斯んな事が必要があるか知らぬが、可笑し氣な事をやるまいと思ひながらやつて居る、已れはもう酒は廢める煙草も廢めるといふて、其酒の場所へ出さへしなれば酒を呑む氣遣はない、煙草も持つてさへ居らなければ大丈夫と斯う考へる、處が嘘は何にも持たないでもちよこく出て来る、誠に厄介な奴だ、嘘の道具と云ふものは別に要らない、嘘の道具は口丈けである有り合ひの口を以てよちこくとやつて居る、何んな場所にも斯んな奴が要るか知らぬと思ふと、先づ當前の事を當前に物が運んで行かれる時に於ては、私共嘘を吐く必要は殆んどないと思ふ、處が何うかすると云ふと是非附かなければならぬ答の事をさつぱり忘れて了つたり、さうして愈々差支へて來た時、彼れは何うした斯う責められて

自分乍ら何とも申し譯の仕様が無い、此場合で御座います、其時に謝つて了へば文句はない、何うも失策を致しまして誠に相済みませぬ、以來氣を付けます何うか勘忍して下され、まあ斯ういへば事が済むやうで、夫れより他に道はない、やり損つたに依つて謝る、然るに此方一つ虚榮心がある、餘り意氣地の無い有様を其處に曝け出すと云ふ事は何となく氣が濟まぬ、思はず知らず何だか體裁が悪いと言ふのもちよこつと胡魔化す、其處からして嘘と云ふ事が知らず識らず起つて來て、何うも此嘘の根柢を敲くと虚榮心である、自分のやり損ひを其儘曝け出すといふ事は何うも辛い、辛いと云ふのは全體可笑しな話なんだ、夫れを隠して置けば自分の男が何れ丈け上つて來る却つて悪くなつて了ふ、虚榮心など言ふものは御同様人間が皆あるものである、大概の事は前後を考へて照し會して見ると其人の行爲と云ふものは略々察せられるものである。どのやうにちやんと道理に適つたやうに順序好く並べて見た處がまあ此男の平常の行爲から考へて見ると、今日の話は如何にも夫れで一應尤もなやうではあるが、是は容易に之を吞込む譯には往かぬといふ事は、私共でさへ常に斯ういふ事は悟れるのでありますから、貴君方に至つては申す迄も無い話、必ず浮ぶに相違ないのである、若しその話が如何に尤もであつても、大きに御尤もといふ譯ぢやない、あーさうですか何れ能く考へて見ませう、さういふ譯で少し言葉を引つ張る氣味



がある、其時分に限つて返事といふものが判然と出来ぬ、所謂人間の心理状態とでもいふものですかなし、さういふ時分の返事に限つて夫が長く引つ張るものだ、へーえ左様で御座いますかな、判然と語尾を切り上げる事が出来ない、何んだか之は變なものだ、へーえと云ふのは疑を挟んだ返事だ、決して直ちに快諾が出来ない状態である、夫れは自分にも常に能く知つて居る、夫れで前にちよこつと嘘を言つて見た處が向ふが如何にも深く返事して呉れ、ば夫れでちよつと諦めが附くのだが、へーえとでもやられると、何うも氣に掛る、己れは折角嘘を吐いたけれ共之は失敗つた何うも此嘘を彼の人には本當と思つて居らないやうだ、一遍此嘘を吐いた上は何とかして此嘘を成功させなければならぬ、嘘の成功といふのは奇妙なものであるが、本當に思はせるのである、又本當に思はれなかつたら嘘位様の悪いものはない、嘘を吐いたは宜いがお尻から露れたらば之程様の悪いものはない、だから一旦嘘を吐き出したからにはどうしても之は押し切つて了はにやならぬ、押し切つて了ふといふ場合に向ふの返事が變だから何うも其儘に捨て、置けぬといふのは人情だ、はてな此奴は困つた折角の嘘を向ふが本當に思ふやうにさせるには何ういふ鹽梅にやつたらば宜いかしらんといふので、無い智慧を絞つて色々の方面から突つかい棒をかふ何んだか嘘が倒れさうであるから、倒れちや困るといふので色々な方面から引例を出して、彼れ

は全體とか言ふ言葉がさういふ時に必要である、彼の事は全體、なんといふ處で御座います、其處で斯ういふ事情に立到つたので御座います、何うぞ信用なすつて下さいと言つて見た處が、之が又嘘なんだ、だから矢張り何うも向ふが本當に返事をしない、どうも何んだか知らぬ坐りが悪い、嘘で始つたものだが、何うしたならば巧くびつたりと据付ける事が出来るか知らんといふので、第二の嘘を吐くが何んとなし坐りが悪い、夫れぢや仕方がない、今度斯ういふ鹽梅にやつたら宜いかといふので第三の嘘を又考へ直す、第三の嘘も何んだか成功せぬ様だ、今度は何うやつたら宜からうといふので第四の嘘をいふ様になる、丸るで嘘ばかりで心配する、斯ういふ馬鹿な目に遇ふ事がある、夫れが果して成功して居るかと言へば矢張り駄目なんだ、斯ういふやうに人間といふ者は他の者が自分に言つて来た時にさう思ふ、幾つもの嘘が出て来る、もう此方では厭が来て、彼奴は辯護の仕様鹽梅が變だ、何も嘘でなかつたならばあんなに辯護する必要はない、何うも辯護する言葉が其儘嘘たるを證明して居る、だから彼奴は不可ぬ奴だといふので遂に露れる、だが人間といふ者は變な者で、初めてが大事である、初めに自分の方からやあ誠に飛んだ失策をした、之から氣を付けますから、どうぞと云へば如何にも輕いですな、夫れでまあ氣が清々して落ち着いて了ふ、處がちよつとでも間に合せに嘘を云ふ、夫れを持ち出して見るといふ

と何うしてももう押さねばならぬ、一つ之を押し切らねばならぬといふ行き掛りが此處に生じて来る、之が所謂罪惡といふものだらうと思ふ、總て罪惡の基といふものは一つ嘘を吐くといふと夫れが一つで止めないと必ず後へ祟りを残す、其祟りを残すといふ事が詰り罪惡の罪惡たる所以である、彼れは初めに自分でさらけ出して下へば夫れが何も祟りは残らぬ、處がさらけ出すのが辛い儘にちよつと間に合せをやる、さうすると夫れに引つ絡まれて飛んでもない苦痛を感じなければならぬ、苦痛を感じた丈けの事で済むかといふと、夫れが爲めに矢張り社會の信用を失ひ道徳上に夫れ相應の疵が付いて来る、此損害は一生の間非常な大事なものであると感じて居る、感じては居るが其處が變さね、何んかの遣り損つた場合に餘程に注意の届いて居る時でないといふに懺悔が出来ぬ、思はず識らずやつて了ふ、其思はず識らずやるといふのは、何んだといふと自分の心の中に未だ野心が満ちて居る證據なのである、野心の勢力さへなかつたならば直ちに其處で降参して了ふに違ひない、やあもう近頃毫碌して仕様がな、何うか勘忍して呉れと言つて了ふ、處が何しろ此方に野心がある、意氣地無しが氣の利いた風に思つて貰ひ度、斯う云ふ譯だまあ夫れ丈けの注文なんだ、實に馬鹿な話だ夫れが爲めに自分も要らない心配もし其上道徳上に大なる疵を拵へて了ふ、まあ斯ういふ馬鹿な事はない、十善法語などに依るといふと、嘘といふ

ものは口ではかりやるものでない、身體でする嘘もある、心でする嘘もある、色々な嘘があると云つて居る、身體で嘘を吐くとは何ういふ嘘梅だ、夫れは成程身體でも出来る勘定である、好く眼で知らすとか、嘘などは手真似で話を致します、だからして夫れは成程身體で嘘を吐く勘定である、又貧乏人が美しい身姿をしたり、金持が吝い貧乏人の振りをして來たり、是は身體で嘘を吐くのである、さういふ類のもので一口に言つたら胡魔化すといふことで、此胡魔化すといふ事に付いて能く文章などに濫吹といふ事を言ひます、是は胡魔化すのである、此濫吹の故事に付いて面白い話がある、夫れは韓非子と云ふ書物に斯ういふ事がある、昔齊の宣王が大變笛が御好きであつた、其笛は竽といふ笛で笛の上手な者を皆集めて何人でも抱へられた、處が段々殖へて三百人抱へた、さうして毎日夫れ等に笛を吹かして夫れを聞いて喜んで居つた、さうすると其時に一人の儒者で南郭先生といふ猪い奴が居て、自分が色々學問したけれ共さつぱり用ひられない一向詰らぬ、あんな笛を吹いてさへ御扶持を貰つて安樂に食つて居られる、是は學問などする時節ぢやない、己れも笛吹きに成りませう、夫れでまあ學問をした男だから理窟を竝へて、私は笛が鍛錬である、何うか藝術よりは其笛の理論に長けて居りますと大層理窟を言つた、夫れは成程面白、夫れぢや貴様を抱へてやると云ふのでまあ抱へられた、處が其笛吹きの仲間には三百人も

一緒にブー／＼吹く、だから先づ自分の笛丈けの事は分らぬから中へ這入つて只笛を口に宛てが  
 つて胡魔化して、夫れでちやんと御扶持を頂いた、是は巧い話だ、斯う云ふ鹽梅に吹かなくちや  
 世の中は詰らないと思つた、毎日／＼笛を胡魔化して来た、其胡魔化を濫吹といふ、其大勢の中  
 に這入つて出来もしない癖に口の處へ笛を押付けて夫れで以て意張つて居つた、處が宣王といふ  
 王様が御亡くなり成つて晏王の御代に換つた、齊の晏王はなかく／＼鋭敏な人で其胡魔化も利か  
 なくなつた併し先代の人を抱へられた者であるから、三年父の道を改めざる是を孝といふべし  
 私 は笛は餘り所望ぢやないが兎も角も自分の親が好きで用ひたものだから其通りに吹いて貰ひ  
 度いといふ、斯ういふ事で皆安堵致した、處が先規の通りで宜いが、併しごちや混せに吹かれた  
 のちや何う云ふ音曲があるか何ういふ處が面白いのか 私には分らない、今度は是非一人／＼に  
 吹いて貰ひ度いものであるといふ注文をした、丁度臨時試験に出會したやうなものだ、さうする  
 と王様の前に出て皆順番に吹いた他の者は皆笛が上手であつて抱へられたのだから一向差支へな  
 いのですつと吹た、愈々今度理窟を言つた南郭先生の番に廻つて来た、今度は笛を口に押付け  
 たのちや何うしても間に合はない、とう／＼逃げ出して了つたといふ話がある、詰り言ふと何時  
 の世の中まで何うも胡魔化すといふ事は絶えないものだといふ事を此韓非子といふ男が詰つたも

のだ、斯ういふのは體身で嘘を吐いたとも言へると思ふ、胡魔化が澤山ある、又心で嘘を吐くと  
 云ふのは何んな鹽梅だと云ふと、人は必ず一定の方針を定めなくちやならぬものである、一旦方  
 針を定めたものが都合が悪く成つたからと言つて止めて了ひ、さうして前の方針を無駄にして了  
 ふといふのは、之は自分の心を欺くものである、心に嘘を吐くといふのは斯ういふ鹽梅のもので  
 ある、其引例として、吳の季子の事が引いてある、春秋戰國の時の吳の國に季子といふ人があつ  
 て、此季子はなかく／＼偉い人だ、此人が吳の殿様に吩咐つて國々を訪問しに出掛けた、其時分の  
 支那の各國は皆分立して居る時分であるから國と國との交際がある、丁度今日の萬國交際と同じ  
 やうな國と國との交際がある、其處で此の國から他處の國へ使を遣す事を信を通ずるといふ、其  
 信を通ずるといふやうな事で國々に大名を訪問して來い、斯ういふ殿様の名代で國々を訪問した  
 之は餘程重い役を吩咐つた事になる、最初に訪問した國は徐といふ國であつた、さうして殿様に  
 御目通りを致して、自分の國の殿様からの御申傳への事を申し上げた、其面會の時、徐の國の殿  
 様は季子が腰に帯びて居つた帶劍が如何にも立派な飾であつて、夫れが非常に眼に着いて頻りに  
 じろ／＼と眺めて居られた、其處で季子自分の心を推察してあ、是は私の帶劍を所望ぢやな、  
 御所望であるならば進呈致しても宜い、進呈しませう、併し乍ら今は使の出先きである、是を此

處で進呈して了つたのでは使の役目が勤まらなくなつて了ふ、何れ此御用を済ました後に再び御尋ねして、さうして此劍を進呈する事にしやう、斯う自ら心に極めた、併し口に出さない、心に丈けで極めて、夫れから御別して他の國を順に訪問して來まして、愈々御用が濟んだ歸り掛けになつて是で御用が濟んだ、豫ねて自分の心に決した事だから此劍を一つ徐の君公に進呈して行く事にしやうと思つて徐の國へ立寄つて見ると、豈計らんや殿様は既に亡くなられた、大變力を落して夫れは誠に残念な事であつた、兎に角御墓なりとも御参りして行かう、で御墓へ御参りして自分の刀を進呈しやう、今度は他の用事はない、唯君公に此刀を進呈しやうといふので立寄つた處が死んで了つた、死んで了つては到底差上げた處で駄目であるけれ共、一旦極めた心を今取換へるといふ事は自分の心に濟まぬ事である、假令君公は亡くなつても進呈しやうと決心したから進呈して行かうといふので、夫れを墓場に掛けて、さうして生きて居る人に物を言ふやうにして夫れを進呈して歸つたといふ事が歴史に書いてある、斯ういふのは全く心に嘘を吐かぬやうに道徳を守る事が出來た人であるといふ鹽梅に褒めて居りますがね、併し未だ口に出さぬ事ならば之は随分私共好くあります、何か自分の心の初めの間好いと思ふやうな事を考へ出して是非共之をやらねばならぬと思ふ、處がやつて見るとなかくさう巧くいかない、之は何うしても遣り切

れぬ、斯う断念して了ふ事が好くある、さういふ事になると折角定つた事が嘘を吐く事になる、又人間の自身の都合といふ事に依つて一旦定めた事を都合に依つて断念して了うといふ事では何もかも出來やしない、凡で蛇蜂取らずに生涯を送つて了うといふ事になる、だから最初に一つ決心した事は假令何のやうな困難があらうとも、是を飽迄一つ遂行するといふやうに遂行せんければならぬものであらうと思ふ、其處で遂行すべきものを遂行しないと、詰り自分の心に嘘を吐いた事になる、自己の心を欺いた事になる。だから其處に一つの道徳の疵が付いて自分の身の發達させる事が出來ぬやうになつて了ふ、如何にも残念な事である、だから此自體心の上にも嘘を吐くといふ事があるから、其嘘を慎まんければなるまい、斯ういふ鹽梅に十善法語などの上ではひどく戒しめてある、さうすると此嘘といふ事が、何處が基で嘘吐きでないとの分別目が出来て來るかといふと、矢張り精神の修養に基く、何時でも御話する通り、色々心の中の方には私利私慾手前勝手と一方には良心の兩方面がある、其處で良心の指圖に依つてやる場合であるといふと、夫れは罪惡にならない、是に引き換へて私利私慾手前勝手の指圖に依つてやるといふと夫れは全く罪惡になる、此處が分れ目になつて居る、同じ嘘を吐いても全く親切の氣が慈悲心の上より止むを得ずして吐いた嘘ならば却つて功德になる、さうするといふと我々が心で

嘘を吐くなんといふ事もさうでせう、始は何んか道理に叶つた好い事に付いて一つ目的を立てた處が手前勝手と照合はして見ると、何うも都合が悪い、さうするならば宜いには違ひないだらうが何うも夫れちや私の都合が悪い、何うも兩立しないから仕方がない、まあ一方暫く断念するといふ事になる、さうすると茲で罪惡になる、此手前勝手の爲めに其目的を断念した奴が是は全く妄語である、此手前勝手で目的を立てた事を親切な心で之を取り變へた場合には何うするか、さうするならば過て改むるに憚る勿れといふ、却つて善良なる行ひになつて来る、さうすると御互が罪惡になるか、功德になるかといふ分れ目は何處かといふと、我々の精神の一つに在るといふ事が明かに證據立てられて来るのである、是に就いて斯ういふ話がある、あの司馬溫公といふ人は、是は道德家であります、處で其同時代の人で劉安世一名劉忠定といふ道德の心のなかなかある偉い人があつた、或時に劉安世が司馬溫公に向つて貴君の御行狀は感服である、人間はさうあり度いものだ、私共も何うぞ貴君の眞似をしたいと心掛けて居りますが、どうもさういふ鹽梅に行かぬ、併し夫れには何か肝要な心得といふものがあるものであらうか、何うか一つ簡單にして一言にして生涯守り果せる丈の事があるならば、御示しを頂き度いものだ、道德を守るに就いて何か簡單に縮めて生涯守るべきものがあるならば一つ教へて頂き度いといふと、司馬溫公

は、唯誠あるのみといはれた、誠實を御守りになれば、總ての事が皆好く行へます、夫れはさうであらう、誠實といふ事は何んだ、私利私慾の手前勝手を壓へ付けて了つて親切な心一方にして了ふ、夫れが詰り誠實といふ事だ、さうさへすれば、眼も鼻も口も身體も皆親切な心の指圖に依つて動く、する事なす事善き行ひになつて来る、是は當然な譯だ、其處で劉安世も成程御尤もだ誠といふ事を心掛けて宜いで御座いませう、併し此誠と云ふ事もなか／＼範圍が廣いもので非常に激烈な誠もあるので、又嘘を吐かない丈の有りの儘といふ誠も御座いませう、一概には言へませぬ、其誠と言ふものをやるには何ういふ處から先に始めたら宜しう御座いませうと問ふた處妄語せざるより始めよ、先づ嘘を吐かぬといふ事から先に御始めなさい、此嘘を吐かぬといふ事は何方かと言へば樂な事だ、嘘を吐くには幾らか考へなくちや嘘は吐けない、有りの儘見た事は見たといふ見ない事は見ないといふ、斯んな樂な事はない、嘘を吐かぬといふ事から御始めになるが宜い、是は極く簡單な事である、さうですか宜しい、夫れでは私は是から嘘を吐かぬ事に致しませう、劉安世は其心持は馬鹿な事を言ふたものだ、私は平生餘り嘘などは吐かぬ酒の嫌いな者に禁酒をしるといふたやうな話、まあ宜しう御座います私は終身決して嘘を吐きませぬと斯う極めて了つた、處がさあさういふ約束をしてからだ、其約束をしてから嘘殿が出て来て困つ

た、さうすると其前から嘘を言つたのだけれ共夫れは皆嘘を嘘とも思はずにやつて當前の氣で嘘を吐かない約束をしたものだから、忽ちに非常な衝突が出来て来た、家内の中でも女房や子供等にちよこ／＼嘘を吐いた、是は大變な事をして了つた、何うしたら宜いか、是は捨を戻すには謝るより外ない、随分極りが悪い話だが仕方がないから自分で自分の妻君にでも子供にでも嘘を吐いたからには仕方がないから今のは嘘だつた、何うぞ勘忍して呉れ、是丈けは遠慮なくやつたといふ、けれ共、是はなかく億劫な話だ、嘘を吐くと夫れの拭ひをし始末をしなくちやならぬ、始末をしなければ司馬温公に誓つた趣意が立たなくなる、是は飛んだ事をした又嘘が出て何うぞ勘忍して呉れ／＼と謝つて居る、斯んな事を何うして嘘を吐いたか、今度は何うしても此嘘を早く止めて了はねば困ると齒切り噛んで一生懸命にやつたけれ共、其場合に會はずとちよこちよこと嘘殿が出て来る、終ひには口元まで出て来た奴を噛み潰して了つたり、まあ呑んで了つて外迄出さないやうにして、段々慣れて来たならば終ひには心にもちよつと浮んだものをちよつと拈つて了ふ、終ひには心の中で揉み消しが出来たといふ、慣れて来たら遂には打遣つて置いても嘘は出て来ぬやうになつて大丈夫になつた、併し其年限が何れ丈掛つたかといふと七年程掛つた嘘の癖を引つこ抜くのになかく長い手数が掛つた、我々なども餘程前からやつて居るが幾分か得

たと見えても本當には未だ抜け切らない處があつて自分乍ら殘念に思ふ、兎に角劉安世は七年の年月の間に其嘘をすつかり引つこ抜いて了つた、もう夫れ以上揉み消しも何もそんな必要ないことになつたといふ事は是は實に立派な修養であらうと思ふ、心に掛けさへすれば御同様出来ぬ事はないので御座います、語り言ふと此安語と誠實との關係は何處にあるかといふと、溯つて考へれば自分の精神の向け方如何に在るので其精神の向け方とは何んだといふたら何時でも御話する通り親切と私慾と兩方ある、其私慾の中にも虚榮心といふ奴もある、又得を取らうといふ奴もある、其得を取らうとか儲けるとかいふ慾張りの方は執拗いけれども是はちつと言ふ事が喧しくなつて大きくなるから此方は言はないが、虚榮心の上から来る奴は何んとも思はずにちよこ／＼やつて了ふ、此ちよこりちよこりやるやうな細な事が口にも唱へ、身體にも起つて居るやうである、彼の細かな奴が油断が出来ない、夫れで平生に於て自分の心の中に浸付いて居る私利私慾手前勝手と親切とは兩立が出来ぬ事だから、手前勝手なるものを一つ征伐せんければならぬ、是を征伐するには所謂誠實を以て育てる、其誠實を以て育てるには何うするか、其處が信仰である、此誠實と云ふのは信心の誠である、信心は各々其自分の心の方へ受込んで之を我物にする、其誠實を我物にすると云ふ手續きが信心と云ふ事になる、其信の字は受け込むといふ意味になる、其處で何

うしても全くの精神の修養を根柢からしやうといふと此信仰に訴へて修養するといふ事にならぬといふと、何うしても根柢のある修養は出来ない、處が人の弱點を利用して、さうして誠實を守らせやうといふやうな事が、詰り言へば一時的の第二の手段であつて、其第一の根柢に溯つて見れば何うしても我々の心の根柢から信仰を起して、さうして此誠實を我物にして初めて自分の精神を全きものとする事が出来る、此精神を全きものとする事が出来て初めて眼も鼻も口も皆親切になる、親切にやつて之に動かぬものはないから、人を誘引する上に於ても社會の爲に盡す上に於ても此親切を根柢として常に行うやうにしたならば、是が社會の爲めになると同時に、又自分の道徳をも高めて行くといふ事になる、自分を利する事は無論の事のみならず、之が自分の道徳を修める所以となる事が出来るだらうと思ふ。

### 眞樂と綺語

眞樂と綺語と云ふ事は十善に關係がある、十善と云へば體で三つ口で四つ心で三つ、それを上手に使へば十善、下手に使へば十惡、斯う云ふ關係になる、それで口でする惡作が四つある、妄

語、綺語、惡口、兩舌、大體に括つて見ると口でする惡作が四つある中の綺語と眞樂と云ふことに就てお話をしてみやうと思ふ。

綺語の綺の字は糸偏に奇妙の奇の字を書いてある。飾ると云ふ意味で言葉を綾飾ると云ふ意味であるから、能く考へると罪惡とも思へないやうな氣持がする、殊に是は頓智の好い人とか智力の鋭い人が割合に犯し易い科である、そこで大體に分つて見ると綺語の中には慾張りの方から飾るのとそれから慢心の方と、自惚根性の方から飾るのと二通りある、それが皆罪惡の因と爲る、それで其異名を云へば無義語雜穢語など、云ふ名前がある、詰り綺語と云ふことは大變興味のあつたもので鳥渡戀意な間柄では何か言ひたいやうな氣がする、唯眞面目腐つたことでは面白くない何か一つ變つたことを言つて見たい、是は人間の特性と云つても宜いかと思ふ、ところが先般來私が旅行しました汽車の内などで二三人の氣の利いた連中が乗つて居る、わい／＼言つて面白い話をして居る、聽いて見るとなかく興味がある、併ながら大勢がどつと笑ふやうな場合には其中の一人が頭を下げて面白くないやうな顔付をして居る、其時に私はさう思つた、是は皆が斯んなに腹を抱へて笑ふやうなことが出来る、其中の一人は面白くないことが出来る、是が綺語の過失なる所以か知らんと云ふことを感じた、一同が皆共に喜ぶと云ふことは滅多にない、人の

過失を認めてそれを素破抜いた時分に大變面白い、だから其中に非常な不興の顔付をする者が一人出来る、不興の顔付をする者が一人出来る、他の側が腹を抱えて笑ふ、そんな趣向になつて居る、是が綺語の過失を云ふのか知らんと其時に感じた、それから其笑ふと云ふことに近頃は雑誌や何かの雑誌と云ふものがある、あれが大變流行る成程にこゝは宜いには違ひない、七福神の顔を見てもにこゝだから宜い、併ながらにこゝ式が必ずしも善事であるかどうか是も大に考へて見なければならぬ、若も泥棒根性を持つて居る者がにこゝする時分はどんな場合であるか、何か狡い事が旨く往くときににこゝする、横着な者がにこゝするのとはどんな場合か、人を謀る者がにこゝするのとはどう云ふ場合か、斯う云ふことを考へて見ると必ずしもにこゝが善事と云ふことは言へない、其にこゝするときに其半面には非常な害毒を世に流して居る、さう云ふ事情がなかく、私は少くないことであらうと思ふ、さうすると云ふと何んでも人間はにこゝでなくちやいかぬと云つても其にこゝに次第があつて、餘り下手な變つたにこゝをしようと詰り何もかも代無しにして、それだからにこゝの上にも餘程注意を要することがあるだらうと思ふ。

それで或る書物を見たら面白いことが書いてある、此笑と云ふことに付ていろゝな笑方の種

類が擧げてある、五つばかり笑ふ意味の種類が擧げてある、第一に歡喜笑、是は當然の笑方です、それから其次におかしいのがあります、瞋恚笑と云ふのが擧げてある、腹立つて笑ふ、其次には無人笑と云ふ笑がある、誰も居ない所で獨り笑つて居る、是は獨笑、とても云ひませう、それから見異事笑、何か異つたものを見て笑ふ、それから見羞耻笑、何か人の羞しがることを見て笑ふ、此五通りの笑方が擧げてあります、瞋恚笑と云ふのは私には分らぬ、膨れ面して笑ふ、人間が笑ふのには頬邊が動く、頬邊が突張つたのでは笑はれない、併し今日でも苦笑と云ふことを云ひますが、此瞋恚笑と云ふのは蓋し今日で云ふ苦笑の意味でないかと思ふ、それから無人笑——獨り笑ふと云ふのは是は學者などの上に多くあることで、哲學者或は吾々のやうな宗教の信仰でも持つて居るやうな者がどうかすると獨りで笑ふことがある、大變に獨りで興味を帯びて獨りで嬉しがつて居ることが度々ある、さう云ふものは格別害が無い、それから見異事笑——異つた事を見ることと笑ひたくなる、非常に變つたものを見ることが好きでさうして笑ふ、是は随分害のあることです、之に就ておかしな話がある、左傳であつたか周の幽王と云ふ天子様が褒姒と云ふ寵姫を持つて居つたが非常な別嬪であつたので非常に愛した、ところが褒姒と云ふ婦人が非常に別嬪ではあるが一寸も笑はぬ、之を是非とも笑はして見たいものだ、彼が笑つたならば一層の美が増す



だらう、どうにかして笑はせたいと云つていろ／＼面白いことを言つたり藝人を招んだりしていろ／＼やつたが決して笑はない、どうしても笑はぬ、ところが人間と云ふものは妙なもので、さう云ふ希望が起つて来ると何とか工夫して笑はして見なければ此方の氣が濟まぬと見える、それで萬法と云ふからいろ／＼と工夫したけれども何分にも笑はぬ、そこで其時幽王が他の諸侯と約束がある、何か臨時に出来事のある時は烽火を揚げると云ふ合圖がある、何んとしても褒姒が笑はないから一つ烽火を揚げて見やうと云ふのでど／＼んとやつた、さうすると遠近の諸侯が驚いて軍隊を引連れて都へ皆上つて来た、ところが何も無い、何事でござる、何も無い、そこで皆怒つてぶつ／＼不平を言つて歸つてしまつた、其不平を言つてぶつ／＼云つたのが非常におかしかつたと云つて褒姒が初めて笑つたと云ふ、それから幽王がこれでなくちや笑はぬと云ふので笑顔を見たいために始終どん／＼やつて居つた、仕舞には誰も來なくなつてしまつた、さうしたところが其後西戎と云つて西の方の犬戎と云ふ戎が反逆を起して都へ攻上つた、其時本統の烽火を揚げたけれども誰も出て來ないので幽王が遂に犬戎のために殺されてしまつた、褒姒も犬戎のために生捕になつて連れて往かれたと云ふ、斯う云ふことが支那の歴史に書いてあるが餘り變つた事を見たがると斯う云ふことがある、それだから見異事笑などは餘り褒めたことでない、害が

多くて得がないと云ふことは明かである、又見羞耻笑と云つて人の羞しがることを見て笑ふ、是は大に慎むべきことでさう云ふ事を考へて見たならば随分いろ／＼あるだらうと思ふ、だから此のに／＼と云ふやうなことが必ずしも宜いとは云へぬ、人間として此笑ふと云ふことは大變衛生上にも宜いとか何とか云ふ、それは成程衛生に適ふやうな良い笑方もあるに違ひないけれども一方にはさう云ふ害も亦ある、それだから此歡喜笑などは是は至極宜いだらうと思ふ、衷心喜んで笑ふ、是は實に適當な笑方で此五通りの中で一番採るべきものが歡喜笑であらう、併ながら其者が笑ふ場合にはどう云ふことになるか、其根柢に遡るときになつて來ると精神の修養と云ふことが必要になつて來る、精神に悪習慣があり悪希望を持つて居つて其希望を充したから笑ふと云ふことになると自分でも損をし多くの人にも損を掛ける、さう云ふやうなことが必ず出來て來るに違ひない。

併し斯う云ふとそんならば言葉を飾つて人を笑はすと云ふやうなことは徹頭徹尾悪いことであるかと云ふと必ずしも悪いとはかりも云へないだらう、何せかと云ふと佛のどの戒法にもありません、善いことを止める場合がある、又道理の上に於て差支ないことを危険である裏面に害の有る

ことだから止せと云つて遮つて止める場合もある、どうも一概に善いことだから構はぬと云ふ譯には往かぬ、それだから昔から極く智慧の優れた人が自分の主人に異見を言はうと云ふやうな場合に、どうも四角四面に言つたことでは容易に通らぬ、又向ふがそれを用ひて呉れない、さう云ふ場合に滑稽諧謔を以て暗に之を諫めると云つたやうなことがなかく、斯う云ふ場合の綺語は、私は結構なことであるだらうと思ふ、一例を言へば太閤様に對する曾呂利新左衛門の如き或は漢の武帝に對する東方朔の如きなかく、旨いことを言ふ、さうして戯談の中に道理を覺らせる、あゝ云ふやり口が至極結構であらう、併ながらあゝ云ふことが誰にもやれるかと云ふ譯にはいかぬ、餘程天才を持つた特別な人間でないことやられない、それを凡庸者が真似してやらうものならば、所謂鶉の真似をする鶉水を吞じと云ふことを能く言ひますが、飛んでもない大失敗をやらかす、凡庸者は凡庸者らしく正當の道を履んで行くの外はない、何れにしても此綺語は何の爲めに必要かと云ふと向ふの相手方の心を喜ばせるためだ、それがために此綺語と云ふものが必要になる、假令善い飾る言葉にしる、悪い飾言葉にしる相手方の感情を害さないやうにして自分の希望を達せやうと云ふ、ところが多くは貪欲の方から出ると追従輕薄になる、人から物でも貰はうと云ふ場合に追従する、あなたの所には結構なものが澤山あつてお仕合でございませう私

などは良いものが何も無くて困りますなど、追従輕薄を言ふ、そんなら一つ上げませうと云ふこととなる、斯う云ふやうな按排に飾つて来るのは慾張の方から飾つて来る、自惚の方から飾るのも亦なかく、少くない、旅行などをして見ると氣の利いた連中の言ふのは大抵傲慢から出て来る君の帽子はどうしたとかそれはえらいとか變挺だとか何んとか所謂綺語嘲時でございませう、嘲時の時の字には面白い字が書いてある、口扁に上下と書いてある、人を上げたり下げたり褒めたり悪く言つたりして人を冷かす、互ひに冷かしくなで向ふ様を素破抜いた時分に自分が腹を抱えて笑ふ素破抜かれた人は一本參つたと云ふ譯で變な顔をして居る、向ふも笑ふ此方も笑ふと云ふ双方共に歡んで笑ふと云ふ笑ひは割合に少い、一方が勝を占めれば一方は敗北すると云ふ譯で詰り勝敗に就て互に笑つて居ると云ふやうな按排式である、そこで少しぼんやりした顔付をして居ると何とか調時つて見たいやうな氣がする、君は非常に眞面目ぢやないか、どうしたんだい、ちと何んとか云つて見たまへなど、調時ふ、或は向ふの言葉尻を捉へて冷かすと云ふ風に綺語は詰り云ふと傲慢と云ふ自惚根性所謂虛榮心の方から起つて来る飾言葉です、若しこれが全く親切なる心の上からしてどうか彼の人の非を懐めさせてやりたいものである、併ながら氣の小さい男だから正面から過失を指摘したならば却て感情を害する、甚しきは腹でも立てるといけなから遠慮

しに滑稽戯談の上から彼に其非を覺らして善い人間にして上げたいと云ふやうな親切心から起つて来る飾言葉であつたならば決して害が無い、曾呂利新左衛門だの東方朔だのと云ふ人の滑稽のやり口は皆其處にあるやうです、例へば太閤様が朝鮮征伐をする場合に曾呂利新左衛門が斯う言つて諫めたことがある「太閤も日本の米を買ひ潰し今日もごとかい明日もごとかい」毎日御渡海御渡海で呆れ返つたものだ好加減にしたら宜うございませうと云ふ意味、太閤は傲慢強情の男でどうしても朝鮮を踏臺にして支那を取つて支那を我物にしたいと云ふ、それが曾呂利から見ると氣の毒で堪らぬ、愚圖々々して居ると自分の家を代無しにしてしまふ、早く内の始末をしたら宜からうと云ふ所から「御威勢で三千世界手に入らば極樂淨土われに賜はれ」太閤の威光で三千世界が御手に這入つたならば其中の極樂淨土だけ頂戴をしたいものだと云ふ、迎も出来ないことである、と云ふことを彼に覺らせやうと云ふので、斯う云うやうな滑稽で異見を言つた場合などがある、さう云ふやうな按排に親切なる心の上から旨く出来て往くのであつたならば、それは決して差支があるものでない、却て是は功德になる所の綺語と云つて宜しい。

と、云つて人間は御機嫌の悪いのが甚だ宜くない、どうしても人間は自分の御機嫌を善くして置く、と云ふことが必要である、併ながら自分の機嫌を善くするにはどうするかと云へば、餘りに

無理な希望を起したならば決して自分の機嫌を善くすることが出来ない、無理な希望を起せば外れるに極つて居る、外れれば甚だ不愉快なものである、忌々しくなる、詰り不平不足が次から次へと續發して往く、それでは何時でも御機嫌の善いことはない、之に引替へてそんな無理な希望を起さずに詰り道理に従つて事を遂げやうと云ふ希望を持つて今日自分の現在の立場を喜んでそれに満足をして、さうして將來に向つて希望を囑し尙自己の現在の立場に就ては責任を重んじて之を勉めて往くと云ふことが出来さへすれば宜い、今日自己の責任を全うすることが出来るのは是非非常に有難いことである、其有難いと感ずる心の中には不平不足がない、現在他から見ればどのやうな苦痛と思はれることも其身に取つては苦痛に感じない、是は今日自分の立場として是非務めなければならぬことである、之を無事に務められると云ふのは實に有難いことである、又將來に向つて斯う云ふことを是非仕遂げなければならぬ、それに對しては其前因として斯う云ふことを務めて往きたい、斯う云ふ希望を持つて日々努めて往き自己の立場に満足して往くと云ふことであれば飽迄責任を全うしにこゝが出来る譯である、其自己の責任を全うしたいと云ふのでこゝして往くのは決して他の障りにならない、獨り自分の爲めに大變宜いのみならず他の爲めにも大變御都合が好いことになる、是に於て初めて眞の樂が得られるであらうと思ふ、然

るに綺語などと云ふ危険な言葉を藉りて、さうして自分が樂を求めると云ふことは實に危いとて、是は深く慎むべきことである。

そこで樂は苦の反對で誰だからとて苦を好きな者はない、亦樂を厭がる者もない、だから世界中の生物は苦を離れて樂を求め、希望する、ところで其樂と云ふものはどう云ふ場合に成立つかと云ふと、自分の心の中に欲望がなければならぬ、斯うしたいあつたいたいと云ふ「たいたい」の起つたときにそれが望み通りに出来る場合に快感を感じる、まあ宜かつたと云ふ風に愉快を感じる、それと反對にどつこいさうはいかぬと云ふことになる、非常に苦痛を感じる、さうすると云ふとお互に希望と云ふものがなかつたら苦も樂も何もなくなる、希望と云ふものがあつて初めて樂もあれば苦も此處に出来て来る、然らばどんな事でも自分の希望の起つたとき、やりたいと思ふことをやり遂げれば樂と言ひ得るかと思ふと云ふと縦令どんな事でもやりたいと思つたことをやり遂げさへすれば悉く樂と名けると云ふことが私には出来まいと思ふ、其時に於て樂を感じるかは知らぬけれどもそれは後に憂の生ずる樂である、後に憂を持つて居る樂であつては眞の樂ではない、謂はゞ偽りの樂である、眞の樂と云ふときには其後に憂のない徹底した樂でなければならぬ、それでなければ眞の樂とは云へない、やつたは宜いが其結果直ちにそれがために後の憂を起

すそれでは苦の下拵だ、苦の下拵を樂と思つた日には飛んだ間違が起る、自分が樂だと思つて居つたところが豈料んや次から次へと苦の下拵をして行く、それを好い氣になつて續けた日には次から次へと苦の下拵をしなければならぬ、其結果はどうなるかと云へば餓鬼道の苦に陥る、それなら眞實の樂はどう云ふ所にあるかと云ふと佛様のお言葉に「諸苦所因貪慾爲本」とある、試みに苦の種となる所のものは何か、貪慾と云ふものが其土臺だ、此貪慾と云ふものが根柢であるから慾と云ふものをなくしなければならぬ、慾には善い慾もあり悪い慾もあるが貪慾と云ふのは悪い慾である、此慾の上から望を起したならば到底眞の樂は得られぬ、次から次へと苦の下拵へをしなければならぬ、ところが同じ慾であつても貪慾でなく公慾であつたならば是は全く眞の樂の土臺になる、公慾とは何か、是は俗に言つたならば親切と云ふことです、同じ慾でも唯食ひたい唯飲みたい唯やりたいと云ふ譯でない、斯うもして上げたいあつてもしてやりたい、同じ「たいたい」でも大分違つて居る、さういふ風になつて来ると公慾になる、阿彌陀如來の淨土極樂と云ふのは何んで出来たかといふに、阿彌陀如來の大慈悲則ち公慾が根柢になつて竟に極樂と云ふ世界が成立した、ところが此娑婆と云ふ所はどう云ふ所かと云ふと私利私慾の手前勝手な根性を持つて手前勝手な事をするのが此娑婆の有様である、之に反して佛の極樂淨土になると總て道理

に従つてやるから見るもの聞くもの皆親切にするやうに出来て居る、それで手前勝手が消えてしまつて後に残るのが親切だ、お互に親切を盡し合うて行ける世界だ、だから苦はない樂ばかりだ、是は地獄極樂と云ふて遠い話では分らぬ、之を近い所に下げて来て話をすれば解る、親子兄弟夫婦と云ふものは切つても切れぬ間柄であるが互に手前勝手な事を言ひ合つては樂しく暮すと云ふことは到底出来ない、之に引替へて赤の他人でも互に親切を盡し合へば寔に樂しく暮すことが出来る、此一事を以ても分る、して見ればお互に眞の樂を得やうと思つたならば其根柢を拵へるより外に途がない、又此希望の起し按排といふものは非常に大切なことで此希望の起し按排で總ての境涯ががらりと變つて来る、それに就て斯う云ふことがある、瑜伽經と云ふお經の中に菩薩の修行に忍辱の行と云ふ修行がある、忍辱行と云ふのは俗に言へば忍耐の強いことである、菩薩が忍耐と云ふことを是非やりたいと云ふ望を起す、ところが忍耐といふことは面白くないことである、食べたいけれども我慢して食はない、腹立つけれども我慢して腹を立てぬ、辛いことだけれども其辛いことを耐へるのが佛になる本だ、辛いことだが是非やつて見たい斯ういふ望を起す、斯ういふ望を起すといふと總ての境遇ががらりと變つて来る、今迄は自分の言ふことをへいへいはいへいと聞いて呉れる者が非常に慕しかつた、又さういふ者を大變親しく思つた、ところが此

忍耐を是非やりたいといふ望を起したがためにへいへいはいへいと服従する者はそんなに慕しくなくなつて来た、却て自分に逆つて衝突いたりする者が戀しくなつて来たといふ、おかしい話だ、服従する者が憎い譯ではないが服従するよりは抵抗する者の方に何となく近いて見たい氣持がしたといふ、斯ういふ按排に境遇が變つて来た、ところがさう變らなければならぬ勘定で、忍耐といふことを是非やりたいといふのであるから、へいへいはいへいと服従する者を相手にしては忍耐が出来ない、忍耐をやらうと思つたら何んでも自分の言ふ通りになれば駄目だ、お客にならぬ服従する者は忍耐のお客でない、抵抗する者があれば、一初めてお客様がおいでになつたといふ譯である、逆つたり衝突いたりすれば是でまあ一つ儲けたといふことになる、却て自分の方から逆つたり衝突いたりする者を歓迎するやうになる、此は忍耐といふことを是非努めたいといふ希望を起した結果なんです、服従する者はお客にならぬ抵抗する者があつて初めて忍耐のお客になる、それだから是は御粗末には出来まいといふことになつて来るのである。

茲に斯ういふ話がある、是は自分の編んだものか或は人の拵へたものか解らぬが或る雑誌に出て居るが、有名な「ソクラテス」の話、彼は西洋哲學の元祖で西洋の大聖人といはれる人で常に忍耐といふことをお心掛けになつたといふ、ところが「ソクラテス」はあゝいふ結構な人であり

ながらどういふ宿世の因縁か其細君といふ人が非常な碌でなしで、何んでも自分の夫の言ふことを聞かぬ、逆つたり衝突いたりばかりする、右といへば左、左といへば右、實に始末に了へぬ夫人であつた、或時門人が出て來まして夕生今日はお差支ございませぬか、何も差支がございませぬ、それでは一つ御同伴をお願ひ申します、さういふ譯ならば參りませうと約束した、それから仕度をして今日は斯ういふ譯で餘所へ行つて來ると細君に言つたところが直ぐ反抗した、いけませぬ、今日は家に用があると言ふ、さう困つた、確かに行くといふ約束をした、そこで細君が反抗したけれども「ソクラテス」がお前が何んと言つてもお前の聞いて居る所であの通り約束をした、お前が今反抗したからといふて往かぬといふ譯にはいかない、何んでもかんでも往つて來ると言つて出掛けた、細君は非常に怒つた、己れが是だけ言ふのに聞かぬといふのは怪しからぬ、打棄つて置く癖になる、といつて腕づくでは男に敵はぬ、何か物があつたら遠くから叩き付けてやらうといふので四方を見たが何も適當なものがない、其中に玄關から「ソクラテス」が出て行つた、仕方がないから二階から何か叩き付けてやらうと思つて二階へ上つたが何も好按排のものがない、ところが丁度其處に下女が雜巾掛けをした水か何かバケツの中に残つてあつたので、玄關から出て來る所を二階からさぶと浴びせた、「ソクラテス」が後振返つて見て怒つた顔を見せ

ない笑ひながら——此笑ひ顔は苦笑ひだつたらうと思ふ、いくら「ソクラテス」でも喜んで笑ふ譯に往かなかつたらう、兎に角頭から雜巾水を浴びせられて笑つたといふ、笑ひながら今日は娘の大雷だ、雷の後で夕立の來るのは當り前だ、私が雨傘をさすに出掛けたのが悪かつたなと言つて出を行つた、そんなことが度々あつたといふ、随分ひどい話である、そこで他の門人達が見兼てどうもあの結構な先生を毎日虐めて居る、實に先生がお可哀相だ、さぞお辛いことであらう、あの細君を先生に離別させて良い細君を貰つてやらうぢやないか、それが宜からうといふ相談が出来た、君言ふが宜い、言ひ悪い、そこで仕方がないから先に立つた者が總代になつて「ソクラテス」に細君の離別勸告を訴へた、先生洵に申上兼ねますが先生は實に結構で在らつしやるけれども、どうも奥さんのすることをお共は見居られませぬ、さぞお辛いことでせう、随分辛い、左様でございませう實にお氣の毒に存じます、世間に女がない譯ではありませぬから先生細君を離別なすつては如何でせう、さうすれば私共がどんな工夫しても良い奥さんをお迎ひ申上げますからと斯う言つた、先生首を傾けて皆さんの御親切は寔に有難い何ともお禮の申しやうがない譯だ、併ながら私があゝいふ者を家に置いたといふ趣意を皆に能く聞いて貰ひたいものだ、へーどういふ譯で、別の譯でもないが私には常に忍耐といふことを心掛けて居る、ところがどう

も或る場合に於て忍耐が出来損つて困る、往々後悔することが少くない、そこで彼が日々夜々私に向つてあの通り逆つたり楯突いたりする、そこで私は其都度に忍耐して居る、私が彼を今迄家に置いた趣意といふものは忍耐の下稽古に使ふ積りで實は置いたのである、斯う言はれたので皆が閉口してしまつた、さういふ思召ですか、忍耐の下稽古にお使ひになるのですか、成程それでは立派なものでございませう、では離別の勸告は出来ませぬ恐入りましたと引込んでしまつたといふ、其細君も其事を聞いて大に耻入つて心を改めたといふことが或る雑誌に出て居りました面白いことだと思つて見たことがある。

さういふやうな譯で凡て希望といふものは、妙なものでさういふ厭やな辛いことでも此方の希望の持ちやうに依つては苦痛に感じない、それだから希望の起しやうといふものが非常に大切だ其希望は何處から起したら宜いかといふと私別私慾の手前勝手から起した希望は皆苦痛の下拵になつてしまふ、之に引替へて親切の心から起つた希望は皆それが安樂の下拵になる、さうして自分も樂しみ人にも喜ばせる、故に私はどうしても眞實の樂を得やうと思つたならば自己精神の修養をして、此私利私慾と親切とは兩立の出来ぬものであるから一方の私利私慾を制して親切なる心を養成し、而して其上から常に此望を起すやうにしたならば、する事爲す事が其儘に眞

の安樂を享けることが出来るやうになることは毛頭疑ひない、是に於て然らば貪慾を棄去るには如何にすれば宜いかといふ問題に到達するが、私はどうしても大信仰に訴へて、私利私慾を制しそして其親切なる心を佛の大慈悲といふ絶對なる親切と連絡を付けて、さうして自己の私利私慾の手前勝手の心を満足させないやうに常に工夫して行くより外に途がないと思ふ、で綺語といふことも大に座興になつて面白い事でありますが甚だ危険なものであつて、多くは罪惡に陥り易い之に反して此精神の修養を勉めて親切なる心を細々ながらも自分の體中の主人公に据付けて往くことが出来るやうになれば、凡ての希望が此上から起つて参りますから、次から次へと眞實なる安樂を享けられること疑ひない、是に至つて初めて人間の幸福を完了したと云ふことが言へるであらうと思ふ。

### 恭敬と惡口

今日は恭敬と惡口といふ標題でお話して見やうと思ふ、それは前回に、十惡業の中で、口でする惡業が四通りある、妄語、綺語、惡口、兩舌、それで前回に綺語、謂はゞお洒落を言ふやうな

こと、即ち言葉を飾ることの其反對に、眞實の樂といふものはそんな事をやらぬでも出来るものであるといふやうなことをお話致しました、さうすると順序として悪口といふ悪業がある、是は文字に書いた通り、知れ切つたことですが、併し丁度順序ですから、之に付て考へたことを一つお話しして見やうと思ふ、悪口といふものゝ反對になるべきことは所謂恭敬といふことであらうと思ふ、そこで恭敬と悪口といふ標題で今日はお話致さうと思ふ。

一體悪口いふことは、固より人の感情を害することである、所が菩薩の修業の中に四攝法といふものがある、それは布施、愛語、利行、同事、此四つの仕事がある、菩薩の修業は引括めると此四つの中に籠つてしまふ、布施といふのは、先方の爲筋を圖る、愛語といふのは親切で言ふ言葉である、それから利行といふのは、先方の利益を圖つて害のないやうにしてやる、同事といふのは其々にそれに交つてそれを導く事をいふ、斯ういふ方法を以て菩薩は導くのであるが、然るに悪口といふことは四攝法の中の愛語と正反對になる、是は佛になるべき修業を爲す所の菩薩たるものゝ爲すべき事でないといふ上から悪業の一に數へて、悪いことをせぬやうにしると御戒めになつたのである、それで此悪口といふものゝ由つて起る原因は何處にあるかといふと、言ふまでもなく、瞋恚、怒り腹立つのが抑もの始りである、憎いと、いま／＼しい

とかいふ處から多く悪口で出て来る、其次は傲慢、此上から又悪口が出て来る、それから怯弱、非常な臆病根性から出て来るのが一つある、もう一つは輕躁、輕率なこと、此上から出て来るもう一つは卑俗、習はしの悪い者が悪口を言ふ、凡そ悪口の原因を調べて見ると斯んな様な所から出て来る、其中で卑俗とか輕躁とかいふやうなのは罪の輕い方である、卑俗などゝいふのは、土地の風俗が悪いので悪口を悪口とも思はぬ當り前の事と思つて悪口を言つて居る、それから輕躁も考の少ない人ばつ／＼とした人間、さういふ人間が悪口を云ふものであるが割合に罪が輕い、それから又怯弱、非常に臆病根性の者が悪口をなかく／＼云ふものである、丁度犬が逃げながら吠えるやうな鹽梅に自分に恐れる所があつたりすると他を悪し様に悪く言ふ、それから傲慢、是は言ふまでもなく自分が善い氣になつて他を侮る心がある、それで悪口を言ふ、如何に憎いと思つても向ふが偉い人間である、其人に敬意を表するといふ場合には悪口はどうしても出ませぬ、兎に角向ふを輕蔑して自分を偉いものと思つて向むを侮る、其場合からして悪口が出る、それから人には憎いと、かいま／＼しいとかいふ瞋恚の煩惱の起つた時斯ういふ時に悪口が出て来る、悪口の起原を調べて見るとこんな所から出て来る。

それから悪口の遣方であるが、上等なものを下等に言つて見たりするのは最も悪い悪口である



それから又馬鹿を捉へて「此馬鹿ッ」といふ。是も悪口の一つである。それは正直である、當り前ではないかといふが、さうではない、人間の伶俐とか馬鹿とか、善いとか悪いとかいふのは、比較的の上で定めるものである、だから其實容易にさういふ斷定の出来るものでない、一方に見て悪い所があつても一方から見ても又探るべき所があるので一概には言へぬ、然るに其過失を認めてそれを面責するといふが如きに至つては矢張悪口の仲間である、それから悪口に又兼罪といつて悪口に輪をかけて悪口を言ふ、それから全然ないことを拵へて悪口をいふ、無い事を拵るといふと妄語といふ罪を兼ねることになる、輪をかけて言へば綺語といふ飾りの言葉を兼ねることになる、此悪口に依つて仲毀しをすれば離間語といふ罪をも兼ねることになる、此の上から言ふとなか／＼容易ならぬ罪惡で最も慎まなければならぬものである、斯ういふ上から御戒しめになつたのが悪口の有様である。

次には悪口の害である、悪口の害はどういふ所にあるだらうかといふと、それは第一に向ふの對手の感情を害して了ふ、交際も何もそれで破壊に及んで了ふ、是は至極悪い、然らば悪口は悉く悪いかといふと悉く悪いと又言はれぬ場合がある、それはどういふ場合であるかといふと佛教の中にも随分悪口がある、例へば戒法を破つた者の事を捉へて畜生と異なる事なし或は木頭と

異なる事なしといふ事も言つてある。

それで、悪口といふものは、假令自分の精神内には夫程の悪い根性がないにもせよ、どうも口に悪口といふものが出るといふと、それが爲に大變な禍が起つて来る、唯だ向ふの人の感情を害するばかりではない、自分の方に反動して、非常な禍に遭ふ事があるものだ、一例を申すと晋の元帝の時に周伯仁といふ人があつた、變人でなかく悪口の好きな人である、心に悪いことはないが、生れつきであるかどうも悪口が大好きであつた、所が此人の時に丁度總理大臣を勤めて居る人に王導といふ人があつた、此人と周伯仁とは仲が好かつた、所が王導の甥か何かに王導といふ者があつた、此王導といふが朝廷に對して謀叛を起した、此時に王導は自分の一族からそんな謀叛人を出したと云つては實に申譯がない、大臣の職に安んじて居る譯に行かないといふので、一族の中の重立つて二十餘人を率ゐて朝廷に自ら進退伺をしたのである、飛んだ事を致しました、私の一族からあゝいふ碌でなしが生まれて申譯がございませぬ如何様にも御處分を願ひたうござる、私も斯ういふ役を勤めて居るのは誠に恐入つた譯でございませぬ、何とも自分で致し様もございませぬ。然るべく御處置を願ふ、斯ういふて自分が進退伺をしたのである、さうして役所に自分は控へて居つた、所で周伯仁といふ男は王導とは平生非常に懇意な間柄であるから

王導がさういふ逆境に陥つて心配をして居る折柄なんだから、當り前ならば何とか義理をいふのが當り前なんだ、さぞ御心配でござらうとかいふのが當り前である、所が平生の全く癖ですな悪口を言つた、まあこんな飛んだ奴が出来たものだ、今年はこの奴を皆んな叩き殺して金鶏動章でも貰はうかなあといふやうなことを言つた、金鶏動章なんといふものは日本に出来たもので支那にはなかつたでせうが、金鶏動章のやうなものを貰ひたい、今年はこの奴を打ち殺して立派な勳章でも戴きたいものだ、斯ういふ悪たれ口を吐いて、其人の前を通つた、それで王導は非常に不快を感じた、人が悲境に陥つて困難をして居る時に平生懸念な間柄であるにも拘らず、あんな悪口を言つて行く不都合な人間だと思つた、けれども王導といふ人はなか／＼温厚な人であるからそんな事に付て腹を立てる程の事ではなかつたが、心では非常に不快に感じて居つた、さうすると間もなくして其王敦の謀叛が段々蔓延つて来てそれが非常に成功して来たのである、所謂君側を清めるといつたやうな鹽梅に天子様の御側に居る奴を片つ端から縛つて、兵力を持つて朝廷に打寄せて天子様の御側に今まで勤めて居つた人間を片つ端からふん縛つて了つた、さういふ大きな出来事になつて来た、さうして是まで自分に反對した者を片つ端から打ち斬つて了ふといふ騒動が出来た、すると其時に王敦は豫て自分の叔父の王導と周伯仁の間

常に結構な間柄

であるといふことを知つて居るから、叔父の懸念な人を突然斬つて了ふのはどんなものかと思つて、叔父さんに、あの周伯仁はどうしませう、彼奴も殺して了はうと思ふが叔父さんの友人であるから助けて置きませうかどうしませうかと尋ねた、すると其時に王導は何ともよく答へなかつたといふのである、其處がまあ王導の王導たる所でせう、温厚な人間であるから心には周伯仁は不都合な奴とは思つたが平生を思へば何でもないのだ、平生あんなことを言つて居つた奴であるから助けてやりたいとは思つたが、思つた切りで返辭をしなかつた、返辭をしなかつた爲めに周伯仁は王敦の爲めに殺されて了つた、それで愈々亂が濟んだ後に又王導が再び朝廷に行つて其役を勤める時に、天子様に多くのの人から差上げた書類を取調べた、取調べて見るといふと其書類の中に周伯仁から天子様に差上げた建白書が二通程ある、其建白書を読んで見ると、王敦は謀叛をしたが、叔父の王導といふ人は甚だ精忠な人であつて彼等の謀叛に與すべきものでない誠に清潔な人であるから是だけではどうか御處置のないやうにして戴きたいと、王導をして王敦と同じやうな罪人に認めさせないやうにしたいといふ、詰り王導を辯解した建白書であつた、王導を辯護して親切丁寧に説いた建白書が二通までも出て居つたのである。それを王導が見て是はしまつた、周伯仁といふ男は斯ういふ親切な人間である平生から善い男であつた、私の爲には斯くまで心配

をして呉れた人だ、それをまあ殺してしまつたのは残念なことであるが周伯仁の死んだのはあれはどうして死んだらう、言ふまでもなく王敦の奴が殺したには違ひないが、兎に角己れに向つて相談をしたのである、周伯仁を殺さうか、どうしやうかと相談した、あの時に私が一言、あれは私の友人だから殺さぬで置いて呉れといへば周伯仁は助かつたのである、自分が黙つて居つた爲に殺されて了つた、さうすると自分が何も殺せといつた譯ではないが其實自分がたつた一つの友情を發して一言言ひさへすればあの周伯仁の命を助けたものを終にあれを殺してしまつたのは私が殺したと同じ事である、誠に濟まぬ事をしたといつて、王導が大變に悔んだといふやうなことが歴史の中に書いてある、して見ると周伯仁といふ男は、心持からいふと非常に親切な善い人間である、善い人間ではあるが、生れつき悪口癖を持つて居つた、それでつい何の氣なしにやつつけたものと見える、其悪口が害になつて終に自分も殺されて了ふ、此處を以て見ると悪口といふものは心にないからといつても、悪口といふ其形が悪いのであるからして實に油斷の出来べきものでないといふことが明かに分る譯であらうと思ふ。

すると此悪口といふものは、全く曠恚、傲慢の上から起つて來ることが多い、私は日本などもさうであらうと思ふ、自分が成る程卑屈になつて縮まつて居るのは餘り善くない、といつて自分

ばかり宜い氣になつて、他を侮るといふやうなことは甚だ危険なことである、其境界が非常に面倒な話であらうと思ふ、びく／＼して萎縮してはいかぬといつて餘りに増長すれば斯ういふ禍を起す、爰に於てどうしたら宜いかといふに、どうしても恭敬といふ道を守るより外に仕方がない、恭は形の上の慎みである、敬は心の上の慎みである、心の上にも形の上にも慎みを加へる小心翼翼として注意するといふより外に途はない、殊に佛教などでは恭敬禮拜といつて佛を拜むといふことに依つて罪を滅し是より善心を生じさしたといふことも明かな事實になつて居る、小心翼々には圓かはずして勝つ、戦争をしても戦はずして勝つことが出来る、小心翼々といつても餘りに恐れて小心翼々に至つたのでは仕方がない、恐れずして此慎みを失はないやうにするといふことで此處が今の所謂恭敬といふ態度である。

それをするにはどういふ鹽梅にやつたら宜いかといふに、あの心地觀經といふ御經の中に知恩報恩といふことがある、恩を知つて恩を報ゆるといふことがある、恩を知るといふ下には四恩といつて一には父母の恩、二には師友の恩、三には國王の恩、四には三寶の恩、詰り世界中は皆な悉く有り難いものであるといふ觀念を持つのが知恩である、報恩といふのは其恩に報ゆる心がなければならぬ、其恩に報ゆる行ひとしてはどういふ事を行ふかといふと施行、施しといふもの

を行へといふ、其施しとはどういふことであるか、勿論それには財産の施しもあり法の施しもある、いろ／＼な施し方があるが、其施しといへば、自分に餘りあつて向ふの足らざるものに恵み與へてやるといふ意味とのみ今日心得て居るのである、所が心地観經の趣意に依るとさうではない、其施しといふことは其恩に報ゆる所の是が責任である、自分は世界中の有り難いお蔭に依つて今日生活を續けて居るものであるから、其責任として届くだけの親切を社會に盡さなければならぬといふ意味でやらなければならぬ、唯だ同じ施をするといふても自分に是だけの力があつて向ふに與へてやるといふ意味ではないのである、詰り自分も恩を受けて居るからそれに對して其恩に報いんければならぬといふ意味で施しを行はなければならぬ、世の中の何の仕事何の營業をするにしても、唯だ自分の都合、唯だ自分の富を貪るとか、自分が偉くならうといふだけの目的では宜しくないのである、詰り云ふと自分が偉いものになるのは何の爲めである、詰り社會に利益を與へんが爲めである、斯ういふ趣意で行かねばならぬ、すると總ての事業を勤めるのにも自分の富を貪めのではない社會に盡すのである、斯ういふ意味で行けば是が即ち恩を知つて恩に報ゆると云ふことになつて行く譯である、總て平生の心掛が此意味であれば決して恐れる意味でもなく又自分が善い氣になるといふ憂がない、自分だけが唯だ偉いものであるといふやうなことを

になると其上から終には他を輕蔑するといふ弊が生じて来る、油斷の出來ぬことになつて來るのである、茲に於て自らを慎まなければならぬ、慎むとは何であるか、自分の傲慢、自分の瞋恚を抑へる、汝の心を析伏する、是が本になつて居る、自分を反省して自分の悪い事の取調をして、こいつ油斷が出來ぬ斯ういふ奴があるからいかぬと抑へて置いて、自分の固有に備へて居る親切なる心を養成して、之を身體中の主人公に据へ立て、行くことが出來るやうになれば、他に對して惡口などいふものは自然に出て來やう筈はないのである。

願はくは御同様に一つ此精神の修養を根柢として口や身體の行作を慎しむやうに致したならば自分の爲めにも非常に結構なことである、又他の爲め、社會の爲めにも大變に都合が宜しいことで、之を自利利他の行と思ふ、詰り佛の御教は何處にあるかといふと、此惡口を慎み恭敬を全うして、益々進歩發達するやうにといふことを仰せ下されたに過ぎぬのである、御同様此惡口の害といふものを恐れ、其惡口といふものは何から生じて來るかといふと、自分の用意の足らざる所から斯ういふものも起つて來るのであるから、自分の心の用意としては身體の慎み、心の慎み、恭敬の二つを常に怠らぬやうに心掛けるのが最大急務と思ふ。